
魔法少女リリカルなのは～永遠を生きる者～

剣也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはー永遠を生きる者ー

【Nコード】

N3636P

【作者名】

剣也

【あらすじ】

来るべき破滅から世界を救う為に異世界の魔術師が「なのは」の世界へ。

己の欲に忠実な魔術師が世界を救うかたわらで己の欲望のままに行動する。

その欲望の先にあるのは救いか破滅か……

キャラクター設定（前書き）

新キャラが出次第随時最新します。

若干のネタばれの可能性もあります。

キャラクター設定

アラボルド・インデックス

(CV 神谷 浩史)

本作主人公。

通称「不滅のアラド」の異名を持つ魔術師。

元の世界ではフリーの魔術師として活動していた。

貪欲なまでに知識に執着し己の興味のある事に対してのみ積極的に動く。

魔術師としては一流で空間と時間に干渉する魔法を会得している。

その為、自らに時間停止と時間回帰の魔法をかける事でかけた肉体は老化する事無くまた、傷なども時間回帰の魔法によって自分の意思とは関係なく停止している時間に戻る為例え原子レベルまで吹き飛ばされようと元に戻る事が出来る為、事実上不老不死となっている。

その為、実年齢はすでに自分でも覚えていないが外見では20代の青年の姿をしている。

空間に干渉する能力で脳の中に特殊な空間を持ち、その中に今まで生きて来て得た情報が纏められて本人の意思で書として自由に出し入れする事が可能。

それらの情報を駆使し様々な道具を作る事が趣味でもある。

その中に聖杯があり複数のサーヴァントを使役するだけでなくサーヴァントに複数のクラスを複合する事にも成功しているが英霊で無く唯の死者の魂であるサーヴァントが殆どである為、宝具を持っていない者も多い。

また直視の魔眼も所有している。

ナターシャ

(CV 名塚 佳織)

本作ヒロイン

アラドを「なのは」の世界に転移させた神の娘。

見習いとは言え神である為、不老だが死なない訳で無い。

父の命でアラドの支援の為アラドと共に「なのは」の世界に降りた。

「なのは」の世界ではアラドに振り回されてばかりだが内心ではそんなに悪い気はしていない。

見習いではあるが神である為、人や動物に対して物理的な攻撃は禁じられている為、攻撃をしてダメージを与えると自分に返ってくるが世界のイレギュラー(転生者やアラド)にのみ攻撃が許されて

いる。

戦闘能力だけだと平均的な神の力に匹敵し空戦での近接戦闘では神の中でも上位の実力を持っている。

セイバー

（CV 堀江 結衣）

アラドが過去に出会っていた騎士の少女で死後アラドがセイバーのクラスのサーヴァントとして呼び出した。

本名はセシリア・ブランケット。

アラドを生涯の主と定めアラドの為に剣を振るう覚悟をしている。

セイバーのクラスである為、剣技を主体として戦う事が多いがそれ以外にも体術も使う事が可能。

性格は真面目でアラドからもサーヴァントの中で最も信頼されているが融通が利かずよくアラドに遊ばれている。

英霊で無い為宝具は所有していない。

キャスター

（CV 水橋 かおり）

異世界の英雄で本名はオリヴィエ・ゼーゲブリヒト。

かつて古代ベルカで聖王でキャスターをベースにしてライダーの性質を持つサーヴァント。

キャスターのクラスでありながら近接戦闘でセイバーと互角に戦う事が出来る。

元々は近接戦闘主体だが「なのは」の世界に来てからは砲撃魔法や広域魔法を始めとした魔法も会得している。

宝具は「ゆりかご」と「聖王の鎧」の二つを所有している。

アーチャー

（CV 大原 さやか）

アーチャーとアサシンの特性を持つサーヴァントで盲目である為、常に目を閉じているが矢を射る時のみ目を開く。

目が見えない為周囲の音や気配に敏感で音や気配で狙いを付ける。

本名は神楽春奈。

生まれは日本で常に和服を着ている。

ランサー

(CV 生天目 仁美)

ランサーとキャスターの性質を持つサーヴァントで生前はアラドの弟子だった女。

露出度の高い格好を好み大の酒好き。

アラドの事は師匠と呼ぶが全く敬意を払っていない。

生前は魔術師で特に結界系の魔術の扱いに長けている。

本名はミコット・エムルム。

アサシン

(CV 広橋 涼)

アサシンとアーチャーとランサーの特性を持つサーヴァントだがアーチャーとランサーは特性のみしか使われていない為、弓や槍は使えない。

他のサーヴァントとは違い殆ど実体化せずにいる事が多く常に黒づくめな為マスターであるアラド以外は顔を知らない。

本名はアラドすら知らない。

バーサーカー

バーサーカーとキャスターの特性を持つサーヴァントでその力は凄まじい為、普段はアラドが封印魔術で封印し空間魔法で異空間に閉じ込めている。

アラドの使役するサーヴァントの中で唯一元が人では無く炎の精霊イフリート。

バーサーカーである為理性が無くアラドが封印を解くと周囲を火の海にし全てを焼き尽くすまで止まる事は無い為、アラドはめったに使わない。

用語説明

禁書目録の書

アラドが制作した封印の魔術書で全444ページありそのページに一つ何かを封印する事が可能な魔術書。

封印する為にはアラドの血を封印する物と封印したいページに付着させて対象を魔術式の上に乗せアラドが書に魔力を注ぐ事で封印する事が出来る。（正し封印対象が魔力を有している場合はその魔力より多い魔力を注がなければならない。）

また、封印されている物を出す時にはアラドの血を解きたいページに付着させて魔力を流すだけで良く一度封印した物はもう一度封印条件を満たさなくても封印する事が出来る。

アラド式変体刀

アラドが制作した特殊な特性を持つ剣で現在12本存在している。

『龍尾』

アラド式変体刀の一本でアラドが良く使用する剣。

特性は『増殖』で形状は脇差程度の長さだが使用者がその長さや刃の数を増殖させる事が出来る。

『魔王』

アラド式変体刀の一本でセイバーが使用している剣。

特性は「魔力吸収・放出」で形状は大剣で刃が触れている者の魔力を吸収し己も魔力に変換させるのと吸収した魔力または己の魔力を刃から放出する事が出来き対魔術師、魔導師に対しては圧倒的な優位に立つ事が可能。

『無限』

アラド式変体刀の一本でアーチャーが使用している剣。

特性は『刀剣生成』で無限じたいは剣の形状では無く手袋の形状をし手にはめていると手の平に自分が思い描いた形状、能力を持った

剣を投影する事が出来る。

アーチャーはこれを弓の矢の代わりに使用している。

『螺旋』

アラド式変体刀の一本でランサーが使用している剣。

特性は『空間錯覚』で形状は槍で空間魔術で先の空間が歪み相手は攻撃の距離が上手く掴めなくする事が出来る。

『闇牙』

アラド式変体刀の一本でアサシンが使用している剣。

特性は『視覚支配』で形状はナイフで闇牙で切られると傷が感知するまでの間視覚を完全に支配される。

第一話 神からの依頼（前書き）

つい勢いに任せて書いてしまいました。

もう1つのサイトの方もありますので不定期になるかも知れませんが

第一話 神からの依頼

アラドSIDE

何処だここは……

俺は不思議な空間にいた。

昨日は確か少し厄介な仕事を終えて隠れ家に帰りそのまま寝たんだよな。

魔術師の仕業か？

違うな。

もし魔術師の仕業ならアイツがの誰一人として気が付かない事は考えにくい。

俺が状況を把握していると何処からか声が聞こえて来た。

???「ほう、やはりお主は冷静じゃな。」

「誰だ？」

俺は辺りを見渡すが辺りには誰もおらず人の気配すら感じる事が出来なかった。

???「……じゃあ……」

声の方を見ると老人が現れた。

「ここは何処だ？」

「???」「ここはそうじゃな・・・主等の言葉で言うなら死後の世界
って所じゃな。」

死後の世界だと？

ありえない。

「???」「そうじゃな。じゃが主が死なんのは肉体的じゃよ。わしの
力を持つてすれば魂を肉体ごとここに持つて来る事が可能なのじゃ
よ。」

成程な。

確かに俺は体が死なないだけだ。

「???」「理解が早くて助かるの。」

さつきから俺は殆ど話していないのに意思の疎通が出来ている。

心を読んでいるのか。

「???」「そうじゃよ。わしは神じゃからな。人の心を覗く事位簡単
なんじゃよ。」

「神ね。別にアンタの存在が何だろうと俺には関係無い。肝心なの

は俺をどうしてここに連れて来たのかだ。」

神「そうじゃな。わしも世間話をする為に主を呼んだ訳では無いから。」

「当然だ。」

そんな事で殺されては敵わん。

神「さつそく本題じゃ。主にはこれからある世界に行って貰いたい。」

「ある世界？」

神「そうじゃ。その世界はの滅びに面してある。」

「滅び？」

また面倒な事になりそうだ。

神「そう言わんでくれ。主にも全く関係無い話しと言っ訳でも無いんじゃない。」

どう言う事だ。

神「その世界はの主の世界同様ある世界で作られた物語なのじゃよ。」

俺の世界と同様だと？

神「その通りじゃ。世界観などの設定が細かくされ過ぎたせいで一つの世界として確立して成立してしまったのじゃ。」

「成程、概念は理解した。それで俺にも関係があるってどう言う事だ。」

神の説明だと俺には何の関係も無いが。

神「うむ、直接は関係は無いがな。近年わし以外の神がの暇つぶしで人間を殺しては別の世界に様々な能力を持たせて転生させてるんじゃないよ。」

「転生ね。」

迷惑な話した。

幾ら神とは言え暇つぶしで殺されては堪ったもんじゃ無い。

神「まあの。そして、その結果その世界のバランスが崩れて世界その物が破滅する事があるのじゃよ。」

成程、俺の世界が創作物である以上転生して来た奴のせいで破滅する恐れがあると言う事か。

神「その通りじゃよ。」

「それで？俺にどうしろと。」

神「その世界を救って欲しいのじゃよ。」

救うだと？

この俺がか？

「一つ聞きたい。アンタの言う救いとは話しに行く限りで崩壊と言えるのは転生者が介入しその物語の結末が変わるのを阻止しろって事で間違い無いか？」

神「そうじゃの。間違いではないがそもそも物語の世界と言っても主が言う物語の結末とはその世界に可能性の一つじゃ。元々そこに生きる者達が自らの意思で未来を選び違う結末になるのは問題は無いのじゃよ。しかし、転生者は意図的に物語を改変しようとする傾向が強い、それは世界に歪みを作る原因になりかねないからそれはぜひとも阻止して欲しい。」

「分かった。それだけか？」

神「まだあるわい。今話したのは可能性の一つじゃ。それ以外にも世界の破滅はイレギュラーの存在により更なるイレギュラーが生まれる可能性もあるのじゃ。」

更なるイレギュラーね。

神「うむ、そのイレギュラーが発生した時、主にはそのイレギュラーを何とかして欲しいのじゃよ。」

「成程ね。それで肝心の報酬は幾らだ？」

神「神に報酬を要求するか。」

当然だ。

仕事の依頼である以上相手が神だろうが悪魔だろうが貰う物は貰う。

「報酬が無いのなら例え殺されても仕事は受けない。」

そして、受けた以上どんな手段を使っても依頼は成功させるし報酬は頂く。

神「そうじゃの。主は金では動かんタイプじゃからな。」

当たり前だ。

金など簡単に手に入る。

神「その世界には主の知らない事が沢山ある。主は知識欲が異常じやからな。」

良く分っている。

「交渉成立だ。」

神「それで。本来ならの。主に何か力を渡す所なのだがな。それをすれば世界にかかる負担が少し増えるかの。」

「別に良い。人に力を貰うなどは俺は好きじゃないからな。唯一つ、俺の使役しているサーヴァント及び所有している魔術書を持って行きたい。」

それだけあれば異世界だろうと何処にだって行っても良い。

神「お安い御用じゃよ。」

「なら最後に確認だ。アンタは俺の心が読めるなら俺がどんな人間が理解してるんだろ？」

神「当然じゃ。」

「だったら良いのかよ。俺がいる事でその世界が更に混乱するかもしれないよ。」

神「それは覚悟の上じゃ。これは賭けなのじゃよ。主の存在が世界を救うか破滅させるかのな。」

賭けね。

失敗すればその世界の命の全てが失われる。

それを分かっている俺を向かわすとはこの爺さんはとんでも無いな。

「良いだろう。行ってやるよ。アンタのその答えは気にいった。」

神「では送るとしようかの。それと向こうに着く頃には主のパートナーとなる者の着くじゃろつて。」

パートナーね。

神「そうじゃ。主はその世界の事を知らん様じゃからな。」

どっちでも良いがまあそのパートナー次第かな。

「了解した。適当に救って来るさ。」

そこで俺の意識は途絶えた。

アラドSIDE OUT

第二話 「なのは」の世界

アラドSIDE

ここは・・・

俺が意識を取り戻すとそこは荒野が広がっていた。

異世界って聞いたが何も無いな。

これがこの世界かそれともここがこうなだけなのか現場では理解出来んな。

「それにしても神の爺さんが言っていたパートナーってのは何処だ？」

俺は辺りを見渡すがやはりそこには荒野が広がっているだけで人っ子一人いなかった。

「あのジジイ適当な事言いやがったか？」

俺がそう呟いていると良く知る声が聞こえて来た。

セイバー「陛下ー！」

「はぁ・・・」

セイバー「陛下御無事ですか！寝ていた筈の陛下が消えて私はもし

もの事があつたらと！」

そこには見るからに「私は騎士です！」と言つかの様な服装をして大剣を背負った少女、セイバーが俺に詰め寄って来た。

セイバーは何故か俺の事を陛下と呼ぶ。

セイバー曰く俺が生涯の主だからだそうだ。

何度も陛下は止めてせめてマスターにして欲しいと頼んだが頑として聞き入れてはくれなかった。

令呪でもあれば良かったが生憎と俺は令呪を持っていない。

そんなやり取りを100年位して俺は諦めた。

陛下と呼ばれても何ら不都合は無いからな。

セイバー「聞いてますか？陛下？」

「聞いて無い。それでお前以外はいるのか？」

俺がそう聞くと俺の回りにすうっと人が出て来た。

ランサー「呼んだあ？師匠。」

そう言ったのがランサー！。

やたらと露出度の高い服装を好み常に酒を持参している。

恥ずかしながら俺の弟子の中で最も優秀だった奴だ。

アーチャー「私はここにいます。アラド様。」

和服を着ていたのはアーチャー。

盲目で常に目を閉じておりサーヴァントの中でも常識人で俺の癒しだ。

キャスター「私もいます。アラド。」

キャスターはキャスターでありながらセイバーやランサーと近接戦闘で互角に戦える変わった奴だ。

その上、俺のサーヴァントの中で唯一英霊で宝具の所有している異世界の英雄だそうだ。

アサシン「ここに。主」

そう言ったのはアサシンだ。

小柄で全身を黒尽くめな為、性別が区別し難いが良く目を凝らせば微妙に胸がある為女なんだろう。

素顔は俺も何十年前に召喚した時に一度だけ見たつきりなので記憶から引き出して来ないと思い出せん。

「取り合えず全員いるな。」

ランサー「バーサーカーがいませーん！」

ランサーは分かって言ってるだろ。

ランサーが言ったバーサーカーは普段は俺が封印し異空間に幽閉している。

下手に出すと手が付けられん。

取り合えずサーヴァントは全員いるみたいだな。

「そろっている事は確認出来たから取り合えず引っ込んでいてくれ。」

俺がそう言つとセイバー達は霊体化して消えた。

だが、この世界は物語の世界だって話したが……

俺が今度こ事を考えようとしていると上から白い羽根が振って来た。

「何だ？」

俺が上を向くとそこには白い羽根を生やした女が降りて来た。

まさかこいつが爺さんが言っていたパートナーか？

あの爺さんは何がしたいんだ？

羽根を生やした女なんて実際だとかなり痛いな。

そんな事を考えていると女は降りて来て着地すると羽根が消えた。

羽根は消せるんだ。

羽根が無いと中々良い女だが問題は中身だ。

ナターシャ「始めまして。私はナターシャと言います。」

ナターシャね。

「俺はアラボルド・インデックス。呼び方はアラドでもアラドさんでもアラド君、アラド様、ご主人様でも好きに呼んでくれ。」

ナターシャ「ではアラドと呼ばせて貰います。」

この女真顔でスルーしやがった。

この女はきつと仕事一筋とかで婚期を逃すタイプだ。

仕事をするなら問題は無いがそれ以外では最も面倒なタイプだ。

「君ね。俺がボケたんだ。何か反応してくれないと俺が恥ずかしいじゃないか。」

ナターシャ「は？何かボケましたか？」

また真顔で言う。

決めた。

仕事が終わるまでこいつを弄り倒してやる。

「まあいい。それでナターシャと言ったか。俺はこの世界について何も知らない。だから説明を頼む。」

ナターシャ「分かりました。」

ナターシャは俺にこの世界の事を説明した。

「成程ね。だけど納得がいかない。」

ナターシャ「そうですね。統計で見ますと転生者の中でも主人公の高町なのは9歳で戦いに出すのは納得いかいと言う者も多数いますしね。」

何言ってるんだ？

俺は9歳の時には確か数えきれない位の魔術師を殺してる。

別に可笑しい事じゃ無いだろ。

なんか食い違いが有るみたいだ。

「俺が納得いかないのはそこじゃ無い。9歳のガキが魔法をバンバン使ってる事だ。魔法とは魔術によって幾ら金や時間を使おうと実現不可能な奇跡だ。9歳のガキが簡単に使えるなんて納得がいか

いな。」

俺も魔法に会得するのに20年はかった。

ナターシャ「それた多分、アラドの言う魔法とこの世界の魔法は違う物なんでしょう。この世界の魔法は科学の一種と考えた方が早いですからね。」

「科学ね・・・」

そんな物を魔法と名付けるのは魔術師としては許せんな。

「まあそれは置いといて、取り合えず。話しに出て来た管理局と接触したい。」

話しの内容から大分管理局とは俺の好みに合いそうだ。

ナターシャ「それは出来きないんですよ。」

「どう言う事だ？」

出来ないだと管理局に属していれば動きやすいんだかな。

ナターシャ「それがですね。父がアラドをこの世界に送る際に少し時間を間違えたそうで・・・」

時間を間違えた・・・と言うか父だと！

「あの爺さんが父親！」

ナターシャ「そうです。」

ありえない。

アイツはジジイだったぞ！

それにこいつは外見は俺とそんなに変わらないが・・・まあ神だからその位はあり得る事か。

俺はそう納得させた。

「それで時間を間違えたとはどういう事だ？」

そっちの方が肝心だ。

ナターシャ「現在は原作が始まる約150年程前何です。管理局が創設されたのは原作の大体75年前です。まだこの時代では管理局は創設されていません。よって管理局に属する事は出来ません。」

何と言う事だ。

ナターシャ「そんなに管理局に入りかつたんですか？こう言うっては何ですか。管理局は裏では色々やっています。転生者の中にはアンチに走る者の少なくは無いですよ。」

「だからだよ。管理局を気に言つた所はまずは名前だ。時空管理局だなんてストレートだろ。『時空』を『管理』する『局』ってさ管理は支配と同じだ。この組織には時空を支配したいって欲望が詰まった組織だと思わないか？」

俺はそう言った欲望に素直な所は好きだ。

ナターシャ「はあ。そう言うものですか。」

「まあ無い物は仕方が無い。」

ナターシャ「それではアラドは如何するつもりですか？」

どうするね。

決まっている。

「そんなのは決まっている。俺は国を作る。」

ナターシャ「国って正気ですか！」

「正気だ。爺さんが言っていた来るべき破滅とやらは転生者によるものかそれ以外か分らないんだ。転生者の方はまだ150年位は平気だろう。問題はそれ以外だ。何か分らない以上色々準備が必要だ。」

ナターシャ「それが国を作る事だと？」

「そうだ。俺は不老不死だが無敵じゃ無い。」

俺は死なず朽ちずの体を持つが攻撃が利かない訳じゃないしあくまで肉体的に死なないだけだからな。

「それに戦いは個人でするものじゃ無い。組織でするものだよ。それで唯国に属するだけじゃ俺が物足り無いからな国を作り俺が王と

なる。」

一国の王になった事は前の世界では経験した事の無い事だからな。

ナターシャ「しかし、アラドの作る国はこの世界に負担を掛けかねません。」

「だから？」

そんなのは知らない。

どうせ神の爺さんも俺がそう言う奴だって知った上で依頼したんだ。

「俺は俺のやりたい様にやりやりたい様に生きる。それだけだ。文句があるなら俺を殺してでも止めるんだな。」

ナターシャ「それは・・・」

出来ないだろうな。

ナターシャ「分かりました。私も全力でサポートします。」

どうやら覚悟は決まったみたいだな。

さて、国を作ると決めたが何処から始めるか・・・

アラドSIDE OUT

第三話 アラド帝国

ナターシャSIDE

彼がアラドが国を作ると言い出して早100年が経った。

あの子の彼の動きは凄かった。

無人世界を勝手に自分の国として一夜で城を築きその後、何処から連れて来たのか人が増え10年経つ頃には国と言えるだけの規模となっていた。

そして、その国の名は「アラド帝国」まさか自分の名を国に付けるとは私も予想外だった。

その頃になると私もアラドと言う人間を理解しだした。

彼が国を作ると言い出しその理由に上げたのは全てが建前で実際は彼が王さまになりたかったから。

その上、国に自らの名を付けたのはこの国が自分の物だと主張したいからで今彼はアラド帝国唯一皇帝と名乗っている。

皇帝を名乗るもの一度名乗ってみたかったからだと言う。

そんな事をあり100年が経ちアラド帝国は様々な次元世界を取りこみ超大国となっていた。

ナターシャ「はあ・・・」

「ため息とつくと幸せが逃げるぞ。」

貴方のせいでしょう！

と私は言いたいと言った所でアラドは気にも留めないだろう。

今現在の私の帝国内での立場は帝国宰相の地位にいる。

私の立場上この地位は妥当な所だろう。

その後に兼王妃と言う言葉が付かなければ。

何故その様な立場になったかと言うと勿論私が彼と結婚した訳ではない。

国の象徴として私を王妃に祭り上げたのだった。

私は人間ではかなり美人に入りそれが100年も続いている為、アラドはそんな私を皇帝である自分の妻、即ち王妃としたと本人が語った。

流石にそれにはむかついた。

当然だ。

せめて私に惚れたとか適当な事を言えば良いのにアラドは素直にそう言っただけだ。

その時は一撃と入れてりアラドは跡形も無く消し飛んだが今ではピ

ンピンしている。

だが公の場でアラドの妻を演じる事にもすでに慣れて現在の問題はこれだ。

私の前には前が見えない位の書類で埋め尽くされていた。

宰相としての仕事の書類が山積みとなっている。

原因はアラドはアラドは子供みたいな発想だが能力は長く生きているだけって（後で知ったのだがアラドは1000年近く生きている私の倍近く生きている）事務的な事から始まり軍務に至る所まで完璧の一言しか無かった。

そのせいで私に回って来る書類の量は半端じゃ無い。

流石にこの量をこなすには時間的にありえない為、抗議した所アラドは時間魔法を使い自分の回りの時間を操作し私達の1時間でアラドは10時間分の仕事をしていた為一切の不備は見つからなかった。

そして、私をそんな状態にした当の本人は何やら私達の執務室のモニターを操作していた。

この城は中世のヨーロッパの様な城だが中身は無駄に高性能の機材を使っている為、恐らく世界で最も難航不落の要塞だと私は思う。

「現実逃避してないで仕事しろよ。」

うるさい。

誰のせいだと思ってるの！

この100年で気付いた事がもう一つある。

アラドがお父様や始め私と話していた時のアラドは商談時の口調で現在のアラドが素のアラドだと言う事だ。

商談時のアラドは合理的な判断で行動するが素のアラドはまるっきり子供だ。

自分のやりたい様にやらないと気が済まない。

その上、アラドにはそれを成すだけの能力があるから更に性質が悪い。

本当は私は事務よりも戦闘の方が得意なんだけどな・・・

しかし、私は見習いとは言え神だ。

下界の者に危害を加える事が出来ない。

アラドには攻撃出来るがどんなに殺しても直ぐに戻る為、見ていて凄く腹が立つ。

戦闘面ではまるで使えない為、私が出来る事は事務と国の象徴くらいなものだとアラドは言う。

仕方が無い。

さっさとこの書類を片付けてアラドを見返してやるとしますか。

ナターシャSIDE OUT

アラドSIDE

俺は今実に機嫌が良い。

目の前ではナターシャが書類の山を目の前に俺を睨みつけている。

そんなナターシャを見ていると疲れても魔法を使い書類を仕上げた
甲斐があったと言つものだ。

最もそれを本人に言うともた原子レベルまで吹き飛ばされるから黙
つておこう。

俺は死ななくても痛覚は存在するから原子レベルまで吹き飛ばされ
たら流石に死ぬほど痛い。

次はどんな事でナターシャを弄るかは今はいい。

それよりも俺はこの100年で国を作り王となった。

その後も順調に国を広げていた。

その間に分かった事がある。

ナターシャは猫を被っていた事だ。

始めは俺に敬語と使って今ではため口になっている。

これは嬉しい誤算だった。

公の場でも王妃が板について来ているから素の性格は気にする事は無い。

俺が気にすべき事は管理局の動きにある。

俺が国を作ってから十数年後にナターシャの言う通りの時空管理局が創設された。

その際、我がアラド帝国も管理局に加盟しないと声がかかったが俺はそれを跳ね付けた。

もはや管理局に興味も利用価値も無いからだ。

俺は既に一国の王となった。

管理局の権力など一国の王に比べれば塵も同然だ。

問題は権力では無い。

現在管理局は俺の統治している次元世界で管理局に加盟する様に進言して来ているとその世界の代表が俺に言っ て来ている。

大方、統治している世界を取りこみ帝国の戦力を削ぎたいのだろうが現在は何処の世界も管理局に加盟するどころかその事を俺に告げ口をして来ている。

当然だ。

俺のやり方は侵略だがその後は我が国の技術を与え国は豊かになり他の世界から侵略を受ければ我が国から防衛の戦力を送られる事になっているからだ。

一方管理局のやり方は一方的に管理局の定めた法を押しつけているだけだ。

そんなやり方では国はついて来ない。

正直失望だよ。

管理局と言う位だからどんな方法で管理するかと思いきや原始的な支配だったのだから。

いつその事時空支配局にでも改名すれば良い。

だがそのお陰で俺の評判は上がり、自ら我が国の統治下に入りたいと言って来る国まで出て来た。

その為、俺の計画通り来るべき破滅の予兆を見逃さない為の監視網が完成しつつある。

「さてと、管理局のこの動きは・・・」

そして、最近帝国の国境付近で管理局の部隊と思しき魔導師達が目撃されている。

恐らくはこちらが仕掛けて来るのを待っているのだろう。

なら俺の取るべき行動は一つだ。

「さあ、戦争の始まりだ。」

アラドSIDE OUT

第四話 罌

アラドSIDE

俺が戦争をする事を決めてから直ぐに軍議を始めた。

そこのは俺以外には帝国宰相のナターシャと皇族親衛隊の俺のサーヴァント達がそろっていた。

「さて、俺達は管理局と戦争をする事になったのだが・・・」

ナターシャ「ちょっと待って。」

何なんだ一体？

人が折角喋っているのにな。

後でお仕置きするか。

「それで？」

ナターシャ「管理局と戦争を本気でするつもり？」

「無論だ。」

喧嘩を売って来たのは管理局の方だ。

ナターシャ「でも管理局を滅ばせば確実に世界を歪ませる事になるわ。」

最もな意見だ。

「その点には問題は無い。俺は管理局を潰すつもりな訳ではない。管理局に身の程を弁えさせるだけだ。」

俺を挑発して来ていると言う事は俺と戦争をして勝てる気でいる事だ。

ナターシャ「だったら管理局をどうするつもりなの？」

「管理局自体には興味は無いが俺の株を上げる事には使える。だから存在し続けて恥を晒し続けて貰う。」

それと、利用価値もあるがそれについてはナターシャに言う必要は無いだろう。

「管理局を潰さなければナターシャも文句は無い筈だよな。」

ナターシャ「そうね。」

ナターシャはそれで納得した様だ。

「では、話を戻す。管理局の魔導師が国境付近をうろついている。」

俺は地図でその場所を指さした。

キャスター「国境ぎりぎりね。」

アーチャー「如何してそんな事を？」

ランサー「こっちが仕掛けて来るのも待ってるんでしょ？」

ランサーの言う通りだ。

こちらが仕掛ければ管理局はここに武力行使をする理由が出来るかな。

セイバー「しかし、放っておく事も出来ませんよ。陛下。」

キャスター「けど先に仕掛けたと言う事実を残す訳にもいかない。」

ライダー「師匠はなんかあくどい策を考えてんでしょ？」

当然だ。

「勿論だ。こちらから仕掛ける。」

アーチャー「しかしそれでは・・・」

「アーチャーの言いたい事は分かる。だが連中は我が国の法を犯した。」

ナターシャ「どう言う事？」

「連中がうつく前日に連中のいる所は我が帝国の領土となったよ
って連中は我が帝国の領土に無断で侵入した事になる。」

ランサー「そう簡単に領土を増やす事は可能なの？」

「問題無い。元々帝国の領土は俺が勝手に決めた事だ。隣国に接しているだけでは無いからな。その範囲を少し増やすなんて事は書類一つで出来る。」

最もその書類を作ったのは管理局が現れてからで時間を少し誤魔化してるんだがな。

「つまり俺達が仕掛けても管理局の領土侵犯で非は向こうにある。」
「ナターシャ」また、せこい事を考えたわね。」

「せこくは無いさ。書類上、そこは我が帝国の領土は問題が無い。」

これで戦後に管理局が文句を言って来ても逆に文句を言える。

迂闊なんだよ。その程度でこの俺を嵌めようなんてな。

創設された100年も経って無い弱小組織が数千年を生きた俺を出し抜こうなんてさ…

だから思い知って貰う。

どちらが真の支配者かと言う事をな。

キャスター「それで次の手は？」

「まずは帝国内に不法侵入した不審者を捕縛する。その役目はセイバーとアーチャーに任せる。」

セイバー「陛下！その様な任務は私一人で十分です！アーチャーの手を借りる必要はありません！」

「そう言うな。セイバー、俺とてお前一人で十分と考えてる。しかし、自らの力を過信すれば破滅するぞ。確かにお前は正面切つての戦闘は無類の強さだ。だが敵は常に正面から来るとは限らない。特にお前は幻術の類の能力とは相性が悪い。その点、アーチャーは目が見えないから幻術は効果が無い。そしてアーチャーの方が視野と射程が広い。だからお前と組ませるのだ。」

俺が説明するとセイバーは納得していた。

セイバー「申し訳ありません。陛下がそこまで読んでいたなんて私は・・・」

セイバーはあからさまに落ち込んでいた。

これさえ無ければセイバーは優秀なんだがな…

こいつは俺の事になると直ぐに落ち込んだりする。

「気にするな。それとセイバーとアーチャーは必ず敵を捕縛しろ。戦争に持ち込む前にこちらが殺してしまえば後々面倒だ。」

セイバー「分かりました。」

アーチャー「承知しました。」

「それとアサシンは二人と俺との伝令役を任せる。」

アサシン「承知。」

「キャスターは兵を何時でも動かせる様に待機させる。ランサーはここで待機だ。」

キャスター「分かった。」

ランサー「しゃーないわね。」

これでこちらの布陣は完璧だ。

後は管理局が俺の計算通りに動けば良いだけだ。

さあ、どう出る？

管理局の諸君は。

アラドSIDE OUT

セイバーSIDE

私は今陛下の命を受け新たに領地となって管理局の魔導師がうつっている所の近くまで来ていた。

後ろにはアーチャーが居るのだろうがアサシンの特性も持つアーチ

ヤーの魔力を私では感知出来ないだろう…

それにしても陛下は凄い…管理局の策を逆手に取り今後の戦いを有利に進める策を思いつくなんて…

剣を振るい戦う事しか出来ない私とは凄い違いだ…

最も私なんかと陛下を比べる事自体がおこがましいけれど…

そうこうしている内に目的の場所に着いた。

報告通りだ。

魔導師が…五人いるわね。

見た感じ大した事は無さそうだけど陛下の言う通りに殺さないで捕縛するのは簡単じゃないけど陛下に捕縛を任された以上、陛下の信頼に答える事が騎士としての私の役目…

セイバー「貴方達何をしているの！」

私は魔導師達の前に出た。

魔導師達は獲物が掛かったと思ったのか余裕の表情だった。

多分、私は舐められてるんだ…

陛下が言うには私は見た目だけではそんなに強そうには見えならしい…

騎士としては正直見た目で判断されるのは癪だが敵が見た目で油断してくれるのはありがたい。

私は五人の中で中央に位置していた魔導師に接近して当て身を喰らわせた。

素手なのは『魔王』を使えば確実に殺してしまうだろうからだ。

魔導師達は臨戦態勢を取ったがもう遅い！

私は直ぐに近くの魔導師を殴り飛ばし反対の魔導師を裏拳で倒し抑え込もうとして来た奴を蹴り飛ばした。

最後の一人が魔力弾を形成し攻撃して来たがその魔力弾を『魔王』を抜いて弾き『魔王』を地面に突き刺し『魔王』を梃子に使い最後の一人の顔面に飛び膝蹴りを喰らわせた。

セイバー「これで終わり。」

呆気ない…

五人掛かりでそれも私を囲んでいる状態で呆気なく無力化させられるなんて戦い方がなつて無いのよ…

その程度の練度しか無い者が陛下と戦おうなんて思い上がりもはだはだしい。

アーチャー「相変わらず良い手際です。」

いつの間にか私の後ろにアーチャーが立っていた。

本当にこの人は気配も無く後ろに立つんだから…

セイバー「この人達が弱すぎます。」

アーチャー「そんなに謙遜無さらなくてもよろしいですよ。」

アーチャーはそう言うけど本当にこいつ等は弱かったんですけど…

セイバー「他には？」

アーチャー「居ませんよ。セイバーさんが戦っている間、私は周囲を警戒していましたけど魔導師はおるか動物一匹すら周囲にはいません。」

アーチャーがそう言うならそうなんだろう。

セイバー「だったらこいつ等を締め上げて帰りましょう。」

アーチャー「そうですね。」

私とアーチャーは魔導師達を縛り上げて陛下の元に戻った。

セイバーSIDE OUT

アラドSIDE

セイバーが帰って来た。

俺の指示した通り魔導師は生け捕りにしていた。

そして、直ぐ後に管理局から通信が来た。

管理局員「現在、そちらで拉致した局員を今すぐ解放して頂きたい。

」

管理局のそれなりの地位の奴が俺に高圧的な態度でそう言って来た…

その程度の威圧など俺には無意味だ。

「はて？何の事でしょう？」

取り合えず向こうのペースで話す事は無い…

管理局員「恍けるな。こちらの魔導師が五名そちらの国の領土の近くで行方を暗ましているんだ。こちらが拉致したとしか考えられないだろう。子供でも分かる事だ。」

子供でも分かる事ね…子供みたいな推理の間違いじゃないのかよ。

幾ら国境付近で消えたからと言ってこっちが関係していると考えるのは早計だし、それだけの根拠でそんな事を言えばミッドチルダとの国際問題に発展する事を考えてないのか？

最もこいつは確信してるんだろうがな。

うちに介入する口実が欲しいから魔導師を餌にして手を出させてその餌に獲物が食いつきさぞかし良い気分なんだろうな…

だが、相手が悪い。

「こちらの魔導師から知りませんが先日、我が軍の兵が国内で不審な人物を拘束しましたけど…」

管理局員「そうだ！それが管理局の局員だ！今すぐ解放しなさい！」

認めたな…

こちらが認めたから俺の言葉を良く聞かずに言ったのは失敗だったな。

「では、その魔導師達は管理局の者だと？」

管理局員「その通りだ！」

こいつはバカだ…

「他国の者…それも時空管理局の局員が無断で我が帝国の領土に入つて来たと言う事大変由々しき事態です。密入国者達はこちらで裁判にかけます。」

管理局員「ふざけるな！」

「ふざけているのはどちらですか？彼等は領土侵犯をしました。ですので我が帝国の法に従い罰せられる事になるのは当然ではないの

ですか？」

管理局員「お前達の法など知った事では無い！さっさと解放しないとどうなるか分かっているのか！」

「どう…とは？それは脅しですか？我が帝国はいかなる場合でも他国の脅しや恫喝には屈しません。通信は以上です。」

俺はそう言い通信を一方的に切った。

「さて、ナターシャ。今の通信は？」

ナターシャ「きちんと録音したわ…それにしてもよくまあ…次から次へとこんなあくどい事を考えつく…」

ナターシャは俺に指示でさっきの俺と奴との会話を録音させた。

これで戦後は俺の優位に事が運ぶ事だろう…

これで準備は整った…

管理局は俺の思った通りに動いてくれた…

全ては俺の思惑通りに事が運んでいる…

ここまで思い通りだとつまらないが管理局は俺を何処まで楽しませてくれるだろうか…

アラドSIDE OUT

第五話 開戦

ナターシャSIDE

管理局はアラドの思惑通りに動き遂にはかなりの大部隊をアラド帝国に侵入させて来た。

私が予め知る原作では管理局は万年人手不足だったのだが今回送られて来た魔導師の数は最低でもAAクラスの魔導師でオーバースクラスの魔導師も100以上を投入して来た。

それに対しアラドはセイバー、アーチャー、ランサーを局地戦に投入しキャスターを軍の指揮に回すだけだった。

ナターシャ「良かったの？」

「何が？」

絶対私の言いたい事を分かっているくせに…

ナターシャ「私が良いたいのはアラドのサーヴァントが人並み外れて強いのは知ってる。しかし、敵の数は予想以上に多いわ。油断をすれば負けることも…」

「負けないよ。前線の三人には対魔力の特性を持っているから魔導師の攻撃は殆ど無意味だよ。それに今回の戦争は勝つだけが目的では無い。」

勝つ以外にも目的があるの？

アラドの秘密主義…と言うか絶対言うのが面倒なただけだけどそう言う所は困ったものよ…

その上、いざつて時は私や周りを躊躇う事無く使う癖に…

「確かにキャスター率いる軍隊を使えば確実に勝利を得る事が可能だよ。でもそれじゃあアラド帝国の勝利だ。俺が欲しいのは『俺』が『管理局』に勝つ事だ。俺の私兵のサーヴァントが単体で管理局を破ればそれは俺自身の勝利となる。それが今後の俺の動きがしやすくなるんだよ。」

アラドの言いたい事は大体は分かったけど…いつもの事ながら何を考えているのかが分からなくなるわ…

「ナターシャはそこで見ていれば良い。このまま行けば面白い事になる。」

アラドはまるで子供の様に楽しみにしている様だった…

ナターシャ SIDE OUT

セイバー SIDE

ようやく本気を出せる…

私は陛下の命令で出陣し管理局の魔導師と対峙していた。

数はざっと見積もっても100人位だろうか…それだけの相手を私一人に陛下は任せて下さった。

陛下の信頼にお答えするにも私は負ける訳にはいかない！

私は背負っていた『魔王』を抜いて構えた。

セイバー「ここから先は我がアラド帝国の領土である。許可無き侵入は一切認めていない。立ち去らぬのであれば私が切り捨てる！」

私は陛下に言われた通りに警告をした。

まだ領土に入って無い以上警告をして置かなければ後々面倒だからと陛下は言った…流石は陛下だ…戦の事だけでは無く戦後の事も視野に入れての策を考えている。

そんな陛下にお仕えする事が出来て私は本当に幸せ者だ…

セイバー「止まる気は無いみたいだな。では行かせて貰う！」

私は『魔王』で先頭も魔導師を切り伏せた。

敵はそれだけで動揺し隊列が乱れた…この程度で乱れるなんて…捕縛した魔導師ももうただけで練度が低すぎる…これは戦争…人が死ぬのは当たり前前の事なのに…動揺しそれが決定的な隙となる…

そして、ここからは一方的な戦いとなった…敵は私に背を向け何の策も無く逃げ惑うかむやみに私を攻撃して来るかだった…どちらに

せよ混乱した戦場では単独の私の方が圧倒的に有利だ。

程無くして魔導師は全滅していた…陛下のご命令とはいえつまらなかった…騎士としては全力で戦う事の出来る相手が欲しいんだけど…

文句を言っけていても仕方が無い…

私は戦果を報告すべく陛下の元に戻った。

セイバーSIDE OUT

ランサーSIDE

私は今久々に戦いをしている…最近はやセイバーを良く使うせいで私の出番が魔術で城の防衛用の結界を張る事位で前線に立つ事が殆ど無かった…セイバーは師匠に忠実だからね…私から言えば師匠は化け物としか言いようが無いからセイバーは何て師匠をそこまで慕うのかを理解出来ない…師匠は騎士道からは最も遠い存在だと思うんだけどね…

私はそんな事を考えながらまた敵の首を刎ねた。

ランサー「最初の威勢は如何したのよ！」

最初、こいつ等と来たら私が出て来ると否や目の色を変えていた…

典型的なゲスの眼つきだった…男なんてみなそうなんだけど…少し露出の高い格好をすれば直ぐに騙される。

昔はよく師匠に言われて男を騙して情報とかを入手やその他の金品などを貢がせてたって…自分の弟子に男を色気で男を騙させるとか師匠としてはどうかと思ったけど私自信男に貢がせるのは好きだったしね…

ランサー「そんなんでも私とヤレルと思ってんの！」

生憎と私は弱い男に興味は無い…何の技も無い唯の突きすらまともに受ける事も出来ないヘナチヨコに興味は無いのよね…

そうして居ると敵は一人残らず死んでいた。

ランサー「あーあ…全くもう…最近の男はヘタレばかりね…帰って酒でもたらふく飲も…」

何処かに私の槍をまともに受ける事出来る強い男はいないのかしらね…師匠以外で…

ランサー SIDE OUT

アーチャー SIDE

私はアラド様の指示で帝国内にある森の中を進行している魔導師を『無限』で投影した剣を矢をして狙撃していた。

魔導師達は狙撃手の存在に気付き周囲を警戒していますがが無意味です…

私はアサシンの特性の気配遮断を持っている為私の位置を特定するのは限り無く不可能です。

私は次の獲物に剣を射た…剣は正確に魔導師の足を射た為、魔導師はその場で蹲った…その後、魔導師達は蹲る魔導師を庇う様に陣形を取った。

それで良いのです…私にはセイバーさんやランサーさんみたいな攻撃力はありませんが…気配遮断を使い身を隠しての狙撃が私の戦い方です…そして、私の役目はここで時間を稼ぎつつ狙撃で削る事が私に与えられた役目…

アーチャー「さてと…ここまではアラドさまの作戦通りに事が進んでいますね…」

私は再び剣を投影し弓にセットした。

アーチャー SIDE OUT

アラドSIDE

各地で戦闘が開始された頃、俺は城内でモニターを見ていた。

ナターシャ「アラド…セイバーとランサーの戦闘は終結したそうよ…アーチャーは戦い方からまだかかりそうだけど…時間の問題ね。」

予想通りでつまらないな…

ナターシャ「それで今度は何を企んでるの？」

「見てみるよ。」

俺はナターシャは俺が見ていたモニターを見て顔を顰めた…

ナターシャ「これは…」

モニターの中には火の海が映し出されていた。

「この映像は管理局の本隊だよ。」

ナターシャ「本隊？しかし…これは…」

「この最後の一体のサーヴァント…バーサーカーを投げ込んだんだよ。」

バーサーカーは理性が無い分こういった戦場で投入すれば戦場は火の海になる…

そして…管理局は今頃は戦慄しているんだろうな…さて次はどう出る管理局？

キャスター「アラド…上空に魔力が…」

上空ね…

俺とナターシャとキャスターの三人は城のテラスに出ると上空には何隻かの時空航行艦が転移して来た。

ナターシャ「これは…」

「陸路からの進行は諦めて直接時空航行艦で来たんだよ。」

ここまで予想通りだと本当につまらん…

時空航行艦は城に向けて魔導砲を撃って来た…

ナターシャ「警告も無しに攻撃して来た！」

投降を勧告するつもりは無いからな…最も投降を勧告して来たら鼻で笑いたかったんだけどな…

時空航行艦が撃って来た魔導砲は城に当たる前に弾けた。

ナターシャ「砲撃が…」

ナターシャは驚いているな…ようやくこの言葉が言える…

「こんな事もあるつかと密かに結界を張っておいたのだよ！」

こんな事もあるつかと…これは男なら一度は口にしてしまいたい言葉だ…

ナターシャ「結界？」

「そう…この帝国の周囲には俺の結界が直ぐに展開できるように仕掛けをしていたんだよ…この結界は俺の空間掌握魔法で結界との境の空間を切り離す事により外からの攻撃は全て通る事は無い。」

空間を遮断すれば空間を通る攻撃は全て通る事は無くなる…即ちこの結界は絶対防御の結界と言う事だ…

「さてと…俺も暴れさせて貰いましょうか…」

俺はテラスに足をかけて空中に出た。

俺は魔導師の使う飛行魔法の類は使えないが足の裏の空間を凝固させれば空中を歩く事が出来る…空間掌握魔法は時間時間干涉魔法よりも使い勝手が良いしリスクも少ない。

俺が時空航行艦に近づいていくと魔導師が転移されて来た…ほう…俺はてつきり時空航行艦から攻撃を受けると思っていたがな…俺の力を知らないから魔導師で十分と考えたのか…まあ良い…

すると魔導師達は道を開け一人の魔導師が歩いて来た。

何の真似だ…

クロード「私は時空管理局の執務官…クロード・アルバインだ。今すぐ武装を解除し投降しろ。抵抗をせずに投降すれば弁護の機会が与え…」

クロードと名乗った執務官がそこまで言っ言葉を止めた…何故なら俺が出していた『龍尾』が胸に突き刺さっていたからだ…

クロード「貴様…卑怯…な…」

クロードはそのまま息を絶え落下していった。

卑怯？何をバカな…指揮官が自ら自分が指揮官だと分かる様に出て来て敵の目の前で警戒も無く投降を勧告して来たか…流石の俺も予想外の事態だが…興醒めだ…既に戦端が開かれたんだ…今更投降を勧告するなど無意味…したがって俺はこいつ等に勧告などしない…全員ここで殺す…

指揮官が死んだ事で逆上して来た魔導師達は俺に魔力弾を放って来たがそんな攻撃は俺のは届かない。

俺は自分の周囲の空間を歪ませる事で魔力弾は俺に届く前に不自然に曲がって行った。

「愚かな…」

空間を伝う攻撃は俺には聞かない…

そして…俺は片手を前に出した。

「凝固せよ。」

俺がそう言つと魔導師達は動けなくなり動揺が見て分かる…俺は魔導師全員の体を空間ごと凝固させた…それにより魔導師達は空間に張り付けになり動きも出来なくなつたと言ふ事だ…今頃は時空航行艦では魔導師達を転移させようとしているが無駄だ…この辺りの空間は既に俺が掌握している…つまり空間転移の類の魔法は使えない…始めに退路を断つのは戦いの常識だよ…さてこいつ等と戦うのは飽きたから終わりにするか…

俺は前に出した手を握ると魔導師達はぐしゃぐしゃと潰れていきそして…空間には何も無くなつた…俺は魔導師ごと空間を圧縮させる事によつて魔導師を空間ごと消失させたのだ…この程度の連中に我が帝国の血を汚させる訳にはいかないからな…最もセイバー達やさつきのバカの血で汚れているがそこは気にしないでおこつ…

「さて…次は…」

時空航行艦は俺に対し魔導砲を撃つて来た…始めからそうしてあれば無駄な犠牲は出なかつたものを…最も俺の帝国に土足で踏み入つた以上誰一人として生かして帰す気は無いけどな…

俺は指で空間に円を書き時空航行艦からの砲撃はその円に吸い込まれて行つて…そして、砲撃を撃つて来た別の時空航行艦の真上から砲撃が出て来て時空航行艦を沈めた。

「可哀そうに…仲間の砲撃で沈めされるとは…」

俺の力を持つてすれば空間を繋げる事など雑作も無い。

「さて…次の手は？」

俺はわざわざ管理局の次の手を待っていたのだが時空航行艦は反転しだした…

「成程…俺の勝てないと踏んで撤退を決めたか…勇氣ある決断に敬意を表して逃がして上げよう…何て言う訳ないだろ…」

俺の帝国に喧嘩を仕掛けたんだその報いを受けさせてやるよ…それに当の昔にこの世界を他の次元世界との境界を俺が塞いでいるから他の次元世界には逃げられないんだよ…

俺は『龍尾』を振るい伸びた『龍尾』が時空航行艦を全て切り捨てた。

「終わりだ。」

これで俺の完全勝利だ…次は政治的にやらせて貰う…

アラドSIDE OUT

第六話 交渉と言つ名の脅迫

アラドSIDE

俺の計画通りに管理局を叩き俺の帝国に攻めて来た部隊を壊滅させた…これからが俺の本当の策だ…

ナターシャ「次は何をするつもり？」

「決まっている…戦後の処理だよ…」

俺の前のモニターにはミッドチルダの代表との直通通信が繋がれていた。

ナターシャ「何時の間にミッドチルダと…」

「戦いの間にアサシンにな…」

そう…俺は戦争中にアサシンにミッドの代表との会談の場を作る為にミッドに行かせていた。

代表「君が皇帝かね…それで私と会談したいとの事だが…」

「ええ…今回のミッドチルダの我が帝国への進行についての責任についてですよ…代表。」

代表「責任だと…この一件に関してはそちらが法で禁じられている質量兵器を保有している事が原因だと管理局の本局から聞いている

が…？」

成程な…管理局の上層部はそうの様に報告していたのか…余りにも予想通りだ…

「確かに我が帝国ではそちらで言う質量兵器の保有、開発などを行っています…しかし、我が帝国は管理局に加盟していませんし、この世界は管理外世界とされています…よって管理局が法を理由に介入する事は出来ない筈です…それにことの発端は管理局の魔導師が我が帝国の領土侵犯で拘束しそれを引き渡しを拒否した事が理由の筈です…これに関する事は会話を録音してあります…したがって今回の一件に関してはミッドチルダが我が帝国に対しての宣戦布告と解釈してもよろしいでしょうか？」

代表「だとすると君は如何するつもり何だ？」

「ミッドチルダ政権と管理局の解体と武装の放棄…及びミッドチルダの国費の90%を賠償金として支払い…そして…ミッドチルダの国土の80%を我が帝国に差し出して貰いたい。」

俺の言葉に代表のみならずナターシャまでも言葉を失っていた…当然か…俺の要求はミッドチルダを事実上無条件降伏を要求している様なもんだ。

代表「ふざけるな！その様な要求を認められるか！」

「そうですか…」

俺はそう言い指をすと暫くすると代表の元に代表の部下が耳打ちすると代表の顔から血の気が引いて来た。

「そうしたした？ひょっとして…何処かの次元世界で次元震が起きて崩壊したとか…？」

代表「何故お前が！…まさか！」

気付いた様だな…俺が指を鳴らした時に何処か適当な次元世界で空間掌握の魔法を使い次空間を大きく収束させて元に戻せばその反動で次元震が起こり次元世界は崩壊する…

「私はね…空間を掌握する能力を持っています…疑うのでしたら今度はミッドチルダにでも次元震を起こしましょうか？」

俺はそう言い代表の前で再び指をならそうとした…

代表「待ってくれ！信じるからそれだけは待ってくれ！」

代表がモニターに食いつく勢いでそう言って来た…その光景が面白かったので俺は止めてやった。

「そうですか…俺もミッドチルダを崩壊させないで信じて頂いて幸いですよ。」

代表「しかし…陛下の仰った要求ですか…」

陛下に敬語ね…流石は政治家だ…分を弁えている…

「分かっていますよ…俺も一国家の元首です。この要求がいかに無茶か存じていますよ…ですので…この要求を飲んで頂きたい。」

俺はそう言い予め用意していたデータをミッドチルダに転送した。

代表「これは…」

「このデータの要求を飲んで頂けたらこれ以上責任の追及はしないし…これからもミッドチルダとは良い関係をさせて頂きたいと思っています。」

代表「分かりましたが…要求の内容が内容ですので管理局の上層部とも相談したいのですか…」

「構いませんよ…但し時間は十時間です…十時間後に連絡が無い場合は要求を拒否をしたと判断しまして…止めて置きましょう…私は貴方方が懸命な判断をすると信じていますから…」

代表「ええ…では十時間後に…」

そして、通信は切れた…

通信が切れるとナターシャがため息をついてこっちを見ていた。

ナターシャ「悪魔ね…」

「何とでも…」

ナターシャ「それで連中は要求は飲むのかしら…」

「飲むさ…あれだけ脅したんだ…政治家ってのはな…何時の時代も何処の世界も皆同じで誰にゴマをすれば自分に一番利益をもたらすかを考えている…国民の前で言っている事なんてのは建前何だよ…」

だから必ず飲むよ…そうすれば自分達は生き延び俺と仲良く出来るんだからな…」

その為に世界を一つ崩壊させた…次は自分の世界が崩壊させられるかもしれないと言う恐怖で俺の屈する事となる…ミッドチルダが屈すれば管理局も屈するしかない…所詮管理局は組織だ…国に勝てる訳が無い…

ナターシャ「だったら十時間何てリミットを設けなくても直ぐ決断させれば良いんじゃないの？余計な時間を与えれば反攻の策と考える来るかもしれないのに…」

反攻ね…

「それはそれで面白い展開何だけど…俺が時間を与え管理局の上層部と相談する事でまず何が起こる思う？」

ナターシャ「要求をどうするかじゃないの？」

ナターシャにはまだ人間の本质が分かってないな…

「違うな…まず始めに行われるのは責任の譲り合いだよ…」

ナターシャ「譲り合い？」

「そう…今回の一件の責任を誰が取るかでね…今頃は相談してる頃だろうね…責任を取りたくない責任者の間でね…」

その後に要求をどうするかを相談するだろう…要求を飲むか破滅するかをね…

「そんでアサシンにはもう1つの任務としてその相談の様子を盗み聞きしてその様子を俺の伝える任務を与えてある。」

責任の譲り合いを楽しむ為にね…反攻するにしてもその情報を知る為にもね…

ナターシャ「何処までも悪趣味ね…」

ほつとけよ…

だが確実の飲む筈だ…俺の要求は色々と本題を隠す為に用意したが幾つか重要な所を上げるところだ…アラド帝国の人間に対しては管理外世界で何をしようと管理局自体は関与しない干渉しない…管理世界でも帝国に国民に対しては管理世界の法を破った場合にのみ拘束権しか適応されず裁判の権利は帝国にあり、拘束後、帝国に送られ帝国の法の元で裁判にかけられる…管理局はいかなる場合でも帝国の政治や軍事に対して干渉しない等…

ナターシャ「これがアラドがしたい事だったの？」

「そうだよ…これで俺達は地球で管理局に干渉される事無くやる事をやる事が出来るだろ？」

ナターシャ「確かにそうだけど…」

ナターシャは納得がいかないみたいだけどやり方は俺の好きにして良いと言う契約だからな…

「取り合えずはこれで良い…」

その十時間後…ミッドチルダの代表から連絡があり要求を飲む事が伝えられ俺はそれを待つ十時間の間はアサシンから送られて来た責任の譲り合いを聞きながら久し振りに爆笑していた…ついでに余りにも退屈な戦争をさせられた腹いせにバカみたいに俺の前に出て来た執務官の遺体を回収し生首を遺族に送りつけてやった…それを見た遺族はどうするか…素直の俺を恨み復讐に来るか…それとも身の程も知らずに俺に挑んで来た管理局を恨むか…少し楽しみだ…

これで当初の計画は完了した…そろそろ王でいる事にも飽きたかがミッドチルダとの関係はあくまでアラド帝国との間で交わされていて俺個人じゃないからな…どうしたものか…王でいる事は面倒になったが帝国の価値は十分だからな…誰かに後を継がせても下手な人材に任せると帝国を崩壊させるか俺を裏切り、俺の帝国を潰させるかになるんだよな…

待てよ…一つだけ方法がある…俺の子の帝国を継がせれば良いんだよ…俺の子供であれば国民も納得だし…幼い頃から英才教育をさせれば俺の血を引く子ならば問題は無いし…親である俺を裏切る事可能性は一番低い…それに俺の子となれば母親は必然的にナターシャとなる…神（見習い）と人間との間に神話みたく子供が作れるかも興味あるし…俺の子供を産めと言った時のナターシャの反応や返事も気になるな…

そうと決まれば話しは早い…この帝国は俺の子に任せて俺は次に進むか…

アラドSIDE OUT

人物設定2・用語設定2

ジュエルシード編

年は無印開始時

ミリシャ・インデックス

（CV 花澤 香菜）

9歳（女）

アラドとナターシャの間に生まれた七人目の子供四女。

余り感情を表に出す方では言いたい事ははっきりと言う。

母親のナターシャの血の方が濃い為、身体能力や回復能力が常人よりも遥かに高上、父のアラドの一番手を掛けられている為知識も豊富な為年相応な行動が少ない。

また魔導師としての訓練も受けており空戦Sクラスの実力を持っている。

デバイスは杖型のインテリジェントデバイス「インフィニティ」を使い収束魔法を得意とバインドを得意としている。

ライアム・インデックス

（CV 下野 紘）

15才（男）

アラドとナターシャの六番目の子供で三男。

自分より唯一下の兄妹であるミリシャを溺愛しているが方の本人からは若干面倒がられている。

時空管理局の魔導師でアースラに所属している。

ミリシャ同様母のナターシャの血の方が濃い為身体能力や回復能力が高い為、良くクロノと組んでフロントアタッカーをする事が多い。
魔力量は少なく使える魔法が少ない為、主に肉弾戦を得意としている。

デバイスは籠手アームドデバイス「ブレイク」を使用している。

ナタリア・インデックス

(CV 沢城 みゆき)

25歳(女)

アラドとナターシャとの間に二番目の子供で長女。

父のアラドの方の血が濃いが魔力は殆どないがアラド譲りの戦術眼を持っている。

基本的に真面目で厳しいがなんだかんだで姉妹には甘い。

父から引き継いだインデックスコンツェルンの社長を任されている。

獅子堂 刹那

(C V 西墙 由香「幼少時」、宮野 真守「ストライカー時」)
9歳(男)

転生者で外見はガンダム〇〇の刹那・F・セイエイ。

能力はユニゾンデバイス「ゼロ」とユニゾンする事でガンダム〇〇のガンダムになる事が出来る能力を使う事が出来る。

能力使用時はそのガンダムになる(大きさは実際の大きさでは無く刹那の身長と同じになる)

武装は実際に作中で使われた組み合わせでしか使う事は出来ない(例、GNソード?とGNソード?等)

また、複数使う武器は実際に作中にしようされた最大数までしか出す事が出来ない(例、GNソードビット: 6機、ホルスタービット: 14機、GNライフルビット?・ピストルビット: 16機等)

ゼロ

(C V 門脇 舞以)

刹那の持つユニゾン型デバイス。

デバイスとしては非常に優秀だが刹那の曰ころからの行動に頭を悩ませている。

御子神 藤也

(CV 杉山 紀彰)

転生者でフェイト共にジュエルシードの回収をしている少年。

能力は王の財宝で中にはあらゆる宝具が入れられている。
ゲート・オブ・バビロン

『インデックスコンツェルン』

アラドが地球で創設した会社で「歯ブラシから核ミサイルまで」を歌い文句とした会社で日本に本社を持っている。

設立され十数年で世界最大規模のまで発展しており地球の製品の大半はインデックス製の製品や部品とまで言われている。

現在の社長はナタリアだが前社長のアラドの方が権限は上。

第七話 仕組まれた始まり

ナターシャ

管理局とのいざこざから時期に50年が経った…あれからアラドは私に神（見習い）と人間の間に子供が作れるのか実験したいとか良し出した…当然断り消し炭にしてやったわ…最も直ぐに元に戻り寧ろ私の方が精神的ダメージが大きかったけど…

それから数十年に私その事を言われ続けて30年程前に遂に一時の気の迷いであの悪魔に体を許してしまった…そして、本当に子供が出来てしまった…一度知ってしまった快樂をそう簡単忘れる事も出来ずあれから何度も体を許し続けいつの間にか子供が7人までになつてた…

そして以外だったのはアラドがきちんと父親をしている事だった…最も息子に余計な事まで教えているから考えものなんだけど…

そんなこんなで帝国を一番上の息子に任して私達は地球に移住した…移住したアラドは会社を設立した…今度社長になってみたかったからだと言う…その上、また無駄に才能を発揮し今では世界最大の企業にまで発展していた…流石に物語の中心である地球…それも海鳴市に本社を構えるのは世界に与える影響の事をアラドの抗議したが当の本人は大して気にしていなかった…現在では社長も飽きたみたいで娘に社長を譲っている…相変わらず勝手な人よ。

その上、地球に移住して数年後にはいつの間にか高町なのはの父親の高町士郎と友人になっていた…本人は偶然出会って意気投合した

ただだと主張するが何処まで本当の事なのかは本人のみぞ知る…そのせいもあり私達の一番下の娘のミリシヤは高町なのはとかなり仲が良くなっていた…流石にこれは世界に影響が出ると思っけどアラドは意識のし過ぎだと言って来た…下手に意識して行動する方が世界に影響するとか言って…本来存在しない筈の国や企業を作って置きながらアラドがそれを言う？

アラドの行いの方がよっぽど世界に影響を与えらると思っのに…

そして…今現在はミリシヤと高町なのはは9歳となる…もうじきジュエルシードがこの世界に来て物語が始まる…既に転生者の存在も確認しているのにアラドはここ最近姿が見えない…また何処かで良からぬ事を企んでいるんでしょっね…

ナターシヤSIDE OUT

アラドSIDE

俺は今、時の庭園に来ていた…俺が一人なのはナターシヤに言えば確実に反対され全力で阻止しようとする事をしようとしているからだ。

俺は庭園内で魔力を探りながらある部屋に辿り着いた。

「アンタがプレシア・テストロッサか？」

プレシア「誰…？」

その部屋にはナターシャから聞いていたジュエルシード事件の首謀者となるプレシア・テストロッサが居た…成程ね…こいつは俺と同じで何処かがいかれている。

「唯の通りすぎりと言いたいが違う…俺はアンタをスカウトに来た。」

それが俺がここに来た目的だ…俺はプレシア・テストロッサを調べ分かった事がある。

プレシアは魔導師としてはそこそこ優秀だがその頭脳には中々目を見張るものがある…だからこそ帝国か会社の方で雇いたいと思った…ナターシャなら反対するだろうしその為の手段を聞けば確実に切れる。

プレシア「貴方が私を…？」

「そうだ。俺はアンタの実力を高く評価している。それなりの待遇で迎えるつもりでいる。」

これは本当の話だ…無能相手には適当な扱いで適当な時に俺の役に立たせて切り捨てるが優秀な奴にはそれ相当の扱いをする。

プレシア「それで私に何のメリットがあるの？」

「そうだな…まず始めにアンタの死んだ娘のアリシア・テストロッサを生き返らせるってのはどうだ？」

プレシア「アリシアを…？とても貴方に出来るとは思えないわ…」

当然の反応か…俺の持つ聖杯は通常の聖杯とは違い、英霊で無くともその死者と縁のある物でなら魂を呼ぶ事が可能だ…通常は俺の魔力を使い肉体を形成するが遺体が万全の状態であれば遺体と魂の適合率次第では遺体に魂を入れる事が可能なのは既に実験済みだ…本人の遺体ならば問題は無い筈だし母親であるプレシアならばアリシアに縁の物を用意する事は簡単だ。

最も、魂を遺体に定着させていられるのも聖杯の力だから事実上、アリシアの命は俺が握っている事になるからプレシアは俺を裏切る事は出来ない…だからこそその事はナターシャには伏せておかなければならない。

「そつだな…」

俺は『龍尾』を取りだし自らの腕を切り落とした。

プレシア「何を…？」

プレシアは突然の俺の行為に驚いていたがその後、俺の腕が直ぐに元通りになって更に驚いていた…この反応は久し振りで新鮮だ…ナターシャは当初こそは驚いていたが今となれば元に戻る事が前提で俺を殺すから面倒だ…

プレシア「一体何が…回復魔法でもそこまでの早さで切断された腕は治らない筈よ…」

「俺は時間と空間に干渉出来る。その能力を使えば死者を生き返ら

せる事など雑作も無い事だ。」

本当は死者を生き返らせるのは別の能力で厳密には生き返らせている訳ではないのだがそこまで説明するつもりは無い。

プレシア「本当にアリシアを生き返らせてくれるの…?」

「無論だ。俺は取引で嘘はつかない。」

それは嘘だけど…

「唯死者を生き返らせる事は腕を直す事よりも面倒だ。だからアンタに頼みたい事がある。」

はつきり言つてどっちもそんなに変わらないがここはそう言っておいた方が良いな。

プレシア「私に何をしろと?」

話しが早くて助かる…

「とある管理外世界にジュエルシードと呼ばれるロストログアが流れて着いた。そいつを出来るだけ多く集めて欲しい。多ければ多い程成功率は上がる。」

そんな事は無いが勝手に物語とやらと変えるとナターシャが切れるからな…

それにジュエルシードがスクライアー族に発見され輸送中に事故で地球に流れ着いたのも管理局の動きが遅いのも全部俺が仕組んだ事

だけど…

プレシア「それを集めれば良いのね。」

「そうだ。」

プレシア「分かったわ。」

「交渉成立だ…」

俺は『龍尾』をプレシアに突き刺した。

プレシア「何…を…」

「報酬の一部の先渡しだ…」

俺は直死の魔眼を使い、プレシアを蝕む病魔を殺した。

「これでアンタの病気を殺した。その傷が癒えればアンタの体は健康そのものだ。だがジュエルシードの方は急いでくれ、余り遅くなっても成功率が落ちるからな。」

そんな事はないがそう言って置けばプレシアは傷が治り自分で回収する事を諦めフェイト・テストロッサと使いジュエルシードを集めるだろう…

そうなればナターシャも文句は無いだろう。

「それと今度俺達は接触を控えたい。だから…こいつを俺達とのパイプ役に置いて置く。俺に何か用がある時はこいつに言ってくれ。」

俺の後ろにはアサシンが控えていた。

プレシア「そう…吉報を待っていて…」

「分かった。」

俺はそう言いアサシンを残して時の庭園を後にした…これで始まる…来るべき破滅だろうがなんだろうが俺を退屈させないでくれよ…

アラドSIDE OUT

第八話 始まり

ミリシャSIDE

私は早朝から何時もの訓練を終え家に帰宅した…昨日の夜、変な魔力を感じた為、何時のより早く切り上げて来た…もし、何かあった時訓練で魔力を使い果たしてまともに何も出来ないなんて事は避けたいから…

ミリシャ「ただいま…」

ナタリア「お帰りなさい…今日は早いね。」

家に着いた私を出迎えたのはナタリア姉様…私より一回り年上の姉様…父様に会社経営を任されている才女で眼鏡美人の姉様だ。

ミリシャ「うん…昨日の夜に変な魔力を感じたから念の為に。」

ナタリア「そう…良い判断よ。社の方でも確認しているわ。多分口ストロギアである可能性が高いわ。」

ロストロギア…面倒な事にならなければ良いのだけれども…

ナタリア「ミリシャも気をつけなさい。」

ミリシャ「分かってます。姉様。」

アーチャー「その事についてはアラド様も気にかけていますよ。」

そう言つてキッチンから私の分の朝食を持って来たのはアーチャー…父様の使い魔で母様も姉様も家事の一切が出来ないので代わりに家の家事をしている…目が見えないらしいので何時も目を閉じている。

目が見えないのに家の家事を完璧にこなす事で出来るのし綺麗な黒髪でこの国の民族衣装の着物が良く似合うので私は少し憧れている。

アーチャー「今日はゆつくりと出来ますね。」

ミリシャ「うん。」

私はアーチャーの作ってくれた朝食を食べ始めた。

ミリシャ「姉様、父様と母様は？」

ナタリア「父さんは何時のよ。」

何時もの…父様は良くいなくなる。母様曰く良からぬ事を企んでいる時だと言っていた…だとすると母様も…

ミリシャ「だったら母様も？」

ナタリア「そうよ。今回はそんなにかからないみたいだけど。」

ミリシャ「そう…」

私は朝食を終え学校に行く準備をし家を出た。

家を出て私は幼馴染の家に向かった。

家に着き幼馴染が出て来るのを待った。

なのは「おはよう！ミリちゃん！」

ミリと言うのは私の愛称らしい、何でもミリシャちゃんと言うのが言い難かったからミリになったらしい私自身はそんなに呼ばれ

方には気にして無いから別に良いのだけれども…

そして、この子は高町なのは…私の父様となのはのお父さんが古い友人だったので生まれた時からの友達…

ミリシャ「今日は早いね。何時もなら私が起こしているのに…」

なのは「そんな事無いよ!」

ミリシャ「どうかしら…少なくとも大半はそうじゃ無かった?」

なのは「うつうつ…」

ミリシャ「そんな事より準備が出来ているなら行きましょ。」

なのはは既に起きていて学校に行く準備が出来ていたので送迎バスの発着乗まで今日は歩いていけそうね…今日は何かとスムーズに事が運ぶわ…こういう日に限って何か良く無い事が起きる物よね…

発着乗に着くとまだバスが来る時間よりも少し早かった。

なのは「まだ時間あるね。」

ミリシャ「そうね…今日はなのはが早起きだったからね。明日からもこの調子で起きてくれると助かるのだけれども…」

なのは「努力します…」

まあ、そんなに期待はしていないけど…なのはが早起きする事は良い事よ。

暫くすると送迎バスが来て私達はバスに乗った。

バスに乗るとバスの一番後ろの席で私達に手を振って来た子達が居た。

アリサ「なのは！ミリー！」

大声で呼んでいるのはアリサ…小学校に上がった時に出来た友達…昔なのはと取っ組み合いの喧嘩をしてそれ以来の友達になった。

なのは「おはよう！アリサちゃん！すずかちゃん！」

すずか「おはよう。なのはちゃん、ミリーちゃん。」

そう返したのはすずか。もう一人の友達。すずかはなのはとアリサ

が取っ組み合いの喧嘩の原因になったらしいそれ以来から三人は友達になり、なのはが私を引っ張り入れ今では、四人でいる事が多くなった。

ミリシャ「おはよう。今日はなのはが早起きで助かったわ。」

なのは「ミリーちゃん…まだ言うの…」

当然よ。なのはをからかって遊ぶのは私だけの特権よ…実際、なのはをからかうのは少し楽しい…なのはは私と違って感情が豊かだからね。

刹那「よっ！なのは。」

なのは「獅子堂君…おはよう。」

また…どっから湧いて出たの…

刹那「そんな他人行儀な呼び方じゃ無くてさ、刹那で良いぜ。」

彼は獅子堂刹那…始めて小学校に上がり始めて会った時に行き成り屋上に呼び出され『お前、転生者か？』と訳のわからないいやもんを付けられ変わった能力で攻撃して来た…最も能力は少し面倒だったけど彼自身はてんで素人だったので適当にバインドで動きを封じて終わらせたけど…

その後、何度もなのは近づいて来た…明らかに下心が見え見えで。

アリサ「アンタなんか獅子堂で十分よ！」

刹那「そんなに妬くなよ。アリサも刹那って呼んで良いからさ。」

アリサ「はあ？慣れ慣れしいのよ！」

また始まった…アリサ獅子堂君が気に入らないらしい…彼は成績も優秀で運動神経も良いからだろう…そして、なのかとなのは近づこうとするのも気に入らないみたい…それについては激しく同意だけど…それにしても獅子堂君はアリサにあそこまで言われても気にして無い所だけは凄いと思うわ。

普通あそこまで毛嫌いされていると近づこうとは思わない筈だ…

私はそんな二人を横目で見ながら相手いる所に座った…なのはは口論…と言うかアリサの一方的な口撃でおろおろしてすずかは我関ぜすな私に目で何とかする様に訴えて来ているけど私は何もする気は無いわよ。

私は大兄弟の末っ子で兄様達や姉様達に可愛がられて来たから静かな方が好きだ…それにおろおろするなのはを見ているのも面白い。更に言うたアリサと同じ事を獅子堂君に言いたい思っている。だから止める気はさらさら無い。

そうして…私の一日が始まった。

午前中の授業を終え私達は学校内のベンチでお昼と食べていた

流石に獅子堂君はいないけど多分どこかにいるでしょうね。気配が
ばればれよ…

ちなみに私のお弁当もアーチャーが作った物よ。だから中身も和食
…私は洋食よりも和食の方が好きだしアーチャーの作る和食は凄く
美味しい。

アリサ「ちよつとミリー！聞ってるの？」

アーチャーの和食の味に気を取られ過ぎていたらしい。

ミリシャ「何？全然聞いて無かったわ。」

アリサ「あのねえ…」

仕方が無いじゃない…アーチャーのお弁当が美味し過ぎるのが悪い
のよ。

ミリシャ「それで何の話し？」

すずか「将来の事だよ。」

将来か…

ミリシャ「それで？」

アリサ「ミリーは将来どうするって事よ。」

ミリシャ「私の？」

私の将来か…そこまで考えた事は無かったわね。

ミリシャ「そうね…特に無いわね。」

アリサ「アンタねえ…」

仕方が無いわ…将来の事など分かる訳も無いし願ったからと言って必ずしも叶うとは限らないんだし。

なのは「ミリーちゃんは本とか好きだし、そっちの方は？」

すずか「そう言えばミリーちゃんって良く難しい本とか読んでいるよね。」

確かに私は本を良く読むけど…

ミリシャ「別に私は本自体はそこまで好きって訳ではないわよ。」

アリサ「そうなの？」

ミリシャ「ええ、どちらと言えば本を読むより本を読んで知識を蓄えるのが好きなだけよ。」

良く母様からはそう言う所は父様似だと言われる。

アリサ「知識を？」

ミリシャ「そうよ。本を読んで知識を蓄えればそれだけ自分の世界が広がるの。そう言った意味ではネットでも別に構わないのだけれどもネットだと情報は早いけど必ずしも正確な情報とは言えないでしょ？本だと古い情報かもしれないけど正確な情報が多いわ。」

間違った情報は身を滅ぼす物だと父様はナタリア姉様にそう言っていた。

なのは「そうなんだ…」

何でなのはが意外そうにしているの？私は確か前に同じ説明をした筈だけど…なのはの事だから忘れているわね。

すずか「だったらミリーちゃんの将来は学者とかかな？」

ミリシャ「それも良いかもね。最悪、ナタリア姉様の会社で雇って貰えば良いわ。」

アリス「ミリーのお姉さんの会社って滅茶苦茶デカイわよね。」

そうらしい。

すずか「うん。そうだよね。」

ミリシャ「みたいね。」

そうして、私達はお昼は過ぎて行った。

放課後、何時もなら四人で帰るのだけれども今日は私は姉様の会社に用がある為一人で姉様の会社に向かった。

そこで昨日姉様に預けておいた私のデバイス『インフィニティ』を受け取り帰宅した。

ミリシャ SIDE OUT

ナタリア SIDE

昨日、この海鳴市に奇妙な魔力反応が検出された。

魔力を持たない私には感じられる事は出来ないが末の妹のミリシャは何かを感じ取ったみたいね。だから会社の方でメンテナンスをしていたミリシャのデバイスを早く仕上げさせた。

ナタリア「それでインフィニティの調子は如何なの？」

私は学校帰りに会社でデバイスを受け取り調子を見ていたミリシャに訪ねた…一応会社の技術者は優秀だけど如何せんデバイスは専門外だから魔導師であるミリシャの意見も聞いて置きたい。

ミリシャ「ええ、問題はありません。」

どうやら問題は無さそうね。ミリシャは私に遠慮する事はないから事実なのでしょう。

今後、他の次元世界に対してもデバイス産業を確立する事は可能でしょうね…後はライアムにでも連絡を取って管理局の我が社のデバイスを売り込もうかしら…

ミリシャ「ん？」

ナタリア「どうしたの？」

ミリシャ「魔力を感じた…これは…」

ミリシャがそう言い私は直ぐにノートパソコンを起動し市内の地図を出した。

この海鳴市全域には魔力探知機がそこら中に配置されており市内で魔力を使えば直ぐに分かる仕組みになっている。

ナタリア「確かに魔力反応があるわね…場所は…楨原動物病院ね。」

ミリシャ「動物病院？何でそんな所に…？」

ナタリア「ちょっと待って…近くの監視カメラから映像を…」

私は近くにあつた監視カメラをハッキングした…ここいらの監視カメラを始めとした機器は全てうちの会社で製造された物、だから私にはそれを全て制御出来る権限を持っている。その権限を覆す事が

可能なのは父さんしかない。

ナタリア「出たわ。」

ミリシャ「これは…なのは…？如何してあの子が…？」

画面に映し出されていたのは白い服を着たミリシャと同年位の女の子だった…この子には見覚えがある…確か…高町さんの所の末の子だったわね…確か名前はなのはちゃんだったわね…ミリシャとも小さい頃から仲が良かったのを覚えているわ。

ミリシャ「姉様、私言つて来ます。」

ミリシャはそう言いインフィニティを持って家を飛び出した。

ナタリアSIDE OUT

ミリシャSIDE

如何して…なのはが…

私はインフィニティを起動しバリアジャケットを展開し急いでいた。

なのはは昔から魔導師としての素質がある事は知っていた…だけど魔導師になる為にはあの子は優しすぎる…こちら側には来て欲しく

は無かった。

私は速度を上げなのは元に向かった。

私は到着して直ぐに取り合えずなのはを襲っていた黒い物体を収束魔法で弾き飛ばした。

ミリシャ「なのは！」

なのは「ミリーちゃん！どうして！」

なのはは私が来た事に驚いていたが今はそれどころでは無いわ。

ミリシャ「説明は後。この状況をどうにかする方法はあるの？」

ユーノ「それならなのはのレイジングハートの中に封印の魔法があります！」

フェレット？フェレットが喋る事については驚く事は無いけれど封印の魔法があるなら大丈夫そうね…

ミリシャ「分かったわ。私がアレの足を止めるからなのはが封印をお願いしますね。」

なのは「ふえ？」

ミリシャ「良いからそのフェレットとデバイスの指示に従えば良いわ。」

私はそう言い黒い物体に収束砲を撃ち込んだ。

そして、その攻撃に怯んだ隙私の十八番の複数のバインドで完璧に動きを封じた。

ミリシャ「今の内に封印を！」

そして、なのはが封印の魔法を使い黒い物体の核と思われる宝石の封印した。

ミリシャ「どうやら上手く行ったみたいね。」

ユーノ「それより貴女は…？」

なのは「そうなの…ミリーちゃん…」

ミリシャ「それよりもかなり騒ぎが大きくなったみたいよ。今は逃げた方が良くないじゃ無い？」

遠くからパトカーのサイレンらしき音も聞こえるし…

ミリシャ「詳しい話しは明日学校で話すわ。」

なのは「うん。約束だよ。」

ミリシャ「分かってるわ。」

こうして、この場は別れた。周囲は結構破壊されているけど取り合えず姉様に頼んで何とかして貰いましょう。

ミリシャSIDE OUT

刹那SIDE

俺は原作開始に伴い介入しようと思ったがミリシャの奴が邪魔しやがったせいでタイミングを逃しちゃった。

アイツは原作にいなかったキャラだから俺と同じ転生者だと思うんだけどなかなか尻尾を出さない。

ゼロ「それで？どうすんの？」

刹那「今回は良さ。カッコ良く登場出来る機会はまだある。」

そうさ…原作は始まったばかりだ…まだカッコ良く登場出来るシーンはある。そして、その時にはなのは俺のカッコよさに完全に惚れてようやく素直になる筈だ…そうすればツンデレのアリサも素直になってすずかも…ついでのミリシャも俺に惚れてハーレムの第一歩が始まる…出来れば今の内にフェイトやはやて共顔見知りになっ
て置きたい所だけど生憎とフェイトのマンションやすずかがはやてと出会った図書館の場所が分からないかがオリ主である俺とはいずれ出会い惚れるだろうし、今はなのとその他の攻略だけで十分か。

ゼロ「所でさ…どうして刹那はOガンダムにしたのさ…Oガンダムは他のガンダムに比べて特徴が無いし能力も低いよ。」

分かって無いな…ゼロは。

刹那「良いか。ゼロ始めに登場するのはやっぱりOガンダムだろ？
アニメの様なのはが危ない時に颯爽と登場してピンチを救えば刹那
みたいなのは俺にぞっこんになるんだぜ。」

ゼロ「そうかなあ…」

刹那「そうに決まってるさ。」

俺はゼロとユニゾンする事でガンダムOOのガンダムになる事が出来る。

取り合えず無印の時はファーストシーズンの機体で戦い、A・Sの
時にはセカンドシーズンの機体、そして、Strike Sの時には
劇場版の機体で戦う…そうすればどんどん強くなっているみたい
でカッコ良いからな。

刹那「さて…これ以上の長いは無用だな。今日の所は帰るか。」

取り合えずはなのはを影から見守ってやるか…俺って結構優しいな。

刹那SIDE OUT

アラドSIDE

転生者と思しき奴は帰ったか…

俺は久し振りに海鳴市に帰って来ていた。

そろそろ帰らないとナターシャが切れる頃だしな…それにしても一応、事の次第はナターシャから聞いてはいたがまさか、ミリシャが関わる事になるのは正直予想外…では無いが面白い。

神の爺さん曰くイレギュラーが関わると世界に歪みが生じるみたいだがミリシャが自分の意思で関わったのであれば問題は無いんだろう。

ミリシャ達が生まれ分かった事がある…俺やナターシャはこの世界のイレギュラーであるがその二人の血を引くミリシャ達はイレギュラーでは無い事だ。

昔、俺と一緒に息子がナターシャに鉄拳制裁を受けたがその時ナターシャも息子と同じ様にダメージを追った…ナターシャは制約でこの世界の者に意図的に危害を加えると自分にも帰って来ると聞いていたが息子でも帰って来たみたいだ…最もナターシャは息子を鉄拳制裁してその痛みを息子と共に共有出来た事を喜んでいたがな…

「さて…転生者の方が見た感じ大した事は無さそうだったけどな…」

転生者は白いロボットみたいな格好をしていた…多分神の爺さんが言っていたように何かしろの能力なんだろうがあれを自分で選んだのだとしたら理解に苦しむ。

アレだと姿から大体の能力が予想出来るし、単純な兵器ならバリエーションや改良で性能が向上するがアレではそうはいきそうにもなさそうだ…そんな使い勝手の悪い能力を選ぶのは正直理解出来ないな…好きな能力を貰えるのならばもつと使い勝手が良く、応用が利く能力の方が断然良い筈だ。

多分、カッコ良いとかそんな下らない理由からだろうな…戦う為の力にカッコよさを求めるのは実力が付いてからだ。見た感じはともそうは思えなかった。

俺が気配も姿も消さずずっと後ろ100メートル位から見ていたのに気付く素振りすらして無かった…少し殺気を飛ばしても無反応…願わくば俺に気付かせない様にしていて欲しいものだが多分本気で俺の存在には気付いていないんだろうな。

「さあ…賽は投げられた…全てが俺の手の平で踊るが良いさ。」

来るべき破滅が来るまでの暇つぶしをしてね……

アラドSIDE OUT

第九話 失敗と心構え

ミリシャSIDE

なのはが魔導師となつて数日が経つた……なのはが魔導師となつた次の日に学校にて念話でユーノから事情を聞いた。そして、私は呆れた……ユーノは単体での戦闘に適した魔導師では無いのに一人で地球に来てあまつさえなのはを巻き込んで……なのははユーノに協力するつもりだし、今更ユーノを責めた所で如何にもならないから今は早くジュエルシードを集め封印する事が先決ね。

そして、その日にジュエルシードが二カ所で出来て来た為、私となのはは二手に分かれる事にした……私の方は簡単に封印出来てなのはの方に援軍に行ったら何故か獅子堂君がいてなのはに協力すると言つて来た……私は彼の事が余り好きではないが彼の能力は近接戦闘が可能なので、私達三人は近接戦闘が苦手なので前衛で壁役を任せれば良いか……

そんなこんなで数日が経ち私達はジュエルシードを探して特になのはの方は疲労が溜まつてる頃だろうから今日は日曜日な為、少し休めて上げたい……

なのは達はなのはのお父さんが監督をしているサッカーの試合を見るって言っていたけど私は久し振りに父様が家にいるので色々と聞きたい事があるので今日の所は遠慮させて貰った。

「成程ね……ジュエルシードか……」

ミリシャ「知ってますか…？」

「まあね。」

私は父様に最近の出来事としてジュエルシードの事を話したが父様はジュエルシードの事を知っているみたい……流石父様だ。

「しかし…また面倒な事になってるな。」

ミリシャ「面倒と言いますと？」

「ジュエルシードは一つでも暴走させると次元震が起きかねない代物だからね。早いとこ管理局が出て来ると良いんだけどね。」

確かにそうだ…ジュエルシードはそれだけ危険な物なのは実際に封印している私は良く分っている事……専門家の管理局が回収をしてくれると助かるのだけれども…ここは管理外世界だからそう簡単には来てくれないでしょうけど……

ミリシャ「そうですね…」

「取り合えずはミリシャ達が頑張るしかなさそうだけどね。」

ミリシャ「はい…分かってます。父様。」

父様がここまで言ってくれてるんだ…私の気合を入れ直さないと…

「ミリシャ…」

ミリシャ「父様も感じましたか…」

「ああ」

凄い魔力を感じる…これはジュエルシード？

折角父様が家にいてお話しているのに……

ミリシャ「父様。行ってきます。」

「ああ、頑張つてこい。ミリシャ。」

折角に時間を……私は直ぐにインフィニティを起動させて発動したジュエルシードの元に急いだ。

ミリシャSIDE OUT

アラドSIDE

「行つたか。」

ナターシャ「そうね……」

ナターシャ……何時の間に……折角適当に撒いて来たのにもう帰って来たのか。

ナターシャ「それで今まで何をしていたの？」

「色々楽しい事だよ。」

ナターシャ「また悪だくみでもしようとしているの？貴方がお父様より与えられた仕事を忘れたの？」

仕事ね…俺は正直な所はどうでも良いんだけどな…

「心配するなよ。例の転生者の事ならアーチャーを監視に付けてるから問題無いよ。」

あの程度の相手ならアーチャーを見つける事は不可能だしな。アーチャーにはいざとなれば始末する様に伝えている。

ナターシャ「そう。」

「それにミリシャもいるから面白い事になるかもな。」

ナターシャ「それも心配なんだけど…アラド。ミリシャもいるんだし…」

相変わらずの過保護だな。こいつも。

「心配無いだろ。ミリシャは俺の子だし確かにミリシャはバリアジヤケット意外の防御系の魔法は物凄く苦手だけどそれを補う戦い方は一通り教えてあるだろ？」

ナターシャ「それはそうだけど…」

全く……

「子供を信じる事も親の仕事だ。この国の言葉で可愛い子には旅をさせると言う言葉がある位だ。少しはミリシャに色んな経験を積ませてやれよ。その経験がミリシャを成長させるんだからさ。それに子供は少し位やんちゃな方が良いと思うがな。俺だってそうだった。」

最も俺の時なもつと凄まじかったけどな。

ナターシャ「分かったわよ……」

一応は納得したみたいだけどまあ良いか。ここまではナターシャから聞いた情報から俺の計算通りの展開になってはいるが予想外の展開の力はミリシャか…ミリシャよ我が娘なら予想外の展開を期待しているからな……

アラドSIDE OUT

刹那SIDE

ようやくなのはと接触してジュエルシードの回収を手伝う事になった。

原作通りになのははジュエルシードを見逃してしまいジュエルシードが発動した…俺と淫獣のサポートと砲撃魔法で封印したがジュエルシードを見逃していた事でなのはは落ち込んでいた…さてとなのはフラグを回収しますか。

刹那「あんまり落ち込むなよ。誰にだって失敗はあるんだからさ。」

なのは「獅子堂君……」

また名字呼びか…もうそろそろ照れないで名前で読んでくれても良いんだけどな。

刹那「何時までも終わった事を気にする事はないぜ。今日失敗してもまた頑張れば良いだろ？」

なのは「そうだけど……」

さて、そろそろ決めるか。

刹那「それに今ジュエルシードからこの町を守るのは俺達しかないんだ。沈んでる暇があるなら次同じ失敗をしない様に努力すれば良いだろ？俺も力を貸すしさ。」

決まった…今の俺は最高にカッコ良い。そろそろなのはも落ちるか。

刹那SIDE OUT

ミリシャ SIDE

私が現場に到着すると既にジュエルシードは封印されていた来る途中になのはの魔力光の砲撃があったから多分なのはが封印したんだろう…… だけど空気が重いわね。

ミリシャ「ジュエルシードは封印出来たみたいだけどどうしたの？」

ユーノ「実は……」

私はユーノから今回の経緯を聞いた…… 成程…… なのははジュエルシードを見つけていながら気のせいだと思い見逃してそのせいで対応が遅れたと…… それでなのはは元気が無いのね。

それを聞いた私はなのはに近づいて行つた…… 本当ならば慰めてあげたい…… でも今ここでそれをしてしまえばなのはの為にならない…… だからここはあえて…… 私はなのはの頬を叩いた。

ユーノ「ミリシャ！」

刹那「何すんだよ！」

ミリシャ「黙つてて。」

何時もならなのはの行動には気にしないしその方がなのはらしいと思うけど今回はかりはきつい言い方になりそう……

ミリシャ「今回の一件はなのはのせいよ。」

ユーノ「ちよつと待つてよ。なのはは疲れていたんだし……」

ミリシャ「それが何？そんなの言い訳よ。」

刹那「それに今回は上手く行っただから次頑張れば良いだろ？何も叩く事は無いんじゃないのか？」

次……？何を言っているの？

ミリシャ「次…そうね…今回は次があつたわ…でももし次が無かつたら……今回の事で死んだ人がいたらどう責任を取るつもり…？」

なのは「それは……」

ミリシャ「私達は遊びでやっている訳じゃないのよ。ジュエルシードが危険な物なのはユーノから聞いているでしょ？もし、ジュエルシードの可能性があつたのなら私は私に相談をしなかったの？私は適度に休んでいたからまだ動けた。」

なのは「それは……」

なのはの事だから久し振りに父様とお話出来るから気を使ってくれたんだろっけど…その気遣い自体は嬉しいけど……

ミリシャ「なのはには心構えが足りて無いわ。私達が失敗すれば人

が死ぬかもしれない。それに必ずしも次があるとは限らないわ。もし死者が出ればなのはその人の家族になんて言うつもりなの？疲れていたから仕方が無い？それとも次は頑張ります？それで遺族の人は納得出来ると思う？」

そんな訳が無いわ。遺族から見ればジュエルシードを封印出来る力を持ちながら封印する前に犠牲者が出ればそれは私達が殺したも同然よ。

ミリシャ「遺族から見ればそんな事は関係無いわ。私達のしている事はそう言う事なの…」

だから、私に一言相談して欲しかったわ。

ミリシャ「もし……もし……なのはにもしもの事があつたら私はどうすれば良いのよ……」

そう……犠牲者の中になのはが入る可能性だってある……寧ろその可能性が高い……

なのは私が変わるきっかけをくれた大切な友達……そんななのはを失うと思った瞬間……涙が出て来た……

なのは「ミリーちゃん……御免ね……」

なのはも泣きそうな顔で私をそっと抱きしめて来た。

ミリシャ「次からはこんな無茶はしないで……私に相談してよ……私達……友達でしょ？」

なのは「うん…」

ミリシャ SIDE OUT

アラド SIDE

俺とナターシャは事の次第をモニターしていた…まさかミリシャが高町なのはに平手打ちをするとは俺も予想外の事だ。

「中々楽しませてくれる。」

ナターシャ「ミリシャ…何時の間にか成長して……」

後ろではナターシャがミリシャの言葉に感動していた…本当に親バカだな…こいつ。

「子供なんて直ぐに成長するさ。」

良くも悪くもね。

ナターシャ「そうみたいね。」

ナターシャは涙を拭いながら一人で納得していた…最近のナターシャは面倒だな。

子供がかわいいのは分かるが少々過保護過ぎやしないか…？こう言
った親が何かと問題を起こすんだよな。

それはそれで面白そうなんだけどな。

ここまでは順調か……そろそろ、俺がプレシアが動き出しても良い
頃だ…プレシアも精々俺を楽しませてくれる道化になってくれよな。

アラドSIDE OUT

第十話　もう一組の探索者との邂逅

ミリシャSIDE

私がなのはを怒ってから少しなのはと顔を合わせ辛かったがアリサやすすかが心配した様で今日はすすかの家にお呼ばれしていた。

正直ありがたかった…私は言いたい事ははっきりと言う分こう言う時どうしたら良いか良く分らないわ……今思えばなのはに言った事は間違いではないがやはり行き成り叩くのは不味いと今更ながら思うわ…

あれからなのはも少し様子が変だし…大方私に言われた事を気にしているのだろう……そこまで気にする必要は無いと思うけど…

必ずしも次があるとは限らないと言ったけど次があつたのならば次も同じ間違いを犯さない様にすれば良いだけだし……

ようは頭の切り替えが重要なんだけど今のなのはには難しい事よね。なのはは一つの事を一生懸命に頑張るけどそれは裏を返すと一つの事にしか集中出来ない事と同じになる。

なのはは一度悩み出すと一人で延々と考え過ぎる事が多いから…

だからこそ今回は凄く助かる。今日の事でなのはも一応は頭を切り替えてまた頑張る事が出来そうね。

なのは（ミリーちゃん！）

なのは…それにこの感じは……

ミリシャ（ええ…ジュエルシードね。）

全く…こんな時に…

なのは（どうしよう…）

ミリシャ（ユーノ）

ユーノ（何？ミリシャ？）

ミリシャ（貴方、ジュエルシードの方に走りなさい。それをなのはが追って私も仕方が無く追っかけるから。）

ユーノ（分かったよ。）

ユーノはアリサの手から逃れジュエルシードの方に走り出した。

なのは「ユーノ君！私追いかけて来る！」

なのはもそう言い手筈通りにユーノを追っかけて行った。

ミリシャ「全く…アリサ、さすが、なのは一人じゃ心配だから私も一緒に言って来るわ。」

アリサ「ついでになのはときちんと話して仲直りしなさいよね。」

予想通りね。最近の私達の雰囲気ではアリサの事だから気を使ってく

れると思つてたわ。

これで面倒な言い訳をしてここに残つて貰ふ必要は無くなった。

ミリシャ「ええ」

私もなのはを追いかけて行つた。

なのはを追ひ森に入りなのはとユーノに追いつくと目の前には巨大な猫がいた…幾らなんでも大き過ぎ無いかしら……

ミリシャ「猫…？」

ユーノ「多分、この猫の大きくなりたいと言う願いを叶えたんじゃないのかな…？」

大きくなりたいって……何を考えてるのよ…ああ、大きくなりたいだったわよね…

ミリシャ「で？これ如何する？」

なのは「どうつてやつぱり封印…だよね？」

まあそれしか無いわね…でもこの猫を傷つける事はなのはには無理そうね…私もなのはの目の前でそんな事はしたくは無いいし……意外と手ごわいわね…猫の癖して……

私達が対応に困っていると金色の魔力弾が猫に直撃した。

これは…魔力弾…この近くに私達意外の魔導師がいるの…？

魔力弾の色からして獅子堂君では無いみたいだけど…

私は周囲を警戒すると木の枝に金色の髪で黒いバリアジャケットを来た私達と同じ年位の子が降りて来た。

私は直ぐに臨戦態勢を取るがもう一人いる事に気が付いた。

もう一人は少年でかなりの魔力を持っていた。

ミリシャ「なのはとユーノはそっちの子をお願い。こっちは私がやるから。」

なのは「ミリーちゃん？」

ミリシャ「多分、この子達も私達と同じでジュエルシードを集めているわ。」

ユーノ「だろうね。」

ミリシャ「行き成り攻撃をして来たから私達と話し合う気は無いわ。」

私はそう言いインフィニティを構えた。

女の子の方は兎も角、男の子の方は正直不味いわね…本国の姉様に比べると大した事は無いけどそれでも今の私では厳しいわ……

だけど、魔力量や使える魔法が勝敗を分かつ絶対条件では無いと父様も言っていたわ。

なのはでは勝てないだろうから私がやるしか無いわ。

ミリシャSIDE OUT

藤也SIDE

原作通りフェイトと共すずかの言えで発動したジュエルシードを回収に来たけれど原作とは違いなのはとユーノ意外にもう一人の女の子がいた。

まさか、僕と同じ転生者か…？

だとしたら厄介だな。転生者なら何かしらの能力は持つてるだろうし転生者は皆身体能力と魔力量はMAXにされている。

見た感じ魔力量はそこまででは無いけれど隠す事も出来るのかもしれない。

ミリシャ「ジュエルシード集める理由は聞かないわ。だけどアレを渡す訳にはいかないわ。」

僕達の目的を知っていると云う事は彼女は彼女が転生者か…後の事を考え

ればここで本気を出す訳にはいかないな…

僕は王の財宝からエクスカリバーを出して構えた。

藤也「そう言う訳にはいかない。邪魔をするのならば排除させて貰う。」

藤也SIDE OUT

ミリシャSIDE

ミリシャ「ジュエルシードを集める理由は聞かないわ。けどアレを渡す訳にはいかないわ。」

彼らがどんな理由を持ってジュエルシードを集めているかなんて私には関係が無いわ。けど行き成り現れて横槍を入れる様な連中に渡す必要は無いわ。

藤也「そう言う訳にはいかない。邪魔をするのならば排除させて貰う。」

彼は何処からともなく剣を取りだした…まさか…あの剣は…どうして、姉様の剣を彼が持つて…考えるのは後よ、もしあの剣が私の知る物だしたら不味いわ。

私は自分の周囲の魔力弾を形成し彼に放った。

彼は剣で弾いたがそれは元より計算の上よ。

私は彼が魔力弾を弾いている間に彼の周囲にバインドを展開し彼を拘束しようとするが彼はバインドを切りながら私に的を絞らせないために移動した。移動を繰り返せばバインドを掛け難くなるけど彼がああ斬撃を放つ事で出来ないだろうから足を止めさせる訳にはいかないわ。

藤也「やるね。」

ミリシャ「どうも。」

私は彼が足を止めようとする度に収束砲を放ち彼が足を止めない様にしていた……

ユーノ「なのは！」

ユーノの叫びを聞き私は視線をなのはの方に向けるともう一人の子と戦っていたなのはは負けたくらしく気を失っていた。

これで二対一……状況は最悪ね。

藤也「向こうは終わったみたいだ。」

フェイト「藤也。終わったから帰ろう。」

藤也「そうだね。」

二人はそう言い飛んで行った…正直助かったわ。彼一人でも面倒だったのにもう一人が増えれば勝つのは難しかったわ。

ミリシャ「ユーノ、なのはは？」

ユーノ「大丈夫、気を失っているだけだから。」

ミリシャ「そう…」

取り合えずは負けはしたけど次はあるみたいね……

刹那「なのは！」

私が一息付くと獅子堂君の声が空からした……私はうんざりするも空を見上げると獅子堂君が降りて来た。

ミリシャ「何故貴方がここにいるの？」

刹那「んな事より早く、なのはを連れて行って何処かで横に置かないと。」

獅子堂君はそう言いなのはに近づいた。

ミリシャ「私が運ぶから良いわよ。」

刹那「遠慮すんなよ。力仕事は男の仕事だぜ。」

何その男女差別……それに…

ミリシャ「何言っているの？ここはすずかの家だけど？呼ばれて無

い筈の獅子堂君が居るのか説明出来る訳？こんな所で通りがかりとかはありえないわよ。」

どうせならなのはが戦闘している時に来て欲しかったわ。終わってから来るんて使えないわ。

刹那「それは…だがな…」

ミリシャ「ストーカーが不法侵入になりたくないのなら帰りなさい。」

ゼロ「彼女の言い分が正しいわ。刹那。」

ユニゾンデバイスの方は状況が飲み込んでいるわね。

ミリシャ「そう言う事だから。行くわよ。ユーノ。」

私は何とかユーノを肩に乗せなのはを引き吊りながらすずかとアリスの所まで運んだ……この状況を説明しようかしら……そのの負けた事で確実になのはは落ち込むだろうし……どうしてこう……面倒な事ばかりが起こるのよ……

ミリシャSIDE OUT

アラドSIDE

ナターシャ「何を見ているの？」

「これが……」

俺は今日、月村邸にて行われた戦闘を隠しカメラで録画された映像を見ていた。

ナターシャ「これは……呆れた。こんな所にも隠しカメラを……」

「別に驚く事はない。この地球上で俺の目が届かない場所は地中奥深くか深海位なものだ。」

地球で生活する限りプライバシーなんてありはしない。特にこの海鳴市ではな。

ナターシャ「それにしてもこっちの子供は……」

「ああ、十中八九転生者だな。」

俺が大昔、アルトリアに作ってやったアラド式変体刀の一つ『光龍』通常『エクスカリバー』を持っていた。

『光龍』はアルトリアが死後に俺が回収して今は娘に預けてある。奪われたと聞かないから多分、転生時に与えられた能力なのだろう。

神の爺さんが言うには俺のいた世界も想像物の世界らしいしアルトリアはアーサー王として歴史に名を残しているからな。

その能力を貰っても不思議じゃ無いけどな。

「もう一人はお前の言っていた…」

ナターシャ「ええ、フェイト・テストロッサ。」

ふうん。こいつがプレシアの人形か……思っていたより…

「つまらないな。」

ナターシャ「何が？」

「このフェイトがだよ。ナターシャの話しによればこのフェイトはプロジェクトFとやらでえ作られた人工魔導師だそうじゃないか。」

ナターシャ「そうだけど、それがどうかしたの？」

「どの程度かと思ったけど所詮は人形か…唯人の形をしているだけだ。」

幾ら人の形を成そうと自分の意思が無ければそれは人では無い。唯の人形だ。このフェイトもアリシア・テストロッサの記憶で動き、アリシアの気持ちを自分の気持ちだと誤解しそれで動いている。そこにフェイト・テストロッサの意思は何処にも無い。

「正直な所、もうフェイト・テストロッサに興味は無い。」

ナターシャ「だからと言って手を出さないですよ。」

「手を出す…？何をバカな事を…興味の無い奴に手を出す程暇じゃ

無いよ。俺は。」

取り合えずは『光龍』……『エクスカリバー』を使う転生者の実力はどれ程かは見て置きたいな。

戦い機会があれば良いけどな……

アラドSIDE OUT

第十一話 圧倒的な差

アラドSIDE

俺は今、ナターシャやミリシャをはじめとした地球にいる家族とミリシャの友人の家族と共に海鳴温泉に向かっていた。

ちなみに俺達の車には俺の家族が同乗し運転はライダーのクラスも持つキャスターに運転を任せた所意外と上手く運転出来たのでそれ以来、キャスターは我が家の運転手になっていた。

ナターシャは一家の父である俺が運転すべきと始めに不満そうだったが、それは無理な注文だな。俺の生まれた時代には自動車などは当然無く、それから空間掌握の魔法を使えば地球上何処にでも直ぐに行けるから自動車やその他の移動手段等時間の無駄だからな。幾ら時間がほぼ無限にある俺とは言え、一分一秒と無駄にするつもりは無い。

だから、俺は今の今まで自動車を運転した経験は愚か乗った事すら無い。そして、今回乗ってみてはやり俺の空間掌握魔法の方が便利だ。車は道が悪いと揺れるし狭くて身動きが出来ないし……その他もろもろで不便だ。俺が空間掌握魔法で目的地まで空間を繋げようとしたらナターシャに怒られた。何でも旅行は行きと帰りも合わせて旅行だとか……何で神（見習い）のナターシャがそこまで人間の家族旅行に詳しいかは非常に興味があるのだがそれは今後の楽しみにでも取って置こう。

家族旅行とやらは俺も経験した事が無いから仕方が無く自動車での移動に付き合っている。

それにしても暇だ。ナターシャは移動中の風景や会話も旅行の醍醐味だと言うが風景など昔の生まれである俺には森や自然など見飽きているし会話など今この車に乗っているのは身内のみ、キャスターは運転に集中、ナターシャが無理やり連れて来たナタリアはノートパソコンで仕事、ミリシャは友達と共に他の車、残っているのはナターシャのみだ……最近のナターシャは原作とやらが始まったせいで気が立っているから下手な事を言うと殺されかねない……最も直ぐに戻るけど痛いものは痛い。

ナターシャ「何？」

「別に……暇なだけだよ。」

自動車での移動は本当に暇だ……これだけ暇は思いをして行くんだ。唯温泉に入り宴会をするだけじゃ物足りない。いつそ殺人事件でも起きてくれると面白いのだが……犯人が考えたトリックをじわじわと見破り犯人が絶望する様は何度見ても飽きない。

最もそんな事は現実にそうそう起きる物じゃ無いからな……いつそ俺が……

ナターシャ「何か良からぬ事を考えているでしょ。」

「そんな事は考えて無いよ。唯、殺人事件でも起きてくれると面白いと思っただけだよ。」

ナタリア「父さんが言うつと洒落になって無いわ。」

洒落では無く本気なんだけどな、俺が楽しめるなら人が死ぬ位どうでも良い。人間は何時か死ぬんだ死ぬ時位、俺を楽しませてくれれば良い。」

ナターシャ「アラドの場合洒落じゃ無くて本気で言っているのよ。」

ナターシャは良く分っている。

「まあ、殺人が起きたら起きたで後が面倒だからな。」

俺としては何か祭りごとでもあると嬉しい、血祭りとかね……

アラドSIDE OUT

ゼロSIDE

今私と刹那はユニゾンし海鳴温泉に向かっていた。

刹那「たく…なのは達もさ照れないで誘ってくれば良いのに……」

ゼロ「照れるも何も家族ぐるみの旅行に誘われる程刹那は仲が良く無いでしょ。」

刹那「分かって無いな。ゼロはなのは達は照れてんだよ。アリサやミリーも俺にツンケンするのも俺に気があるからだよ。」

……流石にそれは無いでしょ……確実に嫌がられてるわ……何処をどう見たらそう取れるのよ……大体、刹那はしつこいのよ。あの位の年の子は異性と遊ぶより同性同士で遊ぶ方が楽しいのに相手の事も考えずに近づいたり大して仲が良くも無いのに名前で呼んだり呼ばせたりして馴れ馴れしいから余計に鬱陶しがられてるのが分からないの……

それに今回は完全にストーカー行為じゃん……

ゼロ「てかさ……こんな事をしてる暇があれば少しは訓練したら……？」

刹那「必要ねーよ。オリ主の俺が負ける訳が無いだろ。」

オリ主「って何よ……確かに刹那は身体能力や魔力の量は凄いいけど能力は殆ど使うだけで使いこなしている訳じゃ無いのに……これじゃあ自分より遥かに格上の相手と戦ったら確実に負ける……」

だけどいつその事一度こっぴどく負けた方が刹那の為かな……

刹那「急げば夜の温泉までには間に合うな……一応今の俺は9歳だから女湯に入れるしな……待ってるよ！なのは達！今俺が行ってやるからな！」

ハア………何でこんなバカが私のロードなんだか………

ゼロ SIDE OUT

ミリシャSIDE

温泉に着いた私達はまず温泉に入り温泉では恒例となっているらしい卓球などをした。

その後、この前の二人組と関わり合いがあると思われる女の人と念話で牽制し合い夕食の後、父様を始めとした大人組は宴会モードに入り私達子供組は布団に入り雑談をしながら寝ようとする。とジユエルシードの反応がした為、私やなのは、ユーノは現場に向かった。

ミリシャ「この辺りだと思っけど……」

ユーノ「うん……だけど……」

なのは「……何処にもそれらしいものは無いけど……」

私達が現場に到着すると既にジユエルシードは無くその代わりのこの前の二人とオレンジ色の狼がいた……

ミリシャ「どうやら、先に封印されたみたい。」

アルフ「大人しくしてろって言っただろ！ガブツと行くよ！」

その声とその物言いは昼間の酔っ払いに人ね。

ミリシャ「ユーノ、私達をバラバラに転移出来る？」

ユーノ「出来るけど……」

ミリシャ「だったらお願い。」

私もなのはもチームとしての戦闘経験は殆ど無いし能力も皆が距離を取っての戦闘が得意なタイプだから三対三での戦闘は分が悪い。ならバラバラに転移させて個別に戦った方が私達も戦い易い。

ユーノ「分かった。」

ミリシャ「なのはは女の子とユーノは使い魔を私は男の子の相手をするから。」

なのは「ミリーちゃん…気を付けて…」

ミリシャ「なのはこそね。」

ユーノ「行くよ!」

ユーノは強制転移魔法を使いなのはと女の子以外を別の場所に転移させた。

藤也「僕達を分断させたか。君一人で僕に勝てるつもりなのかい?」

ミリシャ「さあ……どうかしら……?」

正直この前戦った時に分かった事がある。

彼は強い、身体能力も魔力の量も私より遥かに高い… だけど父様も言っていたわ。戦いに置いて勝者とはいかなる手段を用いても最後まで立っていた者が勝者なのだと…… だから幾ら彼が強くとも私は負けない。」

私はインフィニティを構え彼は武器こそは出していないが臨戦態勢を取り二人は戦闘を開始した……………

「はい、そこまで。」

私達が戦闘を開始しようとする瞬間に父様がビールの缶を持ちながらそう言った。

ミリシャ「父様… どうしてここに？」

「酔い覚ましたで少し風に当たろうと思ってたんだけどね。」

それなら何故まだビールの缶を持っているのですか…… 明らかにまだ飲んでますよ。

「そんな事よりは俺としては娘がこんな夜中に宿を出て男と密会している方が気になるんだけど……」

父様…… この状況を分かってます…？ 分かってますよね……

藤也「貴方には関係の無い事です。怪我をする前に逃げた方が良いでしょう。」

父様になんて事を！ 父様は貴方より遥かに強くて賢くてカッコ良いのになんて罰あたりな！

「言ってくれるね。子供の癖にさ。」

藤也「僕を見た目で判断しない方が良いでしょう。」

怒ってる……父様は確実の怒ってる。父様が相手を挑発する時はからかう時が切れている時だけだと兄様や姉様が言って来た事がある。

「ミリシャ、ここはお父さんに任せなさい。」

ミリシャ「いえ……ここは私が……」

「行きなさい。」

聞く気が無い……仕方が無い彼には悪いが父様の怒りを沈める生贄になって貰おう。

私はなのはが戦っている方に飛んで行つた。

ミリシャSIDE OUT

アラドSIDE

ミリシャは言つたか……

藤也「良いんですか？僕は警告はしましたよ。」

さて……転生者の実力はどうか……

「見せて貰おうか。転生者の力とやらを。」

藤也「言ってくれますね!」

ガキはそう言うと後ろに大きな門が出て来た。

こいつは……成程…ギルの王の財宝か。こいつの能力は……

転生者は転生時に能力を一つ与えられるとナターシャから聞いた。俺の世界もまたこいつ達から見れば想像物の世界な訳だからギルの能力が使えても不思議じゃ無い。となれば次の手も分かる。

ガキは俺の予想通り王の財宝から大量の宝具を打ち出して来た。

だが俺は俺の周囲の空間を捻じ曲げて宝具は全て地面に突き刺さった。

確かにギルの王の財宝の中の宝具の連射は面倒だ。だが空間を歪めてしまえば当たる事は無い。

「確かにその攻撃は脅威だ。だが当たらなければ如何と言う事は無い。」

藤也「貴方はシャアか!」

ガキはそう言いアルトリアのエクスカリバーを出して接近して来た……シャアって何だよ……

俺は禁書目録の書から『龍尾』を出しガキからの斬撃をいなした。

ガキは何度も切りかかって来た。

確かに転生者とやらは大したものだ。身体能力はどう見ても外見年齢の物とは明らかに異り確実に俺よりも高いだろう。俺の体は幾ら傷つこうが直ぐに元に戻る…それだけで無く、鍛練を怠り筋肉が衰えても直ぐに元に戻る、だがその半面幾ら体を鍛えようと直ぐに元に戻る為、俺はこれ以上身体能力が良くも悪くも変化する事は無い。

だが幾ら身体能力が高かろうが筋肉の微妙な動きや目線から次の動きが容易に読める。そして、動きさえ読めれば最低限の動きで交わす事も出来る。

俺はガキの動きを先読みし大きく振りかぶつての攻撃を『龍尾』を傾けて受けるとそのまま自分の攻撃の勢いで地面にエクスカリバーが突き刺さり俺はエクスカリバーを足で踏みつけたまま『龍尾』を振りかぶった。

俺の攻撃はガキに当たる前にガキは強引に下がり攻撃を交わした。

「良く、今の攻撃を交わした。褒めてやるよ。」

藤也「こちらもう少し侮っていました。」

ふうん……これだけのやり取りで俺の力を把握したつもりか…だとしたらおめでたい奴だな。

藤也「少し本気でいきます……」

ガキはそう言うのとガキの周りの空気の流れが分かった。

藤也「約束された勝利の剣エクスカリバーアアアアア！」

ガキはそう叫び剣を振るい、俺に光の斬撃が来たが既に俺の周りの空間は断絶していた為、光の斬撃は俺に届く事は無かった。

幾ら究極の斬撃と言っても空間を通る以上空間断絶で阻む事が可能だ。空間断絶を破る為には空間そのものを破壊する攻撃で無いとな。

アラドSIDE OUT

藤也SIDE

そんなバカな……僕のエクスカリバーが届く前に見えない壁の様な物に相殺された……一体何をしたと言うんだ……

「次の攻撃は如何した……まさか、今のが最後の切り札とは言わないよな。」

あの人はまだ余裕と言った感じで僕の方に歩いて来た。

不味いな……だけど僕も余裕を出してはいられない様だ……アレを使

えばこの人を殺しかねないけどこれもフェイトの幸せの為だ。躊躇は出来ない。

僕は王の財宝から乖離剣エアを取りだした。

藤也「天地乖離^{エヌマ}す開闢^{エリシュ}の星！」

僕の放った一撃は今度は見えない壁を破壊しあの人の体を吹き飛ばした。

……勝った……

藤也「ウっ！」

僕はフェイトの方に戻ろうとするがあの人の上半身の挟れた死体を見てその場で蹲り掃いた……僕は人を殺した……だけどフェイトに幸せの為に……

「中々良い一撃だが君は人を殺した経験は無いのかな？」

藤也「なっ……」

僕は驚き顔を上げるとそこにはさっき僕が殺していた筈の人が何食わぬ顔でそこに居た。

藤也SIDE OUT

アラドSIDE

驚いているな… 良い顔だ。

「何を驚いているんだい？」

俺は分かっているけどあえてガキに聞いた。

藤也「如何して…生きて…幻術か…？」

成程そう来たか… 人は自分の理解出来ない現象が起こるとその現象を確かめる前に自分の理解出来る現象に置きたがる。しかし、それは現実から目を背け真実を見失う行為だ。大人として未来ある若者にそんな間違いを犯させる訳にはいかないな。

「幻術では無いよ。確かに俺は君に殺された。上半身を吹き飛ばされてね。痛かったな… 上半身が吹き飛ばされるなんて滅多にある事じゃ無いからね。」

流石に空間断絶もギルのエアの空間断絶までは防ぐ事は出来ないから一回殺されてしまった。流石は俺の友の持つ武器だ。未熟な使い手でもこれだけの威力を持つなんてね。最も交わすことも撃たせない事も出来たけどここは敢えて撃たせて俺を殺させた。

そうする事でガキは人を殺した感覚に陥りそして、俺が何食わぬ顔で生き返れば精神的な負担は相当な物だ。現にガキの顔はさっきまでの自分が優位な顔では無く、得体のしれない恐怖が見えている。

俺はガキの方に近づくと射撃が飛んで来た為、俺は『龍尾』で叩き落とした。

「出て来いよ。いるんだろ？」

俺がそう言つとミリシヤ達と行動していた方の転生者と思しき奴が出て来た。映像では白い奴と青い奴だけだったが今度は緑でスナイパーライフルを持った姿をしていた。

刹那「良く分かったな。褒めてやるよ。」

……いや…別に良いんだが…幾ら姿を消していようが風上にいたから風で気配も殺気もバレバレだったしそれ以前に狙撃手が出て来いと言われて素直に出て来るのがありえないし狙いもタイミングも素人だ。

通常狙撃は最初の一撃が最も成功率が高い。幾ら狙撃と言っても狙撃手が居る事を知っていれば差ほど怖く無いからな。タイミングとしてはターゲットが攻撃する瞬間等がベストだ。攻撃する瞬間は如何しても攻撃相手に気が行き確実な隙が出来るからだ。そして、狙うなら頭部か心臓の即死になる所か最低でも機動力を奪う足を狙うのが良い。今みたいに腕を狙うと今みたいに武器を持って居れば今みたいに弾かれるか盾にされて狙撃の優位が無くなし例え成功しても存在が知られるし足が無事なら隠れる事も可能な為はやり腕を狙うのは良い手とは言えない。

そして、最後にもし、初撃が失敗し存在が知られても絶対に出ないで次の狙撃ポイントに向かうが次撃を撃つべきだった。アイツみたくに出て来いと言われて素直に出るのはありえない。

それらから判断するにこいつはバカだ。狙撃の事を何も知らない。

俺がそう判断しているとガキ2はガキの方に降りて行って元のガキの姿に戻った。

刹那「どう見てもアイツの方が悪人みたいだから加勢するぜ。」

見た目で俺の方を悪人と判断したか…バカだろ…本当に悪人つてのは自分を悪人と分かっているから善人を装うもんだよ。最も俺は極悪人で間違い無いけど。

それに敵を前にして武装を解除するとは正気か…幾ら俺も持つているのが脇差とは言え一流の使い手ならこの程度の距離なら一瞬で詰めることも出来るし、脇差なら投擲する事も出来る。それにお前達は既に俺の間合いに入っているんだが…この程度の相手にはまだ『龍尾』の能力を使う必要は無いだろうけど。

「俺は別に二人がかりでも構わないぞ。」

刹那「やられ役にしては良い心がけたな。」

やられ役ね…それに何処が良い心がけ何だ…? いかんな…俺はバカが苦手なんだよな。バカの考える事は俺には理解出来ない。

刹那「行くぞ、ゼロ! フォームエクシアだ!」

ゼロ「はいはい……」

ガキ2と融合機はユニゾンしデータにあった青いタイプに成り俺に接近し右腕の剣で攻撃して来た。俺は『龍尾』で受け止めた。

刹那「俺の斬撃を止めるとは少しはやる様だな。」

ハア……頭痛い…大して早くも無く、真正面からフェイントも無い攻撃など受け止められて当然だ。この程度の攻撃を斬撃と言う等とは全ての次元世界の剣士に謝った方が良い。

「それはどうも……」

刹那「だがこれはどうだ！」

ガキ2はそう言い上空に上がった。

刹那「フォームヴァーチエ！」

今度は大きな砲台の様な物を持った大柄な姿になった。姿から見るに砲撃タイプの姿の様だ。

刹那「これが受け止められるか！」

ガキ2は砲台を持ち砲撃を放って来たが俺はそろそろ飽きて来た為、砲撃の前方の空間を歪めてガキ1の背後に繋げた。

ガキ2の砲撃は未だに俺を殺した感覚で動揺しているガキ1に直撃しガキ1は気を失った。

刹那「てめえ！何をしゃがった！」

そんな事を聞いて答える奴なんていないし、戦闘中に敵から目を外すのは愚かだ。

俺はガキ2がガキ1に気を取られている内に足の裏の空間を凝固させてガキ2に近づいた。

刹那「卑怯な！フォームキュリオス！」

卑怯も糞も無い。敵から目を外したお前が悪い。ガキ2は今度はオレンジ色でマシンガンとシールドを持った姿になり戦闘機の姿になり俺から離れた。

ほう……そんな姿にもなれるのか……以外と種類も多いな。

刹那「はっ！この速度にはついて来れないだろ！」

そこまで早くも無いんだがな。それでも俺の早さよりかは早いからだ。だったら早さで競うつもりは無い。わざわざ敵の得意とする戦いをしてやる程俺はお人良しでは無い。

俺はガキ2の軌道を読み先回りをした。幾ら早かろうと俺のアサシンに比べたら遅いしそんなにも軌道を見せてくれれば先読みも容易い。

俺は先回りをするとうガキ2を捕まえてガキ1の寝ている方に叩きつけた。

地面に叩きつけられたガキ2はその場で動かなくなった…多分気を失ったのだろう。

俺は足の空間凝固を解除すると地面に着地した。

つまらないな。転生者がどの程度だと思っていたが予想外に弱い。能力は良いのだからどちらも全く使いこなしてはいない。正直期待外れも良いとこだ。

「万死に値するな。」

少しは面白いと思っていたのにここまでつまらないのは罪だな。

俺は『龍尾』を持ち気を失っているガキどもに近づくとガキ2のユニゾンが解け融合機がガキ2を守る様に俺の前に立ちはだかった。

「何の真似だ？」

ゼロ「刹那はやらせない！」

「何故だ？お前にも分かっているだろう。そのガキはお前の力を全く使いこなしていない。それなのに庇うと言うのか？」

ゼロ「当然よ！確かに刹那はバカでカッコつけな癖して弱いしそれを自覚もしないで強い気にいるし女の子をストーカーしている変態よ！」

凄い言われようだな……この融合機はナターシャみたいだな…

ゼロ「それでも私のロードなのよ！」

「そのロードもそこで寝ている。お前一人で俺に勝てるつもりでも？」

ゼロ「勝てない事は百も承知よ！だから私はどうなっても良いから

刹那は助けて！」

確かに融合機は希少価値も高いから裏ルートで高く売れるな。しかし、それ以上に気になるのは主が無能と知りながらも自らを犠牲にしても主を守ろうとするこの融合機だ。

人は大切なものの為ならば時に自分すら捨てる事がある。こいつの行動は人のそれそのものだな。融合機は人では無くデバイスだ。思考パターンも全てプログラミングされている物だ。だがこいつは限り無く人に近いAIを搭載しているのか。プレシアの人形よりよっぽど人間らしいじゃないか……面白い。

「そうだな。今回はお前に免じて命は助けてやる。だが、俺に刃を向けた罪は消える事は無い。だから、お前の中のデータを寄せ。大特別にコピーで構わないがデータを一つでも隠してみる、その瞬間主もろとも殺す。」

どの道、こいつ等をここで殺すよりかはデータの様が面白そうだしこの融合機が面白いから今回はそれで勘弁してやるか。

ゼロ「分かりました……」

融合機は直ぐにコピーしたデータを俺に渡した。

「さて…俺はもう行くがそのガキ2人が起きたら伝えて置け、次は無いと……」

俺はそう言い宿に戻った……そう言えばガキ1に上半身を吹き飛ばされたから浴衣も上半身も吹き飛んで今の俺は上半身が裸だ…戻ったらナターシャになんて言い訳しようか……

アラドSIDE OUT

ミリシャSIDE

私は父様に後を任せなのは所に戻ると既に決着はつき女の子の方がデバイスをなのはに着きつけなのはレイジングハートがジュエルシードを出した。

と言う事……だけど素直に渡すつもりは無いわ。

私は彼女はジュエルシードを手にする前にジュエルシードを奪った。

なのは「ミリーちゃん……」

ミリシャ「どう言う事？」

なのは「それは……」

なのはは私に状況を説明した。

つまりは二人でジュエルシードを賭けて戦いなのはが負けてレイジングハートがジュエルシードを出したと……

フェイト「そう言う事だからそれを渡して……」

状況は理解出来たわ。だけど賭けたのはあくまでなのは…私が渡す理由は無いわね。

ミリシャ「嫌よ。賭けたのはなのはこれは私が手に入れた物だから奪われた貴女が悪いわ。それともこの前持って行ったジュエルシードを賭けて私とも戦う？」

フェイト「……」

彼女は黙ってデバイスを構えた。

なのは「ミリーちゃん！」

ミリシャ「なのはは下がっていて。」

私もインフィニティを構えた。

先に動いたのは彼女だった…彼女は魔力弾を周囲に形成して来た。

フェイト「フォトンランサー、ファイア。」

彼女はその魔力弾を真っ直ぐ私に向けて来た。確かフォトンランサーは直射型の射撃魔法……つまりは誘導能力は無いのなら大きく動く必要は無い。

私は最低限の動きで交わし魔力を収束させた。

そして、収束砲を放つが彼女は凄い速度で交わした。早いわね……速度は私やなのはよりも早い。

恐らく彼女は機動力を生かした中近距離が得意なタイプの魔導師……微妙にタイプは違うけど基本的な戦い方はシルヴィア姉様と変わらない。そして、シルヴィア姉様は彼女より遥かに早い。だから対処は出来ない事も無いわね。」

私は直ぐに高速戦闘を得意とする相手の対策をした、そして彼女は私の背後を突きデバイスを振りかぶっていたが攻撃する直前に動きが止まった。

フェイト「なっ！これは……」

ミリシャ「気付いたようね。でももう遅い、手遅れよ。」

すると彼女の周りには幾つものバインドが現れて彼女を拘束していた。

私が取った作戦は単純だった。私の得意魔法の一つであるバインドを私の周囲に大量に隠してただ相手がかかるのを待つだけだった。確かに彼女のスピードは速いけど相手の得意な戦い方に合わせる必要は無いじゃ無い。私は私の得意な戦い方で戦う。

ミリシャ「私の勝ちね。私のバインドはそう簡単には外せないしそれだけの数で拘束されればオーバーSクラスの魔導師でも拘束し続けられるわ。」

私はそう言いインフィニティを突きつけた。

すると彼女のデバイスからジュエルシードが出て来た。

フェイト「バルディツシュ！」

ミリシャ「物分かりの良いデバイスね。」

私はジュエルシードを回収するとバインドを解除した。解除すると彼女は直ぐに離脱しようとした。

ミリシャ「待ちなさい。貴女、名前は？私の連れが貴女の名前を知りたがってるのよ。」

フェイト「フェイト……フェイト・テストロッサ……」

彼女改め、フェイトはそう言い飛び去った。

そして、戻って来たユーノと共に私達は宿に戻った。

今回は前回のも合わせて回収出来て大収穫だったわ……

ミリシャSIDE OUT

第十二話 敗北者と新たな思惑

藤也SIDE

藤也「はあ！はあ！はあ！」

あの日か僕は毎日マンションの屋上に結界を張りエクスカリバーの素振りを欠かさなかった。

フェイトも原作通りなのはには勝ったものの僕が逃がした女の子に負けて前に回収したジュエルシードも奪われて今は落ち込んでいる。だから僕が取り返す。

この前温泉地であの人に負けたのは僕の実力不足だ。

打ちつて分かったけどあの人の身体能力はそこまで高く無かったし魔法の類を使つて無かった…僕が負けたのは単純に技量の差だと思う。

藤也「ふっ！せい！はああ！」

フェイトの幸せの為に僕はもっと強くなる必要がある。

そして、原作の様な悲しい思いはさせない！

藤也SIDE OUT

ミリシャSIDE

温泉地でフェイトに負けてからなのははあからさまに落ち込んで悩んでいる。

事情を知らないアリサとすずかはそんなのはを心配してなのはに話しかけてはいるが当のなのはは上の空で遂にアリサが切れた。

これは完全になのはが悪いわよ。アリサ達が心配しているのにそんな態度を取ればアリサは切れるのは目に見えてるわ。

アリサ「ミリーはなのはが何で悩んでるのか知ってる？」

ミリシャ「さあ？」

本当は知っているけど正直に言った所で信じられる話しても無いアリサ達は関わるべきではないわね。

すずか「ミリーちゃんでも知らないの？」

ミリシャ「私がなのはの事を何でも知ってるって訳では無いわ。特になのはは悩みごとには人には言わず一人で悩むから…」

アリサ「ミリーはそれで良いの？」

ミリシャ「私は二人よりなのはとの付き合いは長いからなのはが悩

みを打ち明けない事には慣れたわ。ほって置きなさいよ。その内は自分の中で区切りが付くか解決すれば自分から話して来るでしょ。」

なのは昔からそうだったからね。自分一人で悩んで最後は私に頼って来るんだから……

アリサ「ミリーがそう言うなら……」

ミリシャ「なのはの友達でいるらな多少は気長でいる事ね。」

なのはを見ているとたまにイライラするから短気だと直ぐに切れて愛想が尽きるわよ。

どうせ今回も最後には私に泣きつくんだから今の内になのはがフェイトと友達になる方法でも考えておきましょう。

ミリシャ SIDE OUT

アラド SIDE

ナターシャ「何を見ているの？」

「この前叩きのめした転生者のガキの一人をね……」

俺の目の前の映像には結界を張りマンションの屋上でせっせと素振りをしているガキが映されていた。

ナターシャ「結界を張っているみたいだけど何で覗けるのよ。」

「地球に居る限りプライバシー等はないんだよ。」

特に海鳴市では至る所に監視網があるからこの程度の結界では俺の目からは逃げられない。

それにしても俺に負けた次の日から素振りで鍛錬とは感心だが素振りで俺の追い付くには後何百年かかる事やら……最もその間、俺が何もしない事が前提だから素振りだけじゃ永久に俺には追い付けな
いさ。

ナターシャ「それで彼に何かするつもりなの？」

何かね……

「いや、もうこいつには興味は無いよ。だけど一応、動向は確認して置かないと寝首をかれるかも知れないからな。」

今までの経験上高い能力を持った奴が格下に負ける要因は常に己の油断と慢心だからな。常に勝つ続ける為にはその二つを排除しなければならぬ。

だからこそ、この程度の奴でも雑魚と侮れば足を掬われる可能性も零じゃ無い。

ナターシャ「でもアラドのあそこまで完膚無きまでに負けたのに良
くまた剣を振るうわね。」

「男が剣を振るう理由には幾つもあるが大きな理由としては女の為が多いな。大切な女の為なら何度でも立ち上がる。それが男なんだよ……多分。」

俺には理解出来ないけどな……こいつは多分あの人形の為にでも剣を振るっているのだろう……余程あの人形が大事と見えるけどアイツは肝心な事が見えて無い。本当に人形の事が大切ならば今すべきは強くなる事じゃ無く人形のそばに居て支えになってやる事だ。

例え強さを手に入れてもその時、守りたい人自分の所に居なくては強くなつた意味も無い。

恐らく、俺との戦いが原因かな。俺に負けたから強くなろうとして周りが見えなくなったのと、もう1つは俺を殺した時の感触が今でも残っているんだろうな。

始めて人を殺した奴が陥りやすい事だ。それを忘れる為に闇雲に剣を振るい忘れようとしているって所か……非常につまらないな……こいつの事はもうどうでも良いか。

その点、もう1つのガキの方はまだ面白そうだ……

ナターシャ「アラドはそうするつもりなの？」

「何が？」

ナターシャ「今のアラドの顔は何か良からぬ事を企んでいる時の顔よ。」

おっと……ナターシャでも分かる位顔の出ていたか……？それともナタ

「シャが俺の事を理解して来たのか……どっちでも良いか。」

「こいつを使つよ。」

俺はそう言い禁書目録の書から一つの物を出した。

ナターシャ「これは…ジュエルシード…どうしてアラドが？」

「さて…どうしてかな？」

俺は輸送艦を襲撃し地球にジュエルシードをばら撒く時に一つ回収しておいた。

既に奴がジュエルシードの情報を取り終えた以上、こいつを手放しても構わなくなった。

「こいつで自体を少し面白くするさ。」

ナターシャ「アラド、自分が何をしようとしているのか分かってるの？ミリシャなら兎も角、アラドが必要以上に介入すれば世界が崩壊する可能性があるのよ？」

「今更だろ？」

俺達以外のイレギュラーが存在す時点で世界は歪んで来ている。それにこれを使い世界がどう歪むのかも見てみたいしな。

「それに俺は介入する訳じゃない。きつかけを与えるだけだ。」

プレシアの事にしろ俺は介入した訳じゃ無いきつかけを与え、プレ

シアは自分の意思で行動している……つもりにさせて実際は俺がそうなる様に仕向けているんだけどな。そんな事をナターシャに言う必要は無い。

さて……これでどう動くか見物だな……

アラドSIDE OUT

刹那SIDE

糞！糞！糞！

何だよ！オリ主である俺が負けただと！普通はピンチになると俺の秘められた力が覚醒する筈だろ！

それどころかゼロが自らを犠牲にして命乞いをしやがって！命乞いは負けキャラがするもんだろ！たかが道具が俺庇うなんてありえないだろ！

刹那「糞が！」

俺は足元の空き缶を大きく蹴り上げるとそこに見覚えのある宝石を見つけた。

刹那「ジュエルシード……何でここに……」

これを拾いなのは達に渡せば俺の高感度が上がるな……いや…待てよ。

そう言う事か……読めたぞ。あの敗北はこの為の布石か！

敗北をし新たな力を得るきっかけって事だな！そして、このジュエルシードを使い俺は更なる力を手にする！使えない道具でな無くジュエルシードでより強力な力を手に入れろって事だな。

猫の時もきちんと願いが叶えられたんだ。オリ主である俺の願いは完璧に叶えられるだろうな！

これで俺は最強のオリ主でなのはやフェイトやはやて、果てはスバル達をも含めてのハーレムは俺の物だ！

刹那SIDE OUT

ナターシャSIDE

哀れね。アラドの思い通りの行動をさも自分の意思で行動している
と思い込んで…同情はしないけど。

ミリシャと始めて会うなり攻撃を仕掛ける様なのはアラドの弄ばれて死ねば良いのに…

「予想通りの行動だな。少々つまらなくはあるがここから見物だよ。ナターシャ。」

どうでも良いけど余り派手な事は謹んで欲しいわ。

彼女達が自分達の意味と行動で未来が変わるなら問題は無いけどアラドや私、転生者等のイレギュラーによって未来が変わると世界が歪む事はアラドも知っている筈よね。

けど…人の弱みに付け込み楽しむ、人としては最低の行為を平気でするアラドの事を私は受け入れ始めている……違うわね。とうに受け入れている…

全く……これが人間で言う惚れた弱みと言う奴じゃ……無い無い無いわ！私が最悪の人類の代表であるアラドの惚れる等ありえないわ。絶対に無い！アラドとは仕事上のパートナーよ！仕事上夫婦でいる事が何かと便利だから夫婦でいるだけよ！でなければこんな奴なんかと！

「何か俺に失礼な事を考えているだろう？」

鋭い……たまにアラドは人の心の中が読めているのかを錯覚するわ……神であるお父様なら可能だけど一応は人間であるアラドにそんな芸当が出来る訳が無い。一応人間だから…

この世界はどうなってしまうのよ……お父様の言う、来るべき破滅の前にアラドが世界を破滅させかねないわよ……

ナターシャ SIDE OUT

第十三話 暴走する欲望

アラドSIDE

凄いな……

俺がガキ2の前にジュエルシードを落としがキ2はそれを拾い願いを叶えようとするとガキ2は青い近接戦闘タイプに良く似た状態になるが前戦った時とは違うのはその大きさだ。

大きさは10メートルはあるんじゃないか…この前コピーさせたデータによるとアレはダブルオークアンタと言うのか…アイツの手持ちに能力では一番強いモードみたいだか何故俺の時には使わなかったんだ……簡単には使えない理由があるのか…？

「まあ良い。せいぜい俺を楽しませてくれ……」

そうしている内にミリシャやプレシアの人形達がジュエルシードの反応に誘われて集まって来た様だ。

俺は隠れて観戦させて貰おう。

アラドSIDE OUT

藤也SIDE

これは一体……

僕はジュエルシードの反応を感知しフェイトとアルフと共に反応のあった場所に来るとそこにダブルオークアンタがいた……

アルフ「デカイ……」

フェイト「そうだね……」

この前の転生者か？あの時は大きさは変わらなかったけどこれは一分の一サイズだ………どうする…彼の能力はガンダム〇〇のガンダムだとすると確かダブルオークアンタは作中では殆ど戦闘が無かったけど性能は作中のガンダムの中でも最強だと言っていたからその性能を完全に再現していると考えた方が良さな。

けど流石に動かしているのが刹那・F・セイエイで無い事が不幸中の幸いか………本物の純粹種のイノベーターの刹那が動かすダブルオークアンタに比べれば何とかかなりそうだ……

けど僕達三人だけでは辛いな………丁度なのは達も来ているから後で管理局に付いた時の為に共闘した方が良さな。

藤也「君達！ここは共闘したいんだか……？」

アルフ「藤也！何言ってるんだい！」

藤也「ここは一時共闘しどちらがジュエルシードを持ち帰るか決めるよー……」

どう出る……

ミリシャ「……そうね。ここはそうした方が懸命ね。」

藤也「決まりだ。」

藤也SIDE OUT

アラドSIDE

ほう……どうやらミリシャ達は共闘する様だ。

まあどっちでも良いけど……

まずはプレシアの人形が機動力を活かして攪乱か……ダブルオーク
アンタは右手の剣を振るうが流石に人形も当たらないだろうな。事
実人形は上手く交わしミリシャがバインドで動きを制限しているの
か……上手いな。

その際にガキ1がエクスカリバーを取りだしたか……ミリシャがバ
インドで完全に動きを止めたか……何時の間にあんな芸当を見に付
けて……流石は俺の娘だ。

そして、高町なのはとミリシャとガキ1が同時に大技を繰り出すがダブルオークアンタの左肩の盾に付いていた剣が盾から外れ攻撃との間に入り円形の陣形を取り円形のシールドの様な物で攻撃を防いだのか……アレは見た所機体の一部を外し遠隔操作出来るタイプの武器の様だな。

中々面白い武器を持つな。どうして俺の時には使わなかったんだ。使えばもう少し面白い戦いになったと言うのに……

過ぎた事はしょうがないかさて…次はどう出る？

ダブルオークアンタはミリシャのバインドから逃れ剣を闇雲に振り回して何やら『俺がオリ主だ！』とか『ハーレムを築くんだ！』とか……叫んでるから皆がかなり引いているぞ……欲望丸出しだな……しかもかなり下らない欲望の様だ。

オリ主の意味は分らんがハーレムの何処が良いんだ……周りに女を囲っても自分は一人しかないんだから女が自分を巡ってドロドロして最後は誰を選んでも物凄く恨まれる結果になる事が多いぞ……女はお前が考えているよりもっと独占欲が強いからな……皆で仲良く一人の男を愛し合うなんて出来る訳が無いから自分の男が他の女といちゃつくとか何をするか……

そんな事を考えているとミリシャが何やら他の連中に指示を出し一人距離を取ったな……多分ミリシャはアレを使うつもりだ。

その為に一端距離を取り時間を稼いでいると見える。

その間にもダブルオークアンタは遠隔操作を出来る剣で攻撃しているが人形は機動力を活かして回避し高町なのははあれは多分アクセ

ルシューターか……？それで剣を牽制して犬耳の使い魔とフェレットもどきはバインドでダブルオークアンタの方の動きを制限しているのか……それにガキはエクスカリバーで上手く攻撃を流している様だ……成長したと言う事か……感心だな。

そして、ミリシャは俺の与えたデバイスを構えデバイスの先端に魔力を集中し砲撃を放った。

ミリシャは砲撃の瞬間に離れる様に叫び他の連中は離れミリシャの放った砲撃は周囲の魔力素をも吸収して行った。

やはりミリシャは『インフィニティブレイカー』を使ったな。

このインフィニティブレイカーは収束魔法の中でも……と言うよりミッド式の魔法の中で最上位に位置する魔法だ。

通常の収束魔法は魔法の発動時に周囲の魔力素をも集めて砲撃する魔法だがこの魔法に至っては相手に当たるまで周囲の魔力素を収束し威力を増すからどんなシールド魔法も無意味だし反撃の攻撃み収束させて威力を増す。

つまりは魔導師戦闘に置いて反則的な攻撃だと言えるだろう……最も扱いが難しい為、管理局でも扱える魔導師はいない筈だ。

ミリシャのインフィニティブレイカーをダブルオークアンタは遠隔操作の剣のシールドで受け止めようとするが無駄だな。

砲撃はシールドに使われている魔力すらも吸収しダブルオークアンタをぶち抜いた。

確かにあの魔法は以前教えた事はあるがまさかもう完成させているとは流石は俺の娘としか言いようが無いな。

アラドSIDE OUT

ミリシャSIDE

ミリシャ「ハアハア……」

何とか父様より教えられ『インフィニティブレイカー』を使う事が出来たわ……練習では一度も成功した事は無かったけど本番で出来て良かったわ。

アレは多分獅子堂君だけど何をやってるのよ……ジュエルシードの危険性はユーノから聞いているでしょうに……

獅子堂君らしき巨人は倒れ獅子堂君とそのユニゾン型のデバイスが落ちて行ったけど自業自得ね。

それよりも……

ミリシャ「なのは！早くジュエルシードを！」

私は魔力を使い切っているからジュエルシードを封印する事も出来ないわ。

藤也「フエイト！」

なのはとフエイトは私達の掛け声でジュエルシードに飛びつき二人はデバイスを突き出した……何やってるのよ！

そんな事をすれば！

私の予想通りジュエルシードから膨大な魔力が放出され二人のデバイスには輝が入りなのはは大きく飛ばされフエイトは何とかジュエルシードを掴んでいた。

フエイト「止まれ…止まれ…止まれ…」

フエイトはそう言いながら必死にジュエルシードを掴みそして、ジュエルシードから魔力の放出が止まった……危なかったわ。次元震がこの程度で済んで……

ミリシャ「なのは…大丈夫？」

なのは「……何とか…」

そう…そうしている内にフエイト達は去って行った……助かったわ…私は魔力を使い切っていたからあそこでもう一人の彼が私達のジュエルシードを奪いに来たら確実に守り切る事が出来なかったわ。

なのは「またフエイトちゃん達行っちゃったね……」

ミリシャ「そうね……」

今回は私達の負けね。あのバカのせいで……この落とし前は如何付けさせて貰おうかしら……

ミリシャSIDE OUT

アラドSIDE

中々面白い見世物だったな……

「さてと……出て来ても良いんじゃないか？」

俺がそう言つと大剣を持ったミリシャと同じ位の年の女が出て来た……こいつはずっと戦いの間監視していたな……恐らくこいつも転生者……だけど高町なのはやプレシアの人形で無く俺の接触して来たのは何故だ？

詠美「気付いていたの。」

「まあね。君みたいな可愛い子に見られてたんだ。小父さんは少し照れるね。」

気配の消し方は良かったがどう言う訳か俺に殺気を送り続けていたからな。

詠美「ふざけないで。」

全く、会話のキャッチボールくらいしようよ……最近の若いのは年寄りに対する礼儀がなくて無いな。

「それで？小父さんに何の用かな？」

詠美「何で原作を歪める様な事をしたの？」

原作を歪める……？ナターシャの様な事を言う……

「どう言う意味かな？小父さんにも分かる様に説明してくれないかな？」

詠美「貴方は『魔法少女リリカルなのは』には登場していないわ。そんな貴方が原作に介入し物語を変えると作品が汚れるわ。」

成程…理解出来た。この世界はこいつ達の世界では物語だ。つまりは既に完結しこいつ等はこの先の出来事も知っていると云う訳だ。そして、こいつはそれを変えたく無い訳だ。俺はそれを変えたから気に入らないと云う訳だな。

「如何して？そう思うんだい？」

詠美「決まってるわ。この作品には多くの人が関わり苦勞して完成させた作品よ。それを勝手に変えて良い訳無いわ。」

成程……正論だな。但し、こいつは一つ誤解をしている。確かにこの世界は創作物の世界かもしれないけど俺達は今、ここで生きて

いる…つまりはここが現実だ。だからこいつには高町なのは達の未来を決める権利は無い。ナターシャも高町なのは等が自分の意思で違う結末を選べば文句を言わないがこいつは違うな。ようは自分の望む様に高町なのは等が生きないと気が済まないと言う訳か……

多分気付いていない様だが人に未来を勝手に決める事がどんな事がこいつは分かって無い。そう言うのは一番性質が悪い。俺はそれがどう言う事なのか理解して人の人生を弄んでいるが自覚が無い以上己の罪にも気づいて無いな…

それになんだかこいつはむかつくな…多分俺も創作物の世界で生まれたからなのだろう。こいつの考え方は創作物の世界オレたちのうちの命を軽く見られている。所詮は作り物だとな……

「気に入らないな…」

詠美「何…？」

「決めたよ。お前は殺さない。殺してやるものか…」

こいつには死んだ方がマシとも言える苦痛を受けさせてやるよ。

詠美「何を訳の分からない事を……」

「良いから来いよ。」

さあ……始めさせて貰おう。

ア
ウ
ト
S
I
D
E

O
U
T

第十四話 二人の外道

アラドSIDE

「もう終わりか……」

詠美「ハアハア……まだ……」

目の前には勘違いのバカが至る所から血を流し息も絶え絶で膝をついていた。

転生者は何かしろの能力を与えられているらしいから何時もならその能力を使わせてその能力の事を観察するがこいつは例外だ。

能力など使わせたりはしない。

詠美「貴方の様な……自分の事……しか……考えて無い人なんか……私は負けない！」

勘違いバカはそう言い立ちあがろうとするが俺は空間掌握の魔法で勘違いバカの足を空間ごと潰した。

詠美「なっ！」

勘違いバカは支えを失い前のめりに倒れた。

「だから何だ？お前もそうだろ？お前も高町なのは達に自分の好きな様に生きないと気が済まないんだろ？」

詠美「違っわ…私は物語を…なのは達の幸せな…未来を……」

幸せか……だかそれを決めるのはお前じゃ無い……

俺は尚も腕で立ち上がろうとする勘違いバカの両腕を切断した。

詠美「がっ！」

「これで武器は使えまい。」

俺は勘違いバカのデバイスを踏みつぶした。

そして、勘違いバカの髪を掴み空間掌握の魔法でその場から離れた。

本当に地獄はこれからだ……

アラドSIDE OUT

ミリシヤSIDE

獅子堂君の一件から数日が経ちなのはや獅子堂君は相変わらずだった……なのは兎も角獅子堂君が相変わらずなのは如何にかしら……本来なら私達に多大な迷惑をかけた事を謝罪すべきじゃ無い。

この前の次元震で多分近いうちに管理局が来るでしょうからその時に突き出そうかしら……

なのは「ミリーちゃん……少し良いかな？」

授業も終わり返り掛けになのはがそう言って来た。ようやくね……

ミリシャ「ええ、良いわよ。」

私達は家に帰りながらなのはの悩みを聞いた。

ミリシャ「成程……分かったわ。つまりなのははフェイトと友達になりたいと……」

なのは「うん……だけどフェイトちゃんは私のお話を聞いてくれないから……」

ミリシャ「そう……少し昔話をするわ。」

なのは「昔話……？」

ミリシャ「そうよ。昔ある所に父をとても尊敬し本の知識だけで満足していた女の子がいました。ある日、その女の子の前に父の友達の娘が来ました。その子は家の中で本を読むその子を無理やりに連れだしました。女の子は初めて家族以外の外の世界を知りました。それで女の子は変わる事が出来き今ではその女の子とはとても仲がよい友達です……」

なのは「それって……」

そう……これは昔の私達……外の世界を関わる事を止めて自分の世界に閉じこもっていた私をなのはが無理やりに外に出して私は変わる事が出来た……だから私は変わる事が出来た。

多分フェイトは昔の私なんだ……自分の殻に閉じこもり他者との関わりに拒絶している。

ミリシャ「私の知るなのはは多少強引でも諦めしないでバカみたいに突き進む子よ。」

なのは「それって褒めてるのかなあ……」

ミリシャ「当然よ。私のなのはに対する最大の褒め言葉よ。だからなのはは自分の思う通りに進めば良いわ。」

なのは「ミリちゃん……ありがとう……」

ミリシャ「気にしないで。友達でしょ。」

本当は私の方がお礼を言いたいわよ……

ミリシャSIDE OUT

アラドSIDE

俺は勘違いバカを連れとある無人世界にある研究所を訪れていた。

その研究所の中には幾つもの人間が液体のカプセルに入りとても真つ当な研究所には思えない場所だった。

ジェイル「やあ……誰かと思えばアラドじゃないか。」

こいつがこの研究所の主、ジェイル・スカリエツディ……ナターシヤが言うにはこの男もいずれ大きな事件を引き起こすと言うがそんな事には興味は無い。

俺はこいつの研究に興味を持ち資金や実験材料の調達や援助をしている。

「久し振りだな。ジェイル、研究の方ははかどっているか？」

ジェイル「君が手配した実験材料のお陰でね。一体どこからこれだけの数を用意したのやら……」

「適当な管理外世界で村を一つ潰してね。お前に渡したのはその村人だよ。年齢、性別もまちまちで良いだろ。」

ジェイル「そうだね。最も最近はクライアントが五月蠅いから大変だよ……」

ジェイルの言うクライアントとは管理局の最高評議会の連中だろう。

正義を歌いながらも裏では人体実験をさせている……そんな管理局だからこ俺は未だに潰さないでいる。

このような裏の無い組織など気持ち悪いからな。俺が管理局を気に入っている理由だからな。昔に比べ管理局は色々と裏でやっているから俺は好きだね。そう言うのはさ……

ジェイル「それで今日は何の用だい？君に頼まれていた物ならまだ設計の段階だけでも……」

そう言えばそう言うのも頼んでいたな……

「今日は良い物を持って来たんだよ。」

俺はそう言い空間掌握魔法で異空間に閉じ込めていた勘違いバカを出した。

詠美「んー！んー！」

勘違いバカには舌を噛み切って自殺しない様に猿ぐつわと両手の止血はしてある。

ジェイル「彼女は？」

「前にも話したろコレは転生者だよ。」

俺は既にジェイルには転生者の存在を教えている。最も転生者は前世の記憶を持ち様々な面白い能力を持っているとだけでこの世界は創作物の世界だとは言って無い。

そこまでの情報を開示する必要も無いしな。ジェイルとは友人として付き合っではいるが隙さえあれば俺を裏切る算段なのは俺も知っ

ているしジェイル自身俺に隠すつもりも無いのだろう。

俺には俺の言う事には殆ど逆らわない連中ばかりだからジェイルみたいな奴も新鮮で面白い。

ジェイル「ほう……」

「それと別の転生者からのデータもある。中々面白いぞ。」

俺はそう言い先日コピーさせたガキ2の能力データを出した。

ジェイル「実に興味深いな……」

「そうだろう。それでこのデータにあるGNドライブとやらはジェイルは作れるか？」

ジェイル「ふむ……可能か不可能かと言えば可能だね。だけどそんなに量産は出来そうにもないよ。」

流石だな。

「構わないさ。それでこれはお前の作品に使えるか？」

ジェイル「そうだね……使えなくは無さそうだが私の作品には一部は生身の体を持つからね。GN粒子が人体に影響しないとは限らないから余り乗せたくは無いな。」

「ならこいつを使えば良いだろ。」

俺はそう言い勘違いバカの腹を軽く蹴った。

詠美「ぐっ！」

ジェイル「良いのかい？折角捕獲したのに……失敗すればどうなるか分からないよ？」

何だそんな事が……

「それがどうした？壊れればまた捕獲してくるさ。」

まだ二人程ストックを確保してあるからな。

「だから何か問題があるか？」

ジェイル「そう言う事なら問題は無いね。」

「だろう？ついでに俺の頼んでおいた例の奴の実験代にでもさせれば良い。それにこのデータの武装とかを装備させてね。」

ジェイル「成程……それは良い考えた。」

「俺の用はこれだけだ。今は面白い遊びを見つけたからね。当分は来ないから何かあればジェイルの方から連絡してくれ。俺の専用の通信コードでね。」

もしも、ジェイルとの繋がりがナターシャに見つかれば色々と面倒だからな……

ジェイル「分かったよ。それと君の遊びとやらはプレシア・テストロッサかな？」

「耳が早いな。」

ジェイル「まあね。無駄な忠告かもしれないけど先日次元震で管理局の時空航行艦が一隻地球の方に向かっているよ。」

ようやく、お出ましか……

「面白いじゃないか。」

ジェイル「全く、君は悪魔の様な男だね。プレシア・テストロッサの子を思う気持ちに付け込んで弄んで面白がるなんてね……」

おいおいお前が言うか……

「ジェイル程じゃ無いさ。命を弄んでいるよりかはマシだと思ってるけどね。俺の方は死にはしないんだから………最もある意味、死より残酷な事をしていると自覚はしているけどね。」

だけど人が俺の手の平で踊り絶望して行く様を見るのはたまらなく面白いのだから止められないだろ。

ジェイル「見解の相違だね。二人の意見を合わせると私達は二人とも外道と言う事で纏まるかな。」

「違うない。」

どっちも外道と言う同類なのは疑いようのない事実か……まあ今更気にする事でも無いさ。

一度しか無い人生で人や世界の顔色を窺いながら生きる人生なんてつまらないからな。

人生は楽しんものが勝ちだからな。

「それじゃあ後は任せたよジェイル。」

俺はそう言ってジェイルの研究所を後にして地球に戻った。

アラドSIDE OUT

第十五話 時空管理局とブチ切れたミリシャ

ミリシャSIDE

なのはの相談を受け数日が経ちなのはのレイジングハートも治り私達はフェイトの一派と対峙していた。

なのははフェイトとの一騎打ちを望み向こうもそれを飲み私達は外野で二人の戦いを見届けようとしていた。

多少甘いとは思うけど次元震を起こす可能性を考えればまだマシだけれど問題は管理局が出て来るかね。

出来れば今回は出て来ないで欲しいわ……

二人はデバイスを構え距離を詰めぶつかり合いになろうとした時二人の間に何者かが割り込んできた。

クロノ「そこまでだ……ここでの……」

割り込んできたのは少年で恐らくは管理局の魔導師だろう……私がそう思っていると獅子堂君はユニゾン型のデバイスとユニゾンし青い近接戦闘タイプの姿になり右腕の剣を展開し割り込んできた魔導師に突っ込んで行った。

刹那「このKY執務官が！」

何を考えているの！管理局の魔導師の行き成り襲いかかるなんて！

獅子堂君が魔導師に切りかかろうとすると剣が飛んで来て獅子堂君の右手の剣を破壊した。

ミリシャ「今は……」

辺りに人の気配は無い……それに今の攻撃はアーチャー？

アーチャーだとすると私達には気配を掴む事は出来ないでしょうね。

見えない攻撃により剣を破壊された獅子堂君との魔導師との間に今度はライアム兄様が割り込み獅子堂君に当て身を喰らわせた。

ライアム「公務執行妨害の現行犯だ。」

兄様が出て来るなんて……面倒ね……

クロノ「助かったよ。ライアム。」

ライアム「これは貸しだぜ？」

クロノ「分かってる。時空管理局だ。双方武器を納めて事情を聞きたい。」

なのは「ふえ？」

なのはは自体が理解出来て無い様だがここは大人しく従った方が良いわね。

ミリシャ「なのは、ここは言う事を聞きなさい。」

ユーノ「その方が良いよ。」

なのは「分かったよ。ミリーちゃん。ユーノ君。」

私達は管理局に従おうとするがフェイト一派はどうやら違うみたいで若干交戦して逃げて行った。

私達は管理局の時空航行艦に連れていかれて現在は艦長と対峙していた。

この道中にユーノがフェレットでは無く人間だった事になのはが驚き、ライアム兄様がウザかったりしたけど無事に艦長室に通された。

艦長室は日本の和室みたいな所で艦長の趣味の良さが窺えるわね。

うん、私と趣味が合いそう……

そして、私達は事の次第を管理局に説明した。

リンディ「成程……貴女達の事情は分かりました。貴女達の行動は立派です。」

クロノ「同時に無謀でもある。」

ライアム「確かな……素人を巻き込むのは頂けないな。」

兄様に言われるとむかつとするけど正論ね。

リンディ「ですから今回の一件に関しては私達が全権を持ちます。貴女達は手を引いて貰います。」

当然の判断ね。

しかし、なのは達は納得がいかない様だった。

刹那「ふざけるなよ！今まで何もしなかった癖に今更かよ！アンタ達は何もしないから俺達がジュエルシードを回収してたんだぞ！次元震まで起きてもしこれで地球が消滅したらどう責任を取るつもりだったんだよ！」

……五月蠅いわね……

ミリシャ「五月蠅いわよ……さっきから聞いてれば勝手な事を言わないで。ここは管理外世界……つまりは管理局が介入していない世界よ。そんな世界は幾つもあるんだから全部の世界を常時見張る事なんて到底無理だしここは管理世界じゃ無いから管理局の動きの遅さを責められる言われは無いわ。そして、次元震の責任は獅子堂君でしょ。ジュエルシードの危険性はユーノより聞いていた筈よ。それなのに封印もしないであまつさえ願いをかなえようとした獅子堂君に責任があるんじゃないかしら？」

ライアム「それにこの場ではお前に発言権は認められて無い。お前は公務執行妨害の現行犯で逮捕されてんだよ。」

刹那「はあ？バカかここは管理外世界だ。アンタ達に法を行使する権限は無いんだよ！」

ハア……どうにかしてよ……この馬鹿は……

ライラム「残念だな。確かにそうだが例外があんだよ。幾ら管理外世界の人間だろうと俺達が管理局の魔導師と知り先に魔法攻撃を仕掛けて来た場合は公務執行妨害が適応されるんだよ。つまりお前を逮捕拘束する事は可能なんだよ。」

ミリシャ「ついでに付け加えるならばロストログアの不当使用と次元震の発生も加えられるわ。」

ライラム「それも追加だな。だからお前には一切の発言権を認められないんだよ。この場にいるのは事情聴取の為だけでお前の意見は聞いて無いんだよ。」

兄様と意見が合うのは癪だけど獅子堂君に対する日ごろの鬱憤に比べたら兄様の鬱陶しさは一応兄妹だから我慢は出来ない事も無いし兄様はシスコンだから私の頼みなら大抵の事は聞いてくれる分はマシだわ……

ミリシャ「獅子堂君の事は置いて私は兎も角なのは納得が行かないみたいですけどどうします?」

リンディ「そうね。行き成りそんな事を言われても納得がいかないみたいだから一晩考えて頂戴。その後きちんと話し合いましょう。」

それが妥当な所ね。少し時間を置けばなのはも頭の整理が出来るから今後の事もっと冷静に話し合う事が出来るわ。

刹那「待てよ。少し可笑しいだろ。」

またなの……

なのは「どう言う事？」

刹那「さっきお前達は全権を持つとかって言ってただろ？それなのに何を話し合うんだよ？」

リンディ「それは今後の事を……」

刹那「正直に言ったらどう何だよ。なのは達の力を利用するつもりなんだろ？」

リンディ「それは……」

流石に私の我慢も限界よ……

ミリシャ「その何処が悪いの？」

刹那「何だと？」

ミリシャ「だからなのはの力を利用する事の何処が悪いのよ。」

刹那「本気で言ってるのか？管理局はなのはの力を利用しようとしてんだぞ！」

本当にムカつく……

ミリシャ「人間関係なんてみんなそうでしょ？私達が管理局に協力する事で管理局は私達の力を利用し私達も管理局の情報や人材を利用する。互いが互いを利用し合う事の何処がいけないの？私もなの

はといると楽しいからなのはといる。これも私の楽しい事の為なのはを利用してゐるわ。だけどは当然の事じゃない。一緒に居ても楽しくも無い相手や何も感じない相手と友達には慣れないわ。それに艦長が本音を言わないのも当然でしょ。組織に居てそれもそれなりの立場に居れば本音と建前を使い分けるのは当然でなのはの力を戦力として欲しくても露骨な勧誘は褒められた事じゃないから建前を使うのは当然でしょ。何より一番腹が立つのは獅子堂君の言い方はなのはが自分じゃ何も決められず良い様に利用されるから自分が守ってやらないとか思ってる訳？だとしたら物凄く不愉快よ。なのはを侮辱しているわ。なのははねバカかもしれないけどね自分のやるべき事はきちんと分かっているの。なのはの事を何も知らない癖にそんな言い方は止めて貰える？正直殺意も湧くわ。」

ライアム「久し振りにミリシャが切れたな……」

クロノ「そうなのか？」

ライアム「ああ……ミリシャは切れるとああやってマシンガントークで相手を責め続けるんだよ……確実の親父似だよ……最も親父の方はもつとえげつないけどな……」

五月蠅い……私が兄様達を睨みつけると兄様達はあからさまに目を反らした。それで良いのよ。邪魔しないですよ。

ミリシャ「そんなに管理局に協力したく無いならそれでも良いわ。少なくともここでお別れよ。元々私た獅子堂君の協力を黙認していたのは私達は接近戦が苦手だから前衛が欲しかったからだけよ。管理局と協力すれば兄様がいるから獅子堂君はもう必要は無いのよ。協力関係はここまでよ。ハイ、さようなら。」

ライアム「それは出来ないってこいつは一応、犯罪者としてアースラで拘束の身なんだからアースラから降ろす事はまだ無理だって。」

ちっ……

ミリシャ「……そう…取り合えず今日の所は私達は帰りますけどよろしいでしょうか？」

リンディ「……ええ……構わないわ。明日も同じ時間に向かえを出すわ。」

ミリシャ「分かりました。なのは、ユーノ、行くわよ。」

なのは「……うん……」

ユーノ「分かったよ……」

そして、私達は獅子堂君を置いて地球に戻った。

なのは「それでミリちゃんはどうしたいの？」

ミリシャ「私はなのはのしたい様にすれば良いと思うわ。私もそれに着いて行くから。」

どうせ私と意見が食い違ったらなのはは絶対に譲らないだろうから……私の方が合わせた方がお互いやな気分にならなくても済むし正直なのはの選択なんてどうでも良い。早い所ジュエルシードを何と

かしてくれれば私はそれで……

ミリシャ「返りましょ。なのはは一晚ゆっくりとユーノと話し合えば良いけど寝坊はしないでよね。」

なのは「うん。また明日ね……」

ミリシャ「ええ……また明日。」

私達はそこで別れ私は家に帰宅した。

予想は出来るけどなのははどう言う選択をするのか少しは楽しみだわ……

ミリシャSIDE OUT

第十六話 甘い罠

ミリシャSIDE

翌日、私達は再びアースラを訪れていた。

リンディ「本当に良いの？」

なのは「はい！」

なのはの答えは管理局に協力すると言う事だった。

ライアム「ミリシャもそれで良いのか？」

ミリシャ「ええ」

なのはがそう決めたのなら私はそれに従うつもりだったしね……管理局に協力する事は色々と便利だし……

ミリシャ「ですが、私達はあくまで民間協力ですのでその所は分かって頂けますね。」

リンディ「ええ……分かってるわ。」

他者を利用する時は自分以上に相手に利用させない様にすると父様のお言葉だから必要以上に私達を利用をさせるつもりは無いわ。

ミリシャ「感謝します。」

早い所ジュエルシードを回収してこの一件を終わらせてしまいたい
わ。

ミリシャ S I D E O U T

藤也 S I D E

僕達はジュエルシードを持ってフェイトの母親のプレシアのいる時
の庭園に来ていた今現在フェイトはプレシアに結果を報告している。

原作通りならば今頃は……

暫くすると体中が傷だらけのフェイトが出て来た。

アルフ「フェイト！」

アルフがフェイトを抱きかかえた。

知っていたとしても我慢できそうにないな……

藤也「アルフ……フェイトを頼む……」

アルフ「藤也！どこ行くんだい！」

僕はアルフの言葉を見殺しプレシアの元に向かった。

プレシア「誰？」

藤也「フェイトの協力者です。」

プレシア「そう……それでその協力者が私に何の用……？」

僕は怒りを抑えつつプレシアに近づいて行っただ。

藤也「如何して貴女はフェイトにあんな仕打ちをするんです？」

プレシア「貴方には関係の無い事よ。」

藤也「フェイトは頑張ってるんじゃないですか！」

フェイトはまともに食事すらしないで頑張ってるんだ……僕はそれを見て来た……

プレシア「それがどうしたの……？」

藤也「フェイトは貴女も娘じゃないですか！それなのに貴女は！」

僕は我慢の限界でプレシアに掴みかかった。

藤也「フェイトはね！貴女に褒めて欲しくて頑張ってるですよ！少しは褒めてやったらどうですか！」

僕がそう言っているとプレシアは僕から目を反らした。

プレシア「……そうね…フェイトは私の娘だったわね…」

どうやら僕の思いが届いたみたいだな……

藤也「だったら今度来た時は褒めてやって下さい。」

プレシア「分かったわ……」

僕はプレシアの言葉を聞きフェイト達の元に戻った。

藤也SIDE OUT

アラドSIDE

俺は暇だったので時の庭園を訪れるとガキ1が何やらプレシアに説教をしてる所だった。

説教を終えガキ1が出て行くと俺は拍手をしながらプレシアの前に出て行った。

プレシア「盗み聞き？随分と趣味が悪いのね。」

「聞こえて来たんだよ。」

盗み聞きも好きだが今回は本当に偶然なのだが今はそんな事は些細な問題だ。

「それで？あのガキに言っただ事は本気？」

俺がそう聞くとプレシアは何やら考え込んだ。

「別に本音を言う必要は無いよ。俺が気に入る答えを言えば良い。ただど気に入らない場合はどうなるかわからなくても分かるよね。」

プレシア「そうね……」

「それで？今度フェイトを褒めるの？如何なの？」

プレシア「それで目的を果たす事に近づくのなら褒めて上げるわ……正直な所は気が進まないけどアリシアの為なら何だってするわ……例え出来そこないの人形を娘扱いしてもね……」

良い答えだ。行き成り出て来たガキに少し説教された位で心変わりするようならばもう興味も失せたからね。

「良い答えだよ。それでこそだ。」

プレシア「そんな事はどうでも良いわ。本当にジュエルシードを集めて貴方に渡せばアリシアを生き返らせえてくれるの？」

「ああ……本当だとも……信じるかどうかはプレシア次第だけど可能でそのつもりもあるとだけ言っておこう。」

プレシア「そう……信じるしか無いわね……それで今日は何の用なの

？連絡はアサシンを通して定期的に連絡はしている筈よ。」

そう言えばそうだったな適当に聞いていたから忘れていたよ。

「まあね。少し前にねジュエルシードが暴走して次元震が起きてね。それで管理局が嗅ぎつけて来たんだよ。それでさ今後の事を伝えに来たんだよ。」

最も暇つぶしが目的だったけどこの際はこれも伝えておこう。

俺は今後の計画の一つのパターンをプレシアに伝えた。

プレシア「そんな事が可能なの？」

「可能だよ。最もプレシアには拒否権は無いんだけどね。だけどこれをやり遂げればアリスアの蘇生に一つ近づくしこれはあくまでそう言う事になった時の算段でプレシアは好きにすると良さ。」

プレシア「そうさせて貰うわ。」

「機体しているよ。」

さてと…こっちはこれで良い後は今から追えばまだ間に合うだろう。

俺は自家製の認識阻害を施した仮面を付けガキ1の前に出た。

この前、顔を見せてるからな。この仮面を付けていると顔見知りでも姿だけでなく声や魔力の波長で誰かと特定する事は出来なくなる。

「やあ少年。」

藤也「誰だ!」

ガキ1は直ぐに臨戦態勢を取った。この前に比べれば少しはマシになったと言う所か……最も俺には関係ない事だな。

「そう警戒しないでくれ。私は神の使いだよ。転生者の少年よ。」

俺がそう言うのとガキ1は臨戦態勢を解いた。ちよいいな……一度は神に会っているから神の名を出すと直ぐに信用したよ……

藤也「それで神の使いが僕に何の用です?」

「一つ聞きたい事がある。君は何故あの少女の力になる?ジュエルシードを集めたからと言って君には利益は無いと言うのに?」

藤也「そんな事は関係ありません。僕は唯フェイトが幸せであれば良い……それだけです。」

幸せね……こいつの行動が果たして人形の幸せと言えるのかね……自分の幸せの間違いだろ?

「先ほどプレシア・テストロッサに言った事もですかね?」

藤也「そうです。プレシアがフェイトを娘として扱えばフェイトも幸せになります。」

「どうか……プレシアはそんなつもりは無いけどな。」

「そのお心の神は痛く感動しましたそれでプレシア・テストロッサが壊れた理由である。アリシア・テストロッサを生き返らせて下さるそうです。」

藤也「そんな事が可能何ですか？」

「可能ですよ。貴方達転生者と同じ様に魂を肉体に定着させれば生き返る事は出来ます。幸いプレシアはアリシアの肉体を保存していますしね。」

神の転生のさせかたなんて知らないがこいつも知らないだろうからそれらしい事を言えば簡単に信じるだろう。

藤也「確かにそれなら可能かもしれない……アリシアが生き返ればプレシアとアリシアと共に暮らす事はフェイトの夢だつてA・Sで……」

ほら信じた……ここまで単純だと駆け引きの面白みが無いが良いだろう……こいつには差ほど興味は無いからな。とことん弄んでやる・

「その為に頼みたい事があります。」

藤也「何ですか？僕に出来る事なら言つて下さい。」

「そうですか……ではいずれ来る最後の時にフェイト・テストロッ

サをプレシア・テストロッサの元に案内して欲しい。」

藤也「そうすればアリシアを生き返らせてプレシアとアリシアとフ
エイトの三人が会いフエイトも幸せになれる……」

「そうです。」

その時に君のその傲慢さに敬意を表して絶望を進呈しようじゃない
か……

藤也「分かりました。それまでは原作通りに進めさせれば良いんで
すよね。」

「勿論。」

そんな事はどうでも良いけどな。

「では貴方に幸せがあらん事を……」

俺はそう言い後ろに空間断層を作りその中に消えて行った。

これで後はプレシアが俺に言った言葉が本当か嘘かで結末が変わる
が正直どっちでも良いがな。

つまらない結末ならば俺が手を加えて面白い結末に変えるだけだ。
問題はナターシャか……アイツを下手に怒らすのは得策じゃ無いな

……

まあ……どうにでもなるし、どうにでもなれだ……世界は自分の思う
様に動かない事や予想外の事があるから面白いからな。

精々俺を楽しませてくれよ……

アラドSIDE OUT

第十七話 組織の判断と個人の判断

アラドSIDE

取り合えず種は撒いた。

これがどう芽吹くか楽しみだな……

ナターシャ「随分と楽しそうね。」

俺がガキ1をそそのかし地球に戻ると家にはナターシャだけがいた。

ナタリアは仕事でアーチャーはガキ2のキャスターはガキ1の監視をさせているからいないがミリシャは管理局か……

「そう見えるか？」

ナターシャ「ええ……とても楽しそうだね。何があつたのか私にも聞かせてくれる？」

そう言うナターシャの目は俺を完全に疑っている目だった……当然か……まあ良いけど……

「少し面白い事になりそうだね。年甲斐も無くワクワクしてるんだよ。」

ナターシャ「また悪だくみ？」

「まあね。」

俺が世間一般で言う悪だくみ以外の事を自主的にする訳が無いだろ。
ナターシャ「そう……くれぐれも世界への影響を考えて行動して。」

以外だな……ナターシャがこうもあっさりと喰い下がるとはね……
神（見習い）の考える事はイマイチ分らんがそれはそれで面白いから良いだろう。

「善処するさ。」

最も俺の行動が世界にどう影響するかも少し興味があるから考えて行動をするが自重はしないからどう影響が出ても知らないけどね。

まあ神の爺さんとの契約もあるから世界が減びない程度には自重するけどあくまで世界レベルでの自重だから個人レベルでは保障はしないけどね……

アラドSIDE OUT

ミリシャSIDE

私達が管理局を手を組んでジュエルシードの回収を始めフェイト達と遭遇する機会が無くなっていた。

向こうは管理局の介入で慎重に行動しているのかそれとも諦めたのか……現場では判断が付かないわね……

その間私達は管理局のサポートの元ジュエルシードを回収したのはの訓練等をしていた。

獅子堂君も私が切れた一件から大人しくなったと言うか私をあからさまに避けているから同じ時空航行艦で生活していても殆ど顔を会わす事も無いから幾分マシだけど相変わらず兄様は何かと鬱陶しかった。

そんなある日の事だった海上で強力な魔力反応を感知したとかで私達はブリッチに来るとブリッチのモニターにはフェイトが海上に強力な魔法を撃ちこんでいた。

なんて無茶な事をするの……このままでは魔力が尽きるわ。

使い魔はいるけど男の子の方は今日はいないのね。彼の方が魔力量が圧倒的に多いから魔力流を撃ちこむには最適だと思うけど……

私は状況を把握しているとなのは艦長に自分の行きたいと言っているが艦長はそれを許可しなかった。

当然ね。このままだとフェイトは確実に魔力が切れるわ。それからの方がフェイトを確保するのも容易になるわ……だけどそれはあくまで組織としての判断……

ミリシャ「なのは……行きなさい。私達は民間協力者だから艦長の命令に従う義務は無いわ。ユーノ、転送装置のをお願い。」

まあ……民間協力者でも協力する以上は指揮官の判断に従う必要があり勝手な独断行動は許される事では無いけどなのははその所は気付いて無いわね。

私がそう言うとなのはとユーノは転送装置の方に向かい、獅子堂君とその融合機もそれに続いた。

獅子堂君は立場的に勝手な行動は不味いけど私が止めて上げる理由はないわね。自業自得ね。

リンディ「ミリシャさん……」

ミリシャ「分かってます。なのはに行くようにそそのかしたのは私ですから私が罰を受けますよ。」

どの道、私が行くように言わなくてもなのはの正確上、勝手に行くのは目に見えているからせめてその後の罰は私が引き受けるからなのははフェイトと話しをしてきさなさい。

暫くして艦長は諦めたのかモニターの集中した。

なのは達が出て無事ジュエルシードは封印出来たがその後、何者かによる攻撃をアースラは受けた。

恐らくは次元跳躍魔法ね……そんな魔法を使えるのは相当の実力者ね。

アースラは撃沈こそはまのがれたけど相当なダメージを負った様ね。

なのは達の方にも攻撃はあったみたいだけど何とか無事なのは達

を回収する事が出来た。

そして、命令を無視し勝手に出て行ったなのは達とそれを示唆した私は今、艦長の説教を受けていた。

ミリシャSIDE OUT

ライアムSIDE

独断で出て行ったなのは達を回収し艦長直々にお説教をしていた。

リンデイ「今回はこれで良いけど次からはきちんと私の言う事を聞いて下さい。」

なのは「御免なさい……」

艦長自身もフェイト・テストロッサを見捨てると言う判断は心苦しかったんだろうか説教は比較的短かった。

多分、説教の理由は独断で出た事だけなんだろうな。

刹那「ふざけんなよ！なのははなフェイトを助けようとしたんだぞ！その何処がいけないんだよ！アンタ達はフェイトを見捨てようとしたんだ！そんなのは人として最低だ！」

……こいつは…艦長とて人の親なんだからあんな小さな子を見捨てると好きで判断した訳じゃないんだ……

それにこの場合はこれで丸く収まったと言うのに……こいつは…始めクロノにKY執務官と突っかかって行っただけでこいつの方が空気読めよ……ミリシヤなんてまた切れそうだぞ……

ミリシヤ「黙りなさい……」

あーあ…切れたな…流石の俺も数日の間に二度もミリシヤを切れされた事は無いぞ…ただだけ嫌われているんだよ……

ミリシヤ「さつきから貴方はまた勝手な事を……艦長はこの艦で一番の責任者だから常に艦の模範でいるべきなの。だから個人の意思で動けば下の連中が正しければ個人の意思で動いても良いと思い勝手に動けば組織として機能しなくなるわ。だからこそ艦長は敢えて非常とも思える判断を下したのよ。無論艦長自身はそんな判断をしたくないから私達の処分がこれで済んだのよ。そんな事も分からないで自分の正義を無理に押しつけて最低呼ばわり？本当に不快だわ艦長、彼はもう必要ありません。今すぐにこの船から降ろす事を提案します。」

こりゃ相当頭に来てるな……クロノもエイミィも滅茶苦茶引いてる……

ライアム「ミリシヤ……悪いんだけどそう言う訳にも行かないんだわ……」

今のミリシヤを刺激するのは正直怖いがいいつを降ろす事は無理っばいんだわ……

ミリシヤ「どう言う事です？兄様？事と次第によつては兄様と言え

ども……」

やっべー… 実の妹とは言え切れた時のミリシャは容赦ねーからな…
…けどな… 俺も男だ。言うべき事は言わないよいけないんだよ！

ライアム「そいつは公務執行妨害並びにロストログアの不正使用の
現行犯でアースラに拘留中の身だ。だからその罪状の刑罰が決定す
るまでアースラを降ろす事は出来ないんだよ。」

俺がそう言つとミリシャの機嫌が更に悪くなり今なら殺気で人を殺
せそうだ……

ライアム「だけどな？ 降ろす事は出来なくてもこいつは独房入りな
んだよ… それで我慢してくれるよな……」

ミリシャ「………確かに… 妥当な所ね…」

うっし！ 何とか納得してくれたみたいだ。

刹那「何でだよ！」

空気読めよ！ またミリシャが切れかかっているだろ！

ライアム「さつきも言った通りお前はミリシャ達とは違い民間協力
者では無くアースラで拘留中の犯罪者だ。今までアースラ内で自由
に行動出来たのは今回の事件に協力する意思があると判断したから
だ。しかし、今回の一件でお前には逃亡の恐れがある事が判明した。
よってお前のアースラ内での自由に動く権利は剥奪される。無論、
拘留中は魔力にリミッターを掛けて抑えるしユニゾン型のデバイス
との接触や行動も禁止だ。」

ゼロ「まあ……妥当な所ね。」

ユニゾン型の方は聞き訳があつて助かるな。

刹那「ゼロ！お前はどっちの味方なんだよ！」

ゼロ「どっちってさ…向こうの言っている事は正論だよ。刹那もいい加減自分の置かれている立場を認識したら？」

ライアム「そう言う事だ。クロノ、こいつを頼んだ。」

クロノ「ああ……」

クロノは獅子堂を連れて行った。

ライアム「今回はこれで済んだけど余り勝手な事は控えるよ。」

なのは「はい……」

ユーノ「済みません……」

ミリシャ「分かってるけど兄様に言われるとなんかムカつく……」

はあ……ミリシャの親父に対するデレ振りを少し分けて欲しいぜ……

ライアムSIDE OUT

藤也SIDE

原作通り海上でフェイト達はなのは達と共にジュエルシードを封印しプレシアが介入をした。

次はアルフがプレシアと交戦して時の庭園を逃げ出す……そして、アリサに拾われて管理局と接触する…そして、なのはとの一騎打ち……

今回、僕がで無い事で原作通りに事は進んでいる。

このまま進んでクライマックスでフェイトとプレシアを巡り合わせれば……

それまではフェイトには辛い思いをさせるけどこれは後の幸せの為なんだ……

今は耐えてくれ……僕が必ず幸せな未来に変えるから……

藤也SIDE OUT

第十八話 真実

ナターシャSIDE

「物語はクライマックスを迎える……」

アラドはそう言い夜空を見上げていた……

私達は今、インデックスコンツェルンの本社ビルの屋上に来ていた。何故屋上かと言うとアラド曰くこう言ったのは深夜の屋上ですべきとの事だったのだがアラドのこう言う所は正直理解に苦しむわ。

「運命の定めた結果となるのか私の定めた結果となるのか新たな未来を掴むのか……それともまだ見ぬイレギュラーにより全く異なった結末になるのか……」

どうでも良いけど次元を歪める結果にならない事だけを祈るわ。

アラドもこの所、私に内緒で何やら動いているみたいだし……私がい詰めてもアラドは適当な事で誤魔化すだろうし今はアラドも次元を歪めないで一応は信じるしか無いわ……物凄く不安だけど……

「さあ！如何なる結末になるか私を楽しませておくれ！ハハハハハハア！」

ナターシャ「ハア……アホらしいわ……」

本当にそう……

ナターシャSIDE OUT

藤也SIDE

今日、原作通りアルフがプレシアと戦い敗れた。

僕は予めアルフが海鳴市に逃げれるように細工をしていたから上手くアルフは海鳴市に向かう事は出来ただろう……

もう直ぐだ。もう直ぐなのはとフェイトの一騎打ちが始まりフェイトは管理局に保護される。

そして、最後はあの神の使いがアリシアと生き帰らせればきっとプレシアは正気に戻りそうすればフェイトの夢に出ていた生活をする事は出来る……リニスがいけないのは僕には如何する事も出来ないけどアリシアとプレシアと暮らす事は出来ればきっとフェイトも幸せになる。

だからフェイト……今は辛いけど頑張るんだ……フェイトの未来の幸せは僕は作るから……

藤也SIDE OUT

ライアムSIDE

ミリシャ達は一時帰宅させた俺達は今回の事件の重要人物であるプレシア・テストロッサについて調べているが色々面倒な事になって来た……

まず、プレシアの娘は既に死んでおりもし生きていても年が合わない……プレシアの娘がいたのは十年以上も前の話だ。もし生きていたのであれば俺よりも年上な筈だがフェイトはミリシャと同じ位の年だったしな……

しかし、この前の戦闘でフェイトは攻撃の主を母と呼んでいて攻撃して来た魔法の魔力はプレシアの魔力と一致した……と言う事はフェイトはプレシアの娘となるが……それに俺が気になるのはその時のフェイトの様子だった。

攻撃時のフェイトがあからさまに怯えていた……俺も母さんにはしょっちゅう教育的指導でゲンコツを喰らっているが自分の母親にそこまで怯える事は無いだろう……何か怯える理由があるのか……？

分からん……俺は父さんやナタリア姉さん等みたいに頭が良く無いからな……こう言う事を考えても埒が明かない……俺は肉体労働派だから考えても無駄か……こう言うのは艦長やクロノの仕事だしな。

俺がそう結論付けるとブリッチから呼び出しを受けた。

どうやらミリシャとなのはが友達の家でフェイトの使い魔と出くわ

しこちらとコンタクトと取って来たみたいだ。

そして、俺達は使い魔のアルフから事情を聞いた。

フェイトは母親のプレシアから命令を受けてジュエルシードを回収していた事、ジュエルシードの回収が遅れ虐待と受けている事、もう一人の少年は御子神藤也と言いある日突然フェイトの前にやって来てジュエルシードの回収を手伝っているがその真意も目的も不明な事……そして、アルフは俺達にフェイトの保護を求めて来た。

さて……これから事件が動くか……

ライアムSIDE OUT

ミリシャSIDE

アリサの家に保護されていたフェイトの使い魔からフェイトの事情を聞き数日後、なのははフェイトと対峙していた。

フェイトの使い魔のアルフによる情報は少し気になるしライアム兄様からの情報……プレシア・テストロッサの娘は既に死んでいると言う事……なのはに伝えるかどうかは私に一任されてたが私は結局なのはには伝えなかった。

この事はなのはがフェイトと友達になりたいと言う事には関係は無いし、なのはにはこの一騎打ちには勝って貰いたいしわね……例え

リンディ艦長達はこの一騎打ちの結果はどっちでも良いみたいだしね。

ただ今後の事を考えればこの一騎打ちは勝った事に越したことも無いわ。

ユーノ「やっぱり僕達も……」

ミリシャ「必要無いわ。なのはは勝つ。」

なのははこの数日間はフェイトと対等に戦う為に様々な訓練をして確実に強くなったわ。

後はこの戦いでフェイトと友達になりたいと言う思いをぶつけければ良い……

なのはとフェイトは互いにデバイスを構えて睨み合い戦闘が開始された。

フェイトはやはり機動力を活かした戦い方をしたのはも前みたいに機動力の振り回される事も無く冷静に対応出来ていた。

ミリシャ「よし……速さに振り回されて無い。」

なのはも誘導弾でフェイトを追うが事前になのはと打ち合わせ通りなのはの誘導弾はフェイトのスピードに追い付く事は出来ないが誘導弾をフェイトの動きに合わせて動かしてフェイトの機動力を削る事は一応は成功はしている様だ。

フェイトも何時までもなのはのペースに合わせる事も無く直射弾で

攻撃して来た。

だけどここの反撃も予想の範囲無いよ。なのはは慌てずにプロテクションを展開しフェイトからの攻撃を防いだ。

今のなのはの防御力ならあの程度なら慌てなければ防ぐ事は出来る。

なのはとフェイトの攻防は一進一退で続いていたがフェイトが先に仕掛けて来た。

なのはの四肢をバインドで拘束し自分の周囲に大量のスフィアを出した。

ぱつと見で数は40前後つて所ね。大した数……

フェイト「フォトンランサー・フランクスシフト」

大量のスフィアから大体毎秒7発位の攻撃がなのはを襲った。

ユーノ「なのはは！」

ミリシャ「大丈夫……」

なのはなら必ず耐えきれる筈……

フェイトの大技が終わりなのははバリアジャケットに損傷はあるけどどうやら無事の様だった。

なのは「攻撃が終わればバインドも解けるみたいだね。」

それだけ喋ればまだ余力はあるみたいね。

なのは「今度はこっちの番!」

なのははそう言い今度はフェイトの四肢にバインドを仕掛けた。

フェイト「バインド!」

なのは「ディバインバスターのバリエーション!これが私の全力全壊!」

なのははそう言いデバイスを構えた……アレをやるのね。

なのは「スターライトブレーカー!」

なのはの大技……スターライトブレーカー……私の得意とする収束魔法……

なのはの砲撃をフェイトはシールドを何枚も出して防ごうとしたけど貴女には防ぐのは無理よ。

フェイトは元々機動力を活かした戦法と得意としている。だからフェイトの戦い方は敵の攻撃は全て交わすのが基本、バインドでその機動力が封じられた時点で貴女の負けよ。

フェイトのシールドはことごとく破壊され直撃した……フェイトは大丈夫かしら……?

まあ……なのはのデバイスは非殺傷設定になっているから死にはしないけど確実にトラウマを植え付けそうね。

なのはの砲撃の余波が覚めるとなのはが気を失っているフェイトを抱えていた。

どうやら勝負は付いた様ね。

一騎打ちの後、私達はフェイトを連れアースラに戻った。

これからが私達も忙しくなるわ……

私達がアースラに戻りフェイトはなのはとの一騎打ちで受けたダメージを治療しつつ軽く拘束されブリッチに付くとプレシア・テストロッサの居所が判明しアースラの武装隊を突入させる所だった。

武装隊は瞬く間にプレシア・テストロッサを囲むと彼女の後ろの部屋に突入した。

部屋の中には水槽な様なカプセルがありそこにはフェイトにそっくりな少女が浮かんでいた。

どう言う事……？

プレシア「アリシアに障らないで！」

武装局員が水槽に手を触れようとするとプレシア・テストロッサは激昂し武装局員を吹き飛ばした。

武装局員は直ぐにアースラに転送された。

フェイトにそっくりな少女……なのはやフェイトは突然の出来事に言葉を失っているが恐らくアレがプレシア・テストロッサの実の娘

……

ミリシャ「アリシア・テストロッサ……」

フェイト「アリシア…？」

ミリシャ「なのは達には黙っていたけどプレシア・テストロッサの娘は既に死んでいるのよ。」

フェイト「え……」

プレシア「そう……私の娘…アリシアは死んでいる…フェイトはね…当時私が研究していたプロジェクトで作られた。フェイトと言うのはそのプロジェクトの名前……」

プロジェクトF・A・T・E……人造魔導師を作るとか言う研究…つまりフェイトはアリシアの遺伝子を元に作られていると言う訳ね……

プレシア「だけど貴女は失敗よ。アリシアは我がままも言うけど私には優しくった……」

なのは「…止めてよ…」

プレシア・テストロッサの言葉に次第にフェイトが青ざめて行った。

プレシア「だから……私はね……貴女の事が大っ嫌いだったのよ……」
プレシアがそう言うとフェイトが持っていたデバイスがフェイトの手を離れ地面に落ち輝が入った……

ミリシャ SIDE OUT

第十九話 終焉

ミリシャSIDE

そう言う事……

プレシア・テストロッサの言葉にフェイトは茫然としているけど当然か…信じていた母親にああ言われてはね。

かなり酷い仕打ちを受けても彼女の為に戦い続けて来たのだから…最も本当は唯信じたかったのかもしれないわね。

自分は愛されていると…そうでないと今までして来た事が無意味になってしまうから……

ライアム「艦長！俺達も出ます！」

なのは「あの！私達も！」

リンディ「……お願い出来る？」

なのは「はい！」

ハア……正直な所私達は支援だけして管理局に任せれば良いと思っていたけどこの状況ではなのは何を言っても止まらないわね……私の出来る事はなのはを手伝い速やかに事態を終わらせる事ね。

アルフがフェイトを医務室に連れて行き私達はアースラの転移装置

の向かった。

ミリシャ「ここが……」

私達は途中でアルフと合流しプレシア・テストロッサの拠点に転移された。

転移された場所は入り口だと思うけどどうせならプレシア・テストロッサの所に直接転移して欲しかったけど待ち伏せをされるよりはマシと思うしか無いわね。

クロノ「行くぞ」

私達は拠点をゆっくりと観察する暇も無く中に入りプレシア・テストロッサの元に急いだ…また肉体労働…勘弁して欲しいわ。

ユーノ「なのは、虚数空間に落ちない様に気を付けて」

なのは「虚数空間？」

ミリシャ「簡単に説明すると魔法が使えない空間の事よ。落ちたら終わりよ。」

私達が虚数空間に落ちない様に走っていると前方に多数の人形のような敵が出て来た。

なのはが直ぐに迎撃しようとするがクロノ執務官が制止した。

クロノ「ここで無駄玉を使う必要は無い」

クロノ執務官は的確に一撃で邪魔な敵を排除した……流石は本局の執務官と言った所ね。

私達はクロノ執務官の開けた穴を抜けるがそれでもまだ数が多い上にこのままだと退路が絶たれるわ。

ミリシャ SIDE OUT

ライアム SIDE

ライアム「ちい！」

クロノの攻撃で敵の数は減らされたけどまだうじゃうじゃいるし帰り道が塞がれるぞ……

ライアム「仕方がねーな……」

俺は目の前の敵をぶんなぐるとミリシャ達に背を向けて立ち止った。

ミリシャ「兄様？」

ライアム「ここは俺が食い止めるからお前達は先に行け！」

男なら一度は言ってみたいセリフだよな……これでミリシャも少しは見直してくれると良いが……

ミリシャ「分かったわ。なのは、ユーノ、私達は先を急ぐわよ。」

ミリシャはそう言いなのは達を連れて先に行った。

……少しは躊躇ってくれても良いんじゃないのか？我が妹よ……

ここは信じて貰えていると思って退路を確保するか……

クロノ「全く……君一人でここを死守出来ると思っているのか？」

ライアム「クロノ……いたのかよ？」

クロノ「まあね。君一人にここを任せる訳にも行かないしね。」

全くさ……

ライアム「んじゃ……背中には任せたぞ。」

クロノ「お互いにね。」

……たく……ここは俺一人で格好を付けたかったのによ……色男過ぎんだよ！

ライアムSIDE OUT

ミリシャSIDE

なのは「良かったの？ライアムさんを残して来ても……」

ライアム兄様に後ろを任せ私達は一先ず高い魔力反応のある場所を目指していた。

ミリシャ「問題は無いわ。兄様の耐久力は凄いから。」

アルフ「アンタの兄ちゃんは強いのかい？」

ミリシャ「兄妹の中では弱い方だけど、少なくとも私より強いわね。」

最も武闘派の兄妹の中での話しだけ……

ライアム兄様は日頃から母様の鉄拳を私達の中で一番受ける確率が高く本国でもコハク姉様との模擬戦で唯一最後まで耐える事が出来るからこの程度ではやられる事はまずないと思うわ…それにクロノ執務官も残ってくれたみたいだから心配する必要は無いわ。

ユーノ「ミリシャがそう言うのなら僕達は先を急ごう。」

私達が通路を進むとそこにはプレシア・テストロッサでは無く恐ら

くはこの動力炉みたいな所に出た。

ミリシャ「ここは動力炉？」

ユーノ「多分ね。それに動力にはロストロギアが使用されているみたいだ……」

確かにね……これだけの魔力を普通の動力炉では無いだろうからロストロギアを使っている可能性は高いわね…それに恐らくは暴走もしている…

ミリシャ「なのは、取り合えずこのロストロギアを封印するわよ。」

なのは「ふえ？」

ミリシャ「これをこのままにして置くのは危険よ。」

ユーノ「ミリシャの言う通りだ。それに封印すれば敵の動きを止められるかもしれない。」

敵は魔力を動力にしているのならばその可能性もあるわね。

そうすればこの機能を封じるだけでなく戦力を削ぐ事も出来る。

ミリシャ「私は封印魔法は使えないから私とユーノとアルフさんで援護するからなのはが封印をお願いね。」

なのは「うん！」

なのはが封印魔法を砲撃で撃ちこむ為の時間をユーノがなのはを防

御魔法で守り私とアルフさんで敵の数を減らし行つた。

それにしてもユーノはデバイスも無しで良くもあれだけの魔法が使えるわね……父様はデバイスは所詮は魔法を使う為の補助的な機械だと言っていたけどデバイスの補助を無しでまともに戦る自身は無いわ……

攻撃力は無くてもデバイスも無しにあれだけの魔法が使えるのユーノがいてくれて正直助かるわ。

その分私はなのはを気にしないで敵の数を減らす事に専念出来る。

アルフ「やるじゃないか。収束魔法をそんな速度で使うなんてさ」

ミリシャ「これとバインドしか能が無いので」

私には収束魔法とバインドしか才能が無いから私はこの二つを極める事で何時かはコハク姉様を超えて父様に認めさせる！

なのは「ミリちゃん！アルフさん！封印いけるよ！」

私達が敵の数を減らし時間を稼いでいる間にどうやらなのはの準備が整った様ね。

ミリシャ「私達は上手く避けるからそのまま撃ちなさい！」

なのは「うん！ディバインバスター！」

なのはの砲撃を私達は交わしそして、砲撃は動力炉に直撃し動力に使われていたロストログアは上手く封印出来た様ね。

アルフ「相変わらずバカ魔力だねえ……」

全くよ……少なくとも魔力の量だけなら私の倍はあるわね。

ミリシャ「まあそれが取り柄ですしね。」

なのはあの魔力量と砲撃魔法は鍛えれば武器になるわね。少なくとも才能が偏っている私とは違い使い勝手の良い魔導師に将来はなりそうね。

私がそう考えていると大きく揺れた……恐らくは動力の停止となのはの砲撃の影響だろう……ロストログアの封印をするにしては魔力が多過ぎると思っていたけど流石にここまでとは……

ミリシャSIDE OUT

藤也SIDE

ようやくこの時が来た……

原作通りなのは達が時の庭園に突入して来たから後はフェイトが来た時にプレシアの所に連れて行き神の使いにアリシアを生き返らせ

て貰っただけだ。

それでフェイトは幸せになれる。

僕はプレシアに与えられていた部屋を出てフェイトが通ると思われる通路でフェイトを待ち伏せしているとフェイトがやって来た。

フェイトは僕を確認すると敵意はそれほど無いが一応は警戒していた。

藤也「安心してくれ、フェイト。僕は敵じゃ無い。」

フェイト「……本当？」

藤也「ああ…僕は君とプレシアと話しをさせる為にここでフェイトを待っていた。」

フェイト「私と母さんを？」

藤也「そうだ。プレシアだって君の事は本当は大切に思っている筈なんだ…だからきちんと話をしないといけない。」

プレシアはアリシアを失い可笑しくなっているだけなんだ。

だからアリシアさえ生き帰ればきっとフェイトの事だって……

藤也「だから行こう…行ってフェイトの思いをプレシアの伝えるんだ。」

そうすればプレシアはフェイトを娘として愛してアリシアとアルフ

と共に幸せな未来を掴み取る事が出来る。

僕はフェイトと共にプレシアの元に向かった。

藤也SIDE OUT

アラドSIDE

さて……ここまでは俺の計画通りだ。一つ問題を上げると高町なのは砲撃が予想以上で時の庭園に大打撃を受けたと言う所か……

それ以外は俺の計画通りで少々つまらんが仕方が無いだろう…そう何度も予想外の出来事ばかりの計画を立てる程俺はバカでもないしな……

最も俺の全く予想もつかないサプライズ的な出来事が起きないのはやはり残念だ。

まあ起きないものを期待してもしようがないしまだ完全に終わった訳ではないからこれから何かが起きる可能性も無くは無い…

俺がそう考えているとようやく役者が揃ったな。

ガキ1が人形を連れてプレシアのいる部屋にやって来た。

そして、俺は姿を現した。

プレシア「誰…？」

プレシアには手筈を教えてあるけど一応仮面を付けている為、プレシアは俺を認識出来ていないがプレシア程の魔導師ならば俺だと気づいてはいるだろうけど手筈通りに知らない振りは出来ている様な。

藤也「約束は果たしました。」

「そうですね。では…私も約束を果たすとしましょう……」

俺はそう言い隠して置いた聖杯を使いアリシアの魂をアリシアの肉体に定着させた。

魂の定着したアリシアは目を覚ます事は無いがカプセルの中で微かに動いている事が確認できた。

藤也「フェイト…君の思いを使えるんだ。」

フェイト「うん……」

人形は頷きプレシアの前に出た。

プレシア「……何？」

フェイト「私はアリシアでは有りません……でも私にとって貴女は私の母親です。」

プレシア「だから何？貴女を娘として愛せと？」

フェイト「貴女がそれを望むなら…私は全てから貴女を守ります。」

成程ね……それがフェイト・テストロッサの答えか。

さあ…プレシア、君の答えはどうだ。

プレシア「下らないわね。アリシアが生き返った今、貴女は用済みよ。何処え行くなり勝手にしなさい。」

これが君の答えだと言ったな。予想通りの答えでつまらないな……

フェイトはある程度予想は出来ていたのかプレシアの拒絶を静かに受け止めていたがガキ1の方は受け入れられない様だった。

藤也「どう言う事だ！約束と違うじゃないか！」

プレシア「貴方まだいたの？貴方はもう用は無いわ。消えて頂戴。」

利用するだけ利用して後はポイか…大した悪女だな。それでこそ、俺の下につく価値があるよ。

藤也「ふざけるな！俺に言った事は全て嘘だったのか！」

プレシア「そうよ。全部嘘……」

この場合はプレシアの事を良くも知らずに信じたお前が悪い。

信じるとは賭けと同じだ。信じて裏切られたお前は賭けに負けたも同然、その対価は自分で支払わないとな。

俺は怒りの矛先が俺に向く前に空間掌握魔法で俺の空間を歪めて周囲からは見えない様にしておいた。

俺が隠れていると何時の間にかガキ1の手のはエクスカリバーが握られていた。

藤也「ふざけんなあああああ！」

ガキ1は怒りに身を任せてエクスカリバーを振るった。

そして、プレシアとアリシアの入ったカプセルは光に包まれた。

アラドSIDE OUT

第二十話 事件の終わりとその裏

ミリシャSIDE

動力の封印をなのはのバカ魔力の影響でプレシア・テストロッサの拠点は沈み私達は何とかアースラの転移して貰い事無きを得た。

フェイトとアルフは一応は犯罪に手を染めた為、現在は独房入りに成り協力者の少年もまたアースラに転移され独房入りになっていた。

そして、私達はアースラの食堂で一息ついていた。

ミリシャ「これでようやく一息が付けるわ……」

なのは「所でクロノ君……フェイトちゃん達はこれからどうなるの？」

クロノ「事情が事情とは言え犯罪に手を染めた以上無罪にする事は無理だけど母親に命令されて事だしフェイト自身の年の事もある。そう重たい罪にはならない筈だ。」

ライアム「精々数年間の管理局での奉仕活動くらいには軽く出来る筈だ…クロノが」

随分と軽い罪だけでもまあ妥当な所でしょうね。親に命令された子供にそう重い罪を与えると管理局のイメージも余り良くは無いだろうし主犯のプレシア・テストロッサは死亡したからこの事件はこれで終わりね。

そして、私が一番気になる事がある。

ミリシャ「それで獅子堂君はどうなるの？」

それが一番の問題ね。私としては極刑が終身刑とかにして欲しいけど流石に軽犯罪者をそこまでの罪にする事は難しいわね。

クロノ「彼の罪状は公務執行妨害と逃走だからな。それに彼は管理外世界の人間だから刑務所に送られるのではなく定めされた年だけリンカーコアを封印し魔法と関わる事を禁止とそれまでユニゾン型のデバイスの没収とかになる程度だと思うよ。最もそれを破る場合はリンカーコアを完全に消滅させると言った所だ。」

妥当だけど納得がいかないわね……

ライアム「それとなフェイト達の協力者……名前は御子神藤也って言うんだがフェイト達にも協力する理由は聞いて無いんだがフェイト達みたいな理由がある訳でも無さそうだから罪は軽くはならないだろうって事だ。」

クロノ「それに彼にはプレシア殺害の容疑も掛けられているしな。」

崩壊の最大の原因は彼がプレシア・テストロッサに放った一撃が原因だって話だし、情状酌量の余地は無いわね。

ライアム「何だけどなあ……だけど完全に精神が逝っちまってるかな……刑務所よりも先に精神病院行きだな。」

彼はプレシア・テストロッサに騙され逆上にプレシア・テストロッ

サを殺害したとフェイトが証言している。

そして、その後、精神が崩壊したみたい……自業自得ね。

クロノ「取り合えず。今回の事件は主犯が死亡で終わりだ。協力者の君達には簡易的ではあるが勲章が授与される。」

勲章ね……私としては早く日常に戻りたいわ……

そして、アースラで簡易的な勲章の授与が終わり私達は地球に戻りフェイト達は本局に移送される前に私達と海鳴市で会える事になった。

なのはとフェイトは互いに何を言えば良いのか分からないのか中々話しが先に進まなかった……

ミリシャ「時間は限られているから早くしなさい。」

フェイト「……そうだね……」

なのは「…うん」

フェイト「君は前に私と友達になりたいって言ってくれたけど……私にはどうやったら友達になれるのか分からない……」

ミリシャ「そんな事なのは気にしないわ。私も勝手に友達にされたから。」

今となっては感謝しているけどね。

フェイト「そうなの…？」

ミリシャ「ええ……嫌がる私をなのはは無理やり……」

なのは「そんな事してないよ！ミリちゃんの前談だからね！フェイトちゃん！」

フェイト「そうなの？」

ミリシャ「半分はね。」

私の意思を半ば無視して友達になろうとしていた事は事実だけど今となつては良い……かどろかは分からないけど想い出ね。

だからこの位の反撃は許されるわね。

ミリシャ「まあ友達になるなんて簡単よ。少なくとも相手の事が嫌いでなければね……」

獅子堂君みたいな人とは一生無理だけど…

なのは「そうだよ。名前で呼べばいいんだよ。」

随分と簡単だけどそれで良いんじゃない。

フェイト「名前で……？」

ミリシャ「そうね。まずはそれからね。私はミリシャ・インデックス。友達からはミリーって呼ばれているわ。フェイト。」

なのは「そうだよ。フェイトちゃん！」

フェイト「なのは……ミリー……」

なのは「うん！うん！」

……何この空気は……これが母様と良く見ていたドラマなんかである青春って奴？

客観的に見ていると別にそうでもないけどその渦中にと随分とむず痒いわ……

私がそうしている内になのはとフェイトはお互いのリボンを交換していた。

私は別に交換する物も無いし縁があればまた会えるんだからそんな事をする必要も無いしね。

そうして、面会時間も終わりフェイトはユーノと共にアースラで管理局の本局に移送された。

少し寂しいけど鬱陶しいライアム兄様が行ってくれて清々するわ。欲を言えば獅子堂君も連れて行って欲しかったけど……まあ空気を読んでこの場に来なかったのは褒めてあげるけどやっぱり彼とは生理的に気に入らないから今後一切関わり合いにならない様に切に願うわ。

ミリシャSIDE OUT

アラドSIDE

「何とか上手く行ったか……」

プレシア「……ここは？」

まさかガキ1がブチ切れてエクスカリバーを使うのは予想外だったがプレシアの死を偽装する為の細工をする手間が省けたから良しとするか……

俺は横槍を入れて偽装すれば管理局の操作で俺の介入がばれる恐れが出て来るからな…その点今回はフェイトがガキ1がプレシアを殺したと証言してくれるから罪は全部ガキ1がかぶってくれるしな。

最も見た感じ精神が逝ったみたいだから余り意味は無いか……だが精神が逝ったから神の使い…つまりは俺の存在も管理局に知られずに済んだから最後は役に立ったと言えるだろう。

「ここは俺の帝国だ。プレシア・テストロッサ」

プレシア「話しと少し違ったわ。」

「まあ何にでもイレギュラーは出て来るさ。だが計画は成功したよ。プレシア・テストロッサは死んだよ。」

ガキーが使ったのがエクスカリバーで助かったよ。もし、エアの様に空間を破壊するだけの宝具を使用されたら空間掌握の魔法では対処出来なかった。

時間操作の魔法は空間掌握の魔法に比べたら使うのが面倒だし出来れば使いたくは無かったしな……最悪切り札を切る事も視野に入れていたが空間掌握の魔法で対応出来る攻撃で助かったよ。

プレシア「良くもあれだけの攻撃を防いだわね。私は怪我をしていないみたいだけど……」

「あの程度なら問題なく防げるよ。」

プレシア「……貴方本当に人間？」

失敬な……

「俺は一応人間だと自負しているけど」

攻撃事態は怒りに身を任せた攻撃だしエクスカリバーの一撃ならコハクの方が破壊力は圧倒的に高いから大した事は無い。

エクスカリバーならばその気になれば時の庭園を跡形もなく消す事も不可能じゃないしコハクなら一撃で半壊は可能だ。その程度の威力しか無いのは使い手の問題だ。

プレシア「まあ……どうでも良いけどアリシアは？」

「今は帝国の誇る最高の医師団に見て貰っている。蘇生の方は完璧

だ。医師の許可が出れば直ぐにでも会えるさ。」

プレシア「そう……一応感謝しておくわ……」

「別に良いさ、俺も善意で蘇生させた訳ではないからな。約束は覚えてるよな？まさか俺の約束までも反故にしないだろうな？」

プレシアならやりかねないからな……

プレシア「まさか……あの子供とは違い貴方を敵に回す程バカでは無いわ……それで私達は今後はどうなるの？」

「取り合えずプレシアには貴族の爵位を与える。」

プレシア「貴族？私が？」

「そうだ。我がアラド帝国は貴族制度を取りれている。」

プレシア「何処の馬の骨とも分からない女を行き成り貴族にしたら反感があるんじゃないの？」

「問題は無いよ。帝国では俺は神にも等しい存在だし帝国では俺がルールだ。俺に意見する事は出来ても俺の決定を覆す事は出来ないんだよ。」

そう言う風に俺が作ったしな。

「それに爵位を与えたと言っても結果を出さないと剥奪されるしな。」

そつする事により貴族は爵位を剥奪されない様に結果を出すし平民も貴族になる為に日々精進する。

だからこそアラド帝国は常に進化している。

「そして、プレシアにはやって貰いたい事がある。」

プレシア「私に出来る事ならね……」

「当然だ。プレシアに出来ない事を頼んでも無意味だろう。だから出来る事しか頼まない。まず一つ目はヒュードラだ。」

俺がそう言うとその名に良い思いでが無いのだろうプレシアは少し顔を顰めた。

「プレシアにやって貰いたい事はこれの完成だ。」

プレシア「どう言う事？ヒュードラは一度暴走し失敗しているわ……」

「知ってるさ、しかしその暴走の原因は問題の多い前任者からの引き継ぎ、上層部からの勝手な都合で厳しくなるスケジュール、上層部に嫌気がさして止めて行くチームスタッフ達の事後処理……」

プレシア「随分と詳しいのね……」

「プレシアの事は事前に調べているからね。開発事態に様々な問題があったが俺の提供する現場はそんな事は無い。ヒュードラ自体の完成は10年単位で構わない。無論人材の確保や資金の提供も過剰でなければ手配しよう。」

プレシア「太っ腹ね」

「それだけ君の能力を買ってるんだよ。それに君をスカウトしたのはもう1つの事情だ。これは君が一番適任だからね。」

プレシア「何をさせるつもり？」

俺はプレシアをスカウトした一番の理由を話した。

「……と言う事だ。出来るか？」

プレシア「可能よ。」

「そうか、こっちの方は出来るだけ急いでくれ。」

ヒュードラの事は兎も角こっちは俺の生命にもかかりかねないからな…だからこそこれはジェイルには頼む事が出来ない事だしな。

「俺の話はこれだけだ。随分と無理をしたみたいだから今は休んでおけ、回復し次第アリシアと会えば良い。その後は頼んだ事をやってくれ」

プレシア「分かったわ……」

取り合えずプレシアの協力には得られたしジュエルシードも幾つか回収出来た……

アラドSIDE OUT

ナターシャSIDE

取り合えずジュエルシード事件は無事、元も歪む事無く終わったわ。
アラドが何やら私を蚊帳の外で色々暗躍していたみたいだけど次元に歪みが起きて無いから良しとしましょう……

そして、アラドは帝国の方に行っていたみたいだけど帰って来るそうそうまたインデックスコーポレーションの本社ビルの屋上から海鳴市の夜景を見降ろしていた。

アラドはやたらと高い所が好きと見える。

「何か用か？」

ナターシャ「用？じゃないでしょ？」

全く……

ナターシャ「これで満足？」

「どうだろうな？ハッピーエンドって所で良いんじゃないか？」

何処が……少なくともフェイト・テストロッサは母に捨てられ転生者の少年は精神が崩壊している。とてもハッピーエンドとは言い難

いわ。

ナターシャ「どうか…」

「何が言いたいんだ？」

ナターシャ「ハッピーエンドと言う割には転生者の一人は精神崩壊、フェイト・テストロッサも親に捨てられて心に傷を負ったわ。」

「確かにね。だけどフェイトの事はアレで良かったじゃないか。」

ナターシャ「何故？」

「所詮、プレシアとの関係なんて家族ゴッコでしか無かった。この結果は自然だよ。」

ナターシャ「アラドはこうなる事を読んでいたの？」

「完璧には無いけどね。転生者はフェイトはプレシアの子供だと言ったけどそれはある意味正しくある意味間違っている。何故ならフェイトはアリシアの代わりの娘だったからな。けどナターシャなら分かるだろ？自分の子供に代わりがあるかどうかなんてさ？」

当然の事よ。

ナターシャ「ありえないわね。」

「そうだ。だからフェイトはアリシアになれなかった。アリシアが生き返った以上、代わりでしか無いフェイトは必要が無いから捨てられる。だけど、プレシアはさ自分で思ってる程フェイトを嫌って

無かった。」

ナターシャ「何故そう言えるの？嫌ってなければあれほどの虐待は出来ないわ。」

「ナターシャは心のそこから嫌いな奴に対してどうする？」

どうって……

「俺なら存在その物を否定するね。そいつを視界に入れるもの嫌だし、そいつの事で自分の時間を使うのも嫌だ。だから存在その物をいない物として否定するね。」

確かに言われてみれば……

「だからさ、人は相手の事を嫌いと言える内はそんなに嫌って無いんだよ。プレシア自身も気づいてはいないみたいだけどな。」

ナターシャ「つまりフェイトが娘として愛される可能性もあったと？」

「無くはない。けどね、親が子供を愛す理由としては色々ある。大抵は子供は自分と自分の愛する人の血を引いているとか…母親だと自分のお腹を痛めて生んだとか……」

前者は兎も角後者は分かるわ。

「血が繋がっていない親子の場合は過ごした時間で絆が生まれたりとかね。今回の場合はフェイトはアリシアのクローンでしか無いからこの定義には当てはまらない、しいて上げるならアリシアの代わ

りの娘と言う程度だ。アリシアの蘇生を諦めフェイトを娘として愛そうとしても俺の経験上、人に与えされる愛情を与えされるのは屈辱だよ。」

経験上……？アラドも同じ経験をしていると？

「それにアリシアを蘇生し二人を娘として愛すと言うパターンもあるけどそれはどうでも良いか。ただプレシアのアキレス腱がアリシアとフェイトの二つになる位だしね。結果としてプレシアはアリシアを選んだと言うだけの話しさ。」

アラドの言いたい事は理解出来たわ。

ナターシャ「だけどフェイトの心に傷を負った事には変わりはないわ。」

「そうだね。だけども、ナターシャ、君は良く言う誰も傷つかない世界って幸せだと思うかい？」

…また唐突ね……

ナターシャ「そうね……誰も傷つかないんだから幸せなんじゃ無いの？」

「俺はそうは思わない。人は良くも悪くも慣れる生き物だ。確かに誰も傷つかない世界は幸せだと思うさ、始めはね。俺達がそう思えるのは俺達が傷つくと言う事を知っているからだ。だけど世代を重ねる事で傷つくと言う事を知らない世代はそれが当たり前になるだろ？傷つく事よりも幸せと当たり前だと感じ幸せに思えない方がよっぽど不幸だとは思わないかい？」

ナターシャ「アラドの言いたい事も分かるわ。だけど……」

「フエイトは親に捨てられる悲しさを知った。だからフエイトは家族に優しくなれる……最もこれは全て俺の考えで俺のエゴなんだけどな……言わば俺の傲慢って所だ。」

それがアラドの考え方って事ね……

「そして、転生者の方が傲慢が招いた報いだよ。」

傲慢ね……統計的に転生者はその力ゆえ傲慢になる傾向にあるけど彼は比較的マシな方に思えるけど……

「彼の傲慢は3つだ。1つ目、フエイトを自分が幸せにすると思っていた所だ。これはまあ男なら誰でも思う傲慢だからどうでも良いけどな……」

フエイト？この前までは彼女の事を人形と読んでいたのに……さつきからフエイトって呼んでいたわね……

「2つ目の傲慢はフエイトの幸せを自分で決めた事だ。なあ……ナターシャ、幸せとは何だ？ああ……さつき俺が言った事は無しで」

随分と哲学的な事を聞くのね……

ナターシャ「そんなの知らないわよ。」

「それが正解だ。自分の幸せならいざ知らず他者の幸せなど他者しか知らない事だ。それを自分で決めるなんて傲慢以外の何者でもな

いだろう」

ナターシャ「それで3つ目は？」

「最後の傲慢はアリシアを生き返らせようとした事だ。命とは本来1つしか無い物だ。だからこそ命は大切なんだよ。」

大切ね……確かにそうだけどアラドが言っても説得力が無いわ。

ナターシャ「貴方が言っても説得力が無いわよ。」

「酷いな。俺は誰よりも命の大切さを知ってるさ……だからこそ不滅になった。死ぬのが怖いからな。」

死ぬのが怖いね……以外……

「死ぬのが怖く無いって言えるのは死を知らない奴の戯言が生きる内にやりたい事を全てやり終えて天寿を待つだけの老人くらいだよ。俺の場合はそれが出来なかったから死にたく無いと思い、死なない様にした結果が今の俺だよ。その為に永遠の地獄と孤独も得たけど。何かを手に入れる為には何かを対価やリスクを負わなくていけない。ガキはその覚悟も無く死者を生き返らせると言う禁忌に足を踏み入れたこれはその結果だよ。」

ナターシャ「だったらアラドは録な死に方をしないわね。」

散々人を弄んで来たのだから……

「別にどうでも良いよ。死に方なんてさ……俺は死にたく無いんだから。どんな死に方だろうと俺は否定する。」

ナターシャ「随分と勝手ね。」

「それが人だよ。ナターシャ。」

ナターシャ「そう……ねえ…聞いても良い？」

「どうぞ」

ナターシャ「アラドはどうしたいの？」

「どう…とは？」

ナターシャ「この150年、アラドを見て来て分かった事があるわ。アラドの行動は子供じみているけど決して無意味な事はしていない。」

あくまでアラドから見ただけ……

ナターシャ「だから、アラドは何がしたいの？」

「聞きたい？」

ナターシャ「ええ」

「どーしよっかなー」

アラドがふざける時は本当にふざけている時と本音を隠したい時…
…今は……

ナターシャ「ふざけないで」

「……………しゃーないか…引いてくれそうにも無さそうだ。」

当然よ。

「そうだな…しいて上げるならば欲しい物があるんだ。」

ナターシャ「欲しい物？」

以外ね。アラドなら欲しい物はあらゆる手を使ってでも手に入れようとするのに……

ナターシャ「何が欲しいと言っの？」

「教えない。今はね。」

ここに来て……

「だってさ…そんな事を言っのってさ、俺のキャラじゃ無いんだよね。だから言わない。」

キャラじゃ無いって……

「でもそれじゃあ納得しそうにないからヒントを上げるよ。」

……なんか上から目線でムカつくけど我慢よ我慢……

「ナターシャ、君は生きるってどう言っ事だと思っ？」

また、アラドは哲学的な事を……

「俺はね、生きると言う事は矛盾を孕んでも存在しつづける事だと思っただよ。」

ナターシャ「……それが何なの？」

我慢…我慢…切れちゃダメよ…ここで切れれば何時もと同じよ……

「矛盾……これが最大のヒント、後は自分で考えなよ。それとも考えるだけの知能が無いのなら……そうだな全裸で膝を付き犬の様に3回回ってワンと言えば教えて上げない事も無いよ。」

こいつは……ハア…なんかどうでも良くなって来たわ。

どうせこれ以上、教える気は無いみたいだし…多分、それはアラドに取ってこれ以上踏み込んで欲しく無い領域…今の私にはそこに踏み込む事は出来そうに無いわね……

ナターシャ「分かったわ…暇な時にでも考えておくわ。」

「何だよ……やんないのかよ？」

ナターシャ「ええ…死んでも御免よ。」

「つまらないな。」

ナターシャ「それは何よりね。」

これ以上、アラドのペースで話すのは御免よ。

ナターシャ「次は半年後よ。」

「了解」

本当に分かつてるのかしら……？

ナターシャ「それじゃあ私は先に帰ってるから。」

流石にこれ以上アラドとここで話すと我慢の限界が来そうだから今日は先に帰って頭を冷やしましょ……

ナターシャ SIDE OUT

アラド SIDE

「次は半年後ね……」

半年なんて数千年を生きた俺には一瞬にも満たない時だし、プレシアの時の様な細工は殆ど出来ないから次は傍観を決め込むか適當の介入して次元がどの程度歪むかを観測するか……

今回、色々とやり過ぎたせいでナターシャの目も厳しくなるだろうしな……

まあだけどナターシャも甘いな。アイツは俺の核心に足を踏み込む事を恐れて引いた。

ナターシャは自分が思っている以上に割り切れてないんだな……不用意に踏み込めば俺を傷つけかねないから後一步が踏み込めなかったと言う所か……平気で人の核心に踏み込んで心を荒らせる俺よりも随分と人間らしいじゃ無いか神様（見習い）とやらわさ……だから面白い。

「さて……夫婦の語らいを盗み聞きをするなんて随分と趣味が悪くなったな。」

俺がそう言つと俺の背後にアーチャーが出て来た。

アーチャー「そんな色気のある話しても無かったでしょうに……」

「全部聞いていたのか？」

ナターシャが来る前から俺の後ろにいたからな。

アーチャー「ええ……それにしても随分と入れ込んでいるのですね。アラド様。」

「そう言う事だ？」

アーチャー「アラド様がそこまで本音を言うのは初めてだと思いまして……アラド様ならナターシャ様を納得させられる嘘を思いつくらしい訳が無いのに……」

「……………何が言いたい？」

アーチャー「いえ……ただああ言う女性がアラド様は好みなのかと思ひまして……」

確かに……ナターシャは見た目は悪く無いし……どちらかと言えば美人に分類出来るだろう。だからこそ俺は帝国の象徴として祭り上げた。それにアイツは不死では無いが不老だからその美貌が朽ちる事が無いのも良いな。

「そうだな……俺はアイツに惚れていると言う事にして置いてやる。」

アーチャー「そうですか……」

「何か嬉しそうだが？」

アーチャー「そう見えます？」

何時も笑顔の仮面で本心を隠しているアーチャーには珍しい事だ。

「ああ」

アーチャー「そうですね。嬉しいですね。アラド様は今まで誰にも自分の核心に踏み込みさせる事は愚か近づけさせなかった……」

「それはそこまでの価値がある奴に出会わなかったただけだ。」

アーチャー「だからこそ嬉しいのです。これを縁と言うのでしょうか。」

だからどうしたと言うんだ……

「それで？」

アーチャー「……もうよろしんじやありませんか？こちらの世界ではアラド様は隠れる必要は御座いません。過去を捨ててナターシャ様と子供達と共に暮らしても……」

「下らないな」

ああ……実に下らない。俺はまだ何も手に入れていないんだ。それを手に入れるまでは立ち止る事などあり得ない。

アーチャー「はやりあの日の夜の事をまだ……」

あの日の夜か……

「当然だ。俺はあの日に決めたんだ。これからは後悔しない生き方を選ぶとそして、俺は過去を今までの人生はもう捨てないと……目を閉じ現実を見る事を止めたお前とは違う。どんな現実であろうと全てを受け入れて前に進む。それが俺の選んだ道だ。」

俺はあの日から歩き続ける事を選んだ。その果てにある事が何であろうとな……

「話しはそれだけか？それだけならもう消えてる。俺はお前の能力は認めているがお前を憎んでいる事を忘れるなよ。俺がお前を使役しているのはその能力と俺の中の憎しみを忘れない為だけだ。」

アーチャー……いや……神楽春奈……俺の……

アーチャー「分かりました……」

アーチャーはそう言い霊体に戻り気配も遠ざかって行った。

「行っただか……」

取り合えずジュエルシードは確保した……プレシアを引き込む事に成功した……これで俺の計画の一つの成就是確約されたと言っても良い……

次は闇の書か……せいぜい俺を楽しませて欲しい物だ。

アラドSIDE OUT

人物設定3・用語設定3

シルヴィア・インデックス

(CV 佐藤 利奈)

17歳(女)

アラドとナターシャの5番目の子供で3女

アラドとナターシャの血をほぼ均等に受け継いだ為、能力値は同世代よりかは少し高い位だが魔力値は壊滅的に低い為、飛行魔法しか使えないのでバリアジャケットの代わりに同じ効果を持つ修道服を来て戦闘をしている。

現在は聖王教会でシスターをしており聖王を尊敬しているがキャスターが聖王だとは気付いていない

アラド式変体刀『双影^{そうえい}』

シルヴィアが持つ剣で形状は双剣、特性は『自己投影』で自分自身の質量を持った幻影を作りだす事が可能(剣自体が二本ある為、最大で二人まで可能)

また、作りだす数は使用者の技量に反例し多く作ると一体の能力が落ち単純な動きしか再現出来ず一体当たりの耐久力も低下する

八神 はやと

(CV 浪川 大輔)

15歳(男)

転生者ではやての兄

生前は剣道一筋でアニメ等を殆ど見ず漫画等もジャンプ程度しか見ていない為、この世界がアニメの様な世界だと知ってはいるがはやて達が登場人物とは気付いていない。

神に与えられた能力はブリーチの『黒崎一護』の能力である為、虚化は出来るが鬼道などは使えない。

第二十一話 新しい戦いの始まり（前書き）

今回から書き方を変えてみました。

第二十一話 新しい戦いの始まり

アラドSIDE

プレシアをスカウトしてから半年が過ぎた。

プレシアの報告だと頼んでおいた物も大体完成しジェイルに頼んでおいた物も完成の目処が付いた様だ。

ナターシャの話しならそろそろ次の戦いが起こるみたいだ。

「さてと……俺は傍観して楽しむんだが……」

俺は基本ナターシャから最低限の情報しか聞いていない。何故なら事の顛末まで聞けばつまらないしな…ナターシャは全てを知った上で時空が歪まない様に監視をして欲しいと言っていたけどそこまでは知らんよ。

それはナターシャが考えて頭を抱えれば良い。そんなナターシャを見ているのも面白いしな……

だが問題は前回はミリシャが高町なのはと友人だから同行を掴むのはそんなに難しくは無かったが今回はそうもいかない。

闇の書には大した興味は無いが闇の書の守護騎士とやらには興味がある。

魔力とプログラムで出来た騎士……ナターシャはバグか何かでただ

魔力を集めるだけの感情の無いプログラムの筈が今回に限り感情を持った人の様になったと言っていたな……

「バグね……」

それは決してバグなんかじゃ無い……寧ろ進化と言えよう。

ナタリアに頼めば八神はやての所在を掴めるのだがナタリアがそう簡単に個人情報を探るのはしないだろう……アイツは最近性格がナタリヤに似て来ている。

俺が探そうにもコンピュータの類は知識としては知ってはいるが正直な所機械の類は余り好かんからな……それに幾ら知識があるうとナタリアには敵わないだろうしな。

もし、俺が不正アクセスをしようするとナタリアは阻止しようとするだろう。

だからこそこうして俺は寒空の下、足で八神はやての家を探しているのだが……

「見つからん……」

幾ら地域が限定していようと多分普通の家を探し当てるのは面倒だ。

こう言う探し物は橙子の所に居た……名前は……なんだっけな……平凡なイメージしか無いから名前を思えていないがあの子が居れば直ぐに見つかるのにな……いっそ神の爺さんに頼んで強制的にでも連れて来て貰うか？

と言うか彼はまだ生きているのか…？

前にあったのは何時だ？数年前だった様な気もするが百年前だった気もする……

余りにも平凡過ぎて覚えて無いな……この程度の事で記憶の本棚から記憶を出すのも面倒だな。

「仕方が無い……足で探すか……」

いずれは高町なのはと友人であるミリシャも関わる可能性は高いからその時に探りを入れても良いし全てが終わった後でも何ら問題は無いからな。

「よし、帰ろう。」

そう考えるとこれ以上寒空を歩くのは面倒になって来た為、俺は家に帰ろうとすると周囲の人が消えた。

「……これは結界か……」

俺は結界内に閉じ込められたのか。

そして、俺の前に黒い着物を来て背中に出刃包丁の様な大剣を持った少年がいた。

アラドSIDE OUT

ナターシャSIDE

時期的にはそろそろの筈ね……

この半年間はアラドも特に動く事も無く平和が続いていたけど最近
は町を歩き回って何かを探している様……

「変な事を考えなければ良いけど……」

アラド自身は闇の書には興味が無いとは言っていたけど何処まで本
当かどうか……

「母さん…町に結界が離れてるわ。」

ナタリアはそう言いパソコンを私に見せて来た。機械の類は正直苦
手だけど少なくとも画面の情報は理解出来る。画面には町にドーム
状の結界が二つ展開されていた。

「本当ね……」

「それにこの結界の中にミリシャと父さんの反応もあるの」

ミリシャとアラドの？

ミリシャは確か今日は友達の家遊びに行くって言っていたわね…
アラドは何時も通りに町で何かを探していた……

ミリシャの方は高町さんの所に行っていたのなら事件に巻き込まれた可能性は高いけどアラドは何故？

「如何する？」

相手がイレギュラーでなければ私は戦えないしナタリアは戦力としては問題外……今、動けるのは……

「私が様子を見て来ます。」

そう言い現れたのはアラドのサーヴァントの一人のアーチャーだった。

アーチャーはアサシンの能力も持っていたから気配に気づかれる事は無さそうね。

「お願い。」

「承知しました。」

アーチャーは再び霊体の戻り消えた。

「ナタリアは結界の監視を続けて」

「分かったわ」

闇の書の守護騎士が動きだした様ね。アラドは闇の書自体にはそんなに興味が無いみたいだけど守護騎士には少し興味があるみたいだったから好き勝手やるのは構わないけど時空の歪みだけは注意して

くれると良いけど……

ナターシャSIDE OUT

ミリシャSIDE

「何？」

私はなのはの家から帰る途中結界の様な物に囚われていた…この術式はミッド式じゃ無い……となるとベル力式か術者のオリジナルの術式だけど昔少しベル力式についてコハク姉様から聞いた時の術式に似ているから恐らくはベル力式の結界でしょうね……

問題はこの結界の術者の目的ね。何かするから結界を張ったと考えてまず間違いは無いわね……

「如何するべきか……」

術者の目的が分からない以上不用意な行動は命取りとなる。しかし、何もしないのと不用意に動かないのはまた別ね。術者の目的を探る必要があるわね。

「インフィニティ、周囲をサーチして、出来る限り隠密で」

取り合えずインフィニティに周囲をサーチさせて状況を掴もうとしていると少し離れたビルに何かがぶつかる音がした。

「何？」

戦闘だと思うけどこの魔力はなの？

なのはの魔力を感じると言う事はなのはが戦闘をしているの？

一体誰と？

「考えるのは後ね。」

目的がなのはであればここでじっとしている必要は無い。

私はインフィニティを起動させてバリアジャケットを展開しなのが戦っていると思われる方に飛んで行った。

ミリシャSIDE OUT

はやとSIDE

「物騒な物を持つてるね。今はやりの親父狩りって奴かい？小父さん緊張するねえ……」

目の前の男はそう言っておどけているが直接対峙して良く分かる。この人は強い……恐らくはシグナムと同程度の实力を持っている。

俺は男の言葉を無視して残月を手にした。

「だんまりかい？もう少し会話のキャッチボールをしようよ。」

そんな暇は無い……一刻も早く闇の書を完成させてはやてを救わないといけないんだ……この人には悪いけど倒させて貰う。

シグナムと同レベルならやってやれない事も無い。

「全く……最近の若いもんはせっかちなんだから……」

男はいつの間にか脇差を出していた。

一体どこから……やはりこの男は魔力を持つだけあって只者では無いと言う事か……

俺は一気に踏み込み残月を振るった。

俺の一撃を男は紙一重の所で交わし脇差を突き出して来た。

「くっ！」

俺はとっさに大きく距離を取った。

「へーやるね。今の突きを交わすなんて……じゃあこれはどうかかな？」

男はその場で脇差を横に振るうと脇差の刃は伸び俺の所まで届いた。

「なっ！」

俺は残月で男の攻撃を受け止めた。

あの脇差は市丸ギンの神鎗の様に伸びるのか！

「これも防いだか……中々だよ。少年。だけど……」

男がそう言っているとな何時の間にか男は背後に回っていた。

バカな！俺は一瞬たりとも男から目を話していないと言うのに！

男は脇差で攻撃して来たがその攻撃を俺は何とか弾いていたが男は突きの体勢になっているのを見て俺はまた大きく距離を取った。

「分かっているじゃないか。そうだよ。突きの体勢を取った時点で距離を取って仕切り直しにするとと言う判断は正解だ。」

男はまだまだ余裕だと言う事をアピールするかの様だった……

やはりこの状況では勝つのは難しいか……仕方が無い……

「正解！」

はやとSIDE OUT

ミリシヤSIDE

私が現場に到着するとそこには赤いゴスロリ風の服を着た女の子と

剣を持った女性にフェイトとユーノ、アルフが対峙していた。

「久し振りだけどどう言う状況なの？」

フェイト達は近かじかこつちに来るって言う事は聞いていたけど状況がイマイチ掴めないわ………だけど…

「貴女達は私の敵で良いのよね。」

少なくともなのはやフェイトと対峙しているのだから敵で間違いはないわね。

「また増えやがった！」

ゴスロリ少女はそう言い私を睨みつけて来た。

「ミリー！」

「久し振りね。フェイト。それでこいつ等は何？」

私はゴスロリ少女を無視してフェイト達の所まで来て現場の説明を求めた。

「分からないけどなのはを襲った事は間違い無いよ。」

「そう」

ならば私の敵で間違いは無い様ね。

「フェイトは剣を持った女の人をお願い。私はゴスロリ少女をやる。」

アルフとユーノは援護をお願い。」

「分かったよ。ミリー。」

「任せな！」

私はインフィニティを構え、ゴスロリ少女に収束砲を撃ち込んだ。

「ハッ！んな攻撃で！」

ゴスロリ少女は持っていたデバイスで私の収束砲を弾き私に接近して来た。

やはりこの子はベルカ式の魔導師……ベルカ式ならば距離を取って戦えばそこまで怖い相手では無い。

私はゴスロリ少女の攻撃を交わし距離を取りつつ収束砲で応戦した。

「てめー！逃げんなよ！」

「無茶を言わないでミッド式の魔導師がベルカ式の魔導師を相手にまともに近接戦闘を仕掛けるバカはいないわ。」

ベルカ式の最大の特徴は近接戦闘の攻撃力にある。逆を言えば遠距離攻撃の乏しさになる。それはライラム兄様やコハク姉様、シルヴィア姉様で経験済み。

コハク姉様位の反則的な力を持って無い限り距離を取っていれば大体は対応出来るわ。

「アイゼン！」

ゴスロリ少女がそう言うのとデバイスから葉莢が射出されデバイスの形状が若干変化した。

これがベルカ式の魔導師の特徴の一つのカートリッジシステム……

「ラケーテンハンマー！」

ゴスロリ少女は自分を軸に回転しながら突っ切んで来た。

「流石にこれは……」

回転して遠心力で威力が大きく上がっている筈……元々私の防御力はバリアジャケットのみ……通常攻撃でも下手したら致命傷になりかねないのにこの一撃は確実に致命傷になるわね……それにその速度では避けるのも無理そう……

「だけど……」

既に私の手の中よ。それを使うのが遅すぎた様ね。

ゴスロリ少女の攻撃は私に届く前にデバイスが後方に引っ張られて止まった。

「何だよ！」

ゴスロリ少女は直ぐにデバイスを見るが既に遅かった様ね。デバイスは周囲のビルにひっ付いた粘着性の魔力のバインドが伸びていた。

「何なんだよ何時の間にこんなのが！」

「さっきから貴女が弾いていた私の収束砲の内側に仕込んでおいた奴よ。」

私のオリジナルの粘着性のバインドを種として収束砲を撃っていた。ゴスロリ少女はそれをデバイスで弾いたから周囲の魔力を破りバインドに触れた……そして、弾かれたバインドが周囲のビルに叩きつけられてこうなった。

ベル力式の魔導師は武器さえ封じてしまえば大抵の相手は戦えなくなる。

「まずは一人。」

取り合えず一人は無力化したわ。

フェイトの方はどうかしら？

私は直ぐにフェイトの方に向かうと既にフェイトの方も決着は付いていた様ね。フェイト一人ではきついと思ったからアルフの援護をして貰うつもりだったけどもう一人いたみたいね。

アルフがそっちに足止めをされている内にフェイトは負けたみたいね。

「ほう……ヴィータに勝ったのか……」

あのゴスロリ少女はヴィータと言うのね。私には関係の無い事だからこれからもゴスロリ少女で十分だけど。

「ええ……ベルカの騎士は単純で助かります。」

まあ単純と言ってもコハク姉様みたいな理不尽な強さだと単純な攻撃すらも必殺の一撃と変わらないんだけど……コハク姉様にかかれば戦略も戦術も無意味だしね……それに比べたらまだマシね。

「言ってくれるな。」

「事実を述べただけですよ。」

私の軽い挑発でもこの女性は乗って来る様ね。ゴスロリ少女と違う所は勢いと感情に任せて突っ込んで来ない所だけど騎士の誇りを侮辱されて頭には来ているみたいね。

私達が互いの武器を構え、戦闘に入ろうとすると後ろの方で強力な魔力を感じたが直ぐに消えた。

「今の魔力は……」

なのはの魔力だった……恐らくは大きい砲撃を撃とうとしたんだけどもどうしたのかしら？

私は剣士から注意を反らさずになのはの方を向くとなのはの胸から手が生えていた。

「なのは！」

恐らくは空間系の魔法を使われたのだろう……父様も似たような事が出来るし……

不味いわね……リンカーコアが剥き出しになってるわ。

そして、なのはのリンカーコアが次第に小さくなって行った。

なのはは膝を付くもなのは最大の砲撃魔法、スターライトブレーカーを放った。

なのはの砲撃は誰もいない方に飛んで行ったがその砲撃は結界を突き破った。

私は直ぐになのはの元に向かった。

「なのは！大丈夫！」

「ミリーちゃん……」

どうやら魔力が枯渇しているけど大丈夫の様な。

なのはの無事を確認すると既に騎士達は逃げた様で動きを封じて置いたゴスロリ少女も消えていた。恐らくは剣士がバインドを切断したんでしょね。あのバインドは打撃には強いけど斬撃には大して強く無いから……

「どうにか切りぬけた様ね……」

この戦いはこちらの完敗ね。

あの騎士達の目的は分からないけどフェイト達が来ているって事はアースラも近くまで来てると思って良いみたいね。

全く……ようやく平穏な日常が続いていると思ったのに……

ミリシャ SIDE OUT

はやと SIDE

「卍解……天鎖斬月。」

「ふうん……それで？」

男は未だ余裕の表情だがその余裕が命取りだ！

俺は瞬歩を使い男の背後に回り込み天鎖残月を振りかぶった。

「当たらないよ。」

男は屈んで斬撃を交わした。

「さて……これはどう交わす？」

男は脇の下で脇差を俺の方に向けていた。

「くっ！」

脇差は伸び、俺は天鎖残月で軌道を反らした。

「まだだよ。」

男はそのまま自分を軸にして脇差は振り俺はそのまま吹き飛ばされた。

「ハアハア……」

予想以上に手ごわい……最悪虚化をしないと勝てない。

「どうしたの？もう手詰まりかい？」

迷ってる暇は無い……

俺は虚化をする為に左手を顔の前に持つて来た。

「敵を目の前にして視界を塞ぐのは良く無いな。」

「え……」

男の声は何故か俺の後ろからしていた……

「もう飽きたな……終わりにするよ。少年。」

俺が振りかえるとそこは男がいた……何時の間に……

そして、男の拳が俺の顔面を捉えた。

はやとSIDE OUT

アラドSIDE

俺の一撃は少年の顔面に直撃し少年は地面に叩きつけされた。

思ったより大した事も無かったな……まあそれでもガキ1と2よりかはマシか……

と言っても攻撃が単調だ。剣は使い慣れているけど人を切った経験は全く無いな。構えからして剣術では無く剣道の経験者と言った所か……

少しは暇つぶしが出来たから褒美でもやるか。

俺は禁書目録の書からジュエルシードを取りだした。

ジュエルシードは既に解析も済んでいるしまだ予備は残っている。

俺はそれを少年の前に落とした。

「これはジュエルシードって言う高濃度の魔力の結晶だと思ってくれれば良い。これを君にあげるよ。」

「どう言う事だ……」

「憐れみと施しだよ。実力差も分からずに俺に挑んできた君へのね。」

ある程度は相手の実力を測る事が出来るが故に俺の実力を計り損ねた哀れば少年にね。

さぞ屈辱だろうね……勝つ気で戦った相手に全く齒が立たない上に憐れみで施しを受けるなんてね。

さあどうする……

少年は地べたを這いずりながらジュエルシードに手を伸ばした。

……成程… 目的の為にプライドを捨て屈辱を受けるか…面白い。もしも、プライドを捨てずに施しを受けなかったらつまらないから殺していたよ。

目的の為にプライドとかを捨ててまで目的を遂行できる奴は強い。

気に入ったよ。君はもう少し生かして置いてやる。

俺はそのままその場を去った。

今回も中々面白い事になりそうだ。

アラドSIDE OUT

第二十二話 闇の書

ミリシャSIDE

戦闘を終えた私達はなのはを回収に時空管理局の本局になのはを移送して来ていた。

ここの通常の怪我ならインデックスコーポレーション系列の病院で事足りるけど今回は管理局の医療私設の方が適任だと言う事らしい。

「君の怪我也軽くて良かった。」

先の戦闘で負傷したフェイトの怪我は大した事も無く入院をする必要も無くて取り合えずは良かったわ。

「あれだけやられこの程度ですんだのはフェイトのバルディッシュが優秀だったからね。」

「うん…御免ね。ミリィ、クロノ、心配かけて。」

「君となのはでもう慣れたしライアムの無茶に比べればね。」

「兄がご迷惑を……」

確かにライアム兄様の頑丈さは兄妹の中でも随一だけど……と言うか何故に兄様はいないの？

こう言う時には真っ先に飛んできそうなの？

「ところでクロノ執務官、兄は何処に？今回の戦闘では兄の様な魔導師を投入すべきだと思いますが？」

ライアム兄様はベルカ式の魔導師だから先の戦いにおいてはアースラでは一番の戦力になる筈だけど……

「ああ…ライアムは休暇を取って故郷の方に帰っているが君は知らなかったのか？」

どうでも良い時にはいる癖して肝心な時にいない人ね……

「いえ……」

話している内になのはの病室に着いたらしく私達は中に入った。

「ああ…ハラウン執務官。ちょっとよろしいでしょうか？」

「何でしょう？」

「こちらへ……」

なのはを見ていた医者はクロノ執務官と共に別室に行き病室には私達三人が残された。

残った私達には重たい空気が漂っていた。

「フェイトちゃん、ミリーちゃん……」

「なのは……」

「あの…御免ね。折角の再会がこんな事になって…怪我大丈夫？」

「ううん…こんなの全然…」

「フェイトはそんなに酷く無いわよ。なのはに比べればね。」

実際、なのはは外傷よりもリンカーコアが著しく小さくなっているらしい。魔導師にとっては一時的とは言えまともに魔法が使えなくなるのは致命的とも言えるけど……

「うん、それよりなのはが……」

「私も平気…フェイトちゃん達のお陰だよ。元氣、元氣」

まあ外傷の方はユーノの治癒魔法で大体は直したみたいだし大丈夫みたいね。

なのはが元氣だと言う事をアピールするとフェイトは泣きそうになっていた。

「フェイトちゃん？」

「そんな事…無いよ。ミリーが私は負けちゃったしミリーが来なかったらもつと酷い事になったかもしれないし……」

「私の場合、ああ言った魔導師との戦闘経験があっただけよ。フェイトは十分戦ったわ。」

実際、魔導師としての総合的な能力では私はフェイトやなのはに劣

っている事は事実で私の場合は得意な事を重点的に訓練し苦手な事は一切省いた戦い方をしているしベルカ式の魔導師との戦い方は心得ているし彼女達以上の使い手を知っている分彼女達の力が大した事の無い様に思えるからそれだけ余裕を持って対応出来たに過ぎないわ。

「そうだよ。フェイトちゃんは私を助けてくれたよ。だからありがとう…フェイトちゃん。それからまた会えて凄くうれしいよ。」

「うん…私もなのは達に会えてうれしい……」

ミリシャSIDE OUT

アラドSIDE

「守護騎士が動き出したみたいよ。アラド。」

少年との戦闘を終え帰宅するとナターシャがそう言って来た。

「知ってるよ。それらしい少年に襲われたしね。」

「少年？」

「ああ、君の事前情報に無かったし能力も普通の魔法とは違ったから新しい転生者かもね。」

まあ間違いは無さそうだけだね。

「それで？」

「なかなか面白い少年だったからジュエルシードを一つあげちゃったよ。」

「アラド……」

ガキ1、2に比べれば面白い少年だったしね。

「まあ良いじゃないか。この程度で時空は歪んだりはしないよ。もしもの時は俺が修正するから良いだろ？」

「そう簡単に言わないで。」

「俺にとっては結構簡単な事なんだよ。」

「それでアラドはどう動くつもりなの？」

どうか……

「そうだね。取り合えずは傍観する事にするよ。少年の位置は特定出来るしね。」

俺は気に入ったからと言ってただで少年にジュエルシードを渡した訳ではない。

少年を生かす事で少年には発信機の類の魔力を付着させて貰ったこれで少なくとも少年の居場所は随時こちらからは分かるようになる

ている。

膨大な魔力を引き換えに位置情報が筒抜けにさせて貰ったよ。

「そう……まあ良いわ。それで納得して上げてあげるわ。」

信用ねーな……取り合えずは傍観するつもりなのに……取り合えずはね。

アラドSIDE OUT

ミリシャSIDE

フェイトとなのはの再会が終わり私達はクロノ執務官の案内で二人のデバイスの修理をしている技研に来ていた。

「フェイト！なのは！それにミリシャも！」

私達が技研に入るとアルフとユーノがいてアルフが出迎えて来た。

「アルフさん、ユーノ君。」

「私はついぞ？」

「なのは、久しぶり。」

「それでユーノ、二人のデバイスは怎なの？」

見た所かなりの損傷に見えるけど……

「正直あんまり良く無い。今は自動修復を掛けているけど基礎構造の修復が済んだら一度、再起動して部品とかしないと……」

はやりかなりの損傷みたいね。

「そう言えばさ…連中の魔法ってなんか変じゃ無かった？」

「あれは多分ベルカ式だ。」

「ベルカ式？」

「その昔、ミッド式と勢力を二分した魔法体系だよ。」

「ライラム兄様と同じタイプですが兄様は自分に合わせて改良したタイプのベルカ式ですけどあの人達のは多分純正のベルカ式だと思います。」

「ベルカ式は遠距離攻撃等がある程度度外視して対人戦闘に特化した優れた術者は騎士と呼ばれている。」

「…確か、あの人達はベルカの騎士って言うてた……」

最近ではそう名乗る人は少ないと聞いていたけど……それにベルカ式の使い手も殆どいないって話だったわ。

「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装。」

確かにあれは非常に厄介な物ね。使いこなせばだけど…あの騎士達は使いこなせてるみたいだから凄く厄介な相手よ。

「儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に爆発的な魔力を得る。」

「使いこなせなければ魔力の暴走を引き起こしかねないけど使いこなされれば必殺の一撃を撃てる。物騒極まりない物よ。」

「成程ね……」

「フェイト…そろそろ面接の時間だ。」

面接？

「なのは君もちよつと良いか？」

なのはとフェイトはクロノと行き私達は休憩所で一息つこうとしていた。

「ユーノ君、アルフ、ミリシャちゃん。」

「エイミィ……」

確かこの人はアースラに居た人だったわね。

「レイジングハートとバルディッシュの部品さっき発注して来たよ。」

「今日明日中には揃えてくれるって」

「そんなに早く揃えてくれるんですか？」

「そうなのよ。ミリシャちゃんのお姉さんの会社って高性能のデバイスの取り扱いまでしてたのよ。」

「そうなのかい？」

「ええ、私のインフィニティもナタリア姉様の会社で開発された最新鋭のタイプのデバイスですし、あの二機の部品なら作り置きもしているから私の名前を出せば直ぐに用意してくれるし会社としても管理局と取り引きするのは大きい利益に繋がりますから。」

姉様の会社は地球だけでなく他の世界の企業とも取り引きがある。

管理局とは今までには無かったけどデバイスも取り扱っているから今回なのは達のデバイスの部品を取り寄せて管理局とのパイプを確保させて貰った。

「それとさっき今回の事は正式にうちのなったの。」

「えっ？でもアースラは整備中じゃん。」

「そうなんだよね……あっ！そうだ、クロノ君知らない？」

「なのはとフェイトと面接だって…」

「なんか管理局の偉い人だそうですね……」

確かギル・グレアムって人だとか……

「グレアム提督はクロノ君のだった人なんだよ。歴戦の勇士一番出世していた時で艦隊指揮官、後に執務官長だったのかなあ……」

「滅茶苦茶偉い人じゃん！」

アルフはギル。グレアム提督と言う人の経歴を聞いて驚いていたけど確かに凄い人なのかもしれ無いけど……

父様は現役で皇帝で母様は王妃、皇帝代理の兄様にその奥さんは帝国の最高司令官、コハク姉様は王族親衛隊の隊長で……

私の身内を見ればグレアム提督の経歴は霞むけどまあ凄い人なんだろっ……

「うん…でも良い人だよ。優しいし…」

優しいね……父様が言っていたけど組織の上層部の人はずっと優しいだけの人はいなく必ず裏を持っていると言っけど……

ミリシャSIDE OUT

はやとSIDE

「はやてちゃん、お風呂の準備が整いましたよ。ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさいな。」

「はい。」

俺達は戦闘を終え、家に帰ると通りの日常を送っていた。

「明日は朝から病院です。余り夜更かしをしない様…」

「はい。」

「よいしょと…シグナムはお風呂どうします?」

シャルははやてを抱き抱えた。

「今夜は良い。明日の朝にするよ。」

「そう…」

「お風呂好きが珍しいじゃん。」

「たまにはそう言う日も有るさ………」

「ほんならお先に」

「はい」

「今日の戦闘か？」

はやてが部屋を出る事を確認するとザフィーラが口を開いた。

「今日の戦闘がどうかしたのか？」

俺は別の場所で戦闘していたからシグナム達の戦いはどうなったのかは知らない。

「聡いな…その通りだ。」

シグナムはそう言い服を捲るとそこには戦闘で負ったと思う傷があった。

「お前の鎧を貫いたのか…」

「シグナム程の騎士がか？」

「澄んだ太刀筋だった…良い師に学んだのだろうな。武器の差が無ければ少々苦戦したかもしれん。それにヴィータを無力化した少女は私達ベルカの騎士との戦い方を心得ていた。こちらの少女の方が当面は厄介だろう。」

少々苦戦ね…勝てないとかで無く苦戦と言う所がシグナムらしいな。

「だが…それでもお前は負けないだろう。」

「そうだな…話しは変わるがはやと、お前の方はどうだったのだ？」

やっぱ来るのか……

「言いたくは無いが負けたよ。完全に…手も足も出なかった。」

「お前がか？信じられんが……」

信じられなくても事実だ。

「ああ……俺が戦ったのはシグナムと同年代の赤髪の男だ。対峙した感じではシグナムと同じ位の實力だと思って戦ったが手も足も出なかった。」

「幾ら私と同程度としてもはやとなら対処出来るし戦い方次第では負けはしないだろう？」

「俺もそう思う、だから多分、その男はシグナムよりも遥かに強い相手なんだと思う。魔力量はそこまで高い訳じゃないから今後、そいつとは絶対に戦わない方が良い。俺達が束になっても勝てるかどうか……」

「はやとがそこまで言う相手なのか？」

「ああ…アイツと戦うリスクと考えれば戦う事は避けた方が良い。この事ははやてには知られちゃいけないから俺達が誰一人欠ける事が出来ない以上、そうした方が懸命だ。」

闇の書の完成は俺達が勝手にしている事ではやては知らないから俺やシグナム達の誰かが負けて死んだりでもしたらはやてになんて言えは良いんだよ。

「はやとがそこまで言うのなら後でヴィータとシャルにも伝えておこう。」

「その方が良いだろう。」

「それとその男から渡されたんが……」

俺は赤髪の男から渡された青い宝石を出した。

「それは？」

「ジュエルシードって奴で膨大な魔力の塊みたいなものらしい……その男が俺を哀れんで渡して来た。」

「そうか……」

「取り合えずこいつも闇の書の完成の足しにしたらどうだ？」

「そうだな。はやとがプライドを捨ててまで持ち帰って来たんだ。有効に使わせて貰おう。」

どうやら俺の気持ちを察してくれたらしく敵に憐れみを受け施しを受けて来た事は何も聞かないらしい……正直助かるな……

はやとSIDE OUT

ミリシャSIDE

「え？親子ってリンディさんとフェイトちゃんか？」

「そつまだ本決まりじゃないんだけどね…養子縁組の話をしてるんだって…プレシア事件でフェイトちゃん天涯孤独になったし、艦長の方からうちの子になる？って…フェイトちゃんもプレシアの事とか色々あるし…今は気持ちの整理を付く事を待つてる状態だねえ……」

フェイトが提督のね……

「そうですか……」

「二人的にはどう？」

「んと…なんだか……凄く良いと思います！」

「まあ9歳の子供が一人で生きて行くとやれる事が限られて来るから養子縁組とは行かないでも大人が支援する事は良い事だと思いますよ。」

最悪、私が父様に支援を頼もうかと思っていた位だし…フェイトが自分で決めるのならば私が勝手に余計な事をする必要も無くなるしね。

「そつか。」

「でもそうするとクロノ君、お兄ちゃんですね。フェイトちゃんの……」

「そうそう…でも結構気が合うみたいだし案外良い感じの兄妹かも……」

「それは羨ましいわね。」

うちの兄様達はろくでなしばかりだし……

「ライラム君もミリシャちゃんの事を可愛がってるじゃん。」

「鬱陶しいだけです。それにうちの兄は皆ろくでなしばかりです。」

「ミリシャちゃんの所って兄妹が多いの？」

「そうなんです。ミリーちゃんの所は兄妹が沢山なんです。何人だったっけ？」

「7人よ。三男四女で私が末っ子よ。」

「凄いね……」

まあ一番上の兄様が40を超えて既に5歳の娘がいる時点で色々凄
いけど……4つ下の姪っ子なんて…

ミリシャSIDE OUT

シルヴィアSIDE

「ハア！」

「なんの！」

私達の武器がぶつかり合い私達は距離を取った。

「やりますね。シルヴィ」

「シャツハこそね……」

私達はいつもの訓練で模擬戦をしていた。

「それじゃ…行くわよ！」

「シルヴィア、少し良い？」

模擬戦をしていた私達を騎士カリムが止めた。

「騎士カリム…どうしたんですか？」

「管理局からの要請が来ているわ。直ぐに準備して本局に向かって。」

「本局に？」

なんでまた……地上なら分かるけど地上と仲が悪い海からの要請な

んて……

「分かりました……」

シルヴィアSIDE OUT

ミリシャSIDE

「さて……私達アーススタッフは今回、ロストログア『闇の書』
搜索及び魔導師襲撃事件の捜査担当する事になりました。」

やっぱり今回も面倒な事になったわね。

「ただ……肝心のアースラが当分使用出来ない都合上事件発生時の近
隣に臨時作戦本部を置く事になります。分轄はアレックスとランデ
イ、ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同、司令部は私と
クロノ執務官、エイミー執務官補佐、フェイトさん以上三組に分か
れて駐屯します。それと今回、休暇でいないライアムの変わりにミ
ッドチルダからの応援が来ています。」

そう言って入って来たのは修道服の女性……ってシルヴィア姉様！

「えーっと……聖王教会所属のシルヴィア・インデックスです……ここ
に配属されているライアムは私に愚弟で……ミリシャ？」

「久し振り…姉様。」

まさかシルヴィア姉様が応援だったなんて……まあ能力的には適任である事もそうだけど……

「何でミリシヤがここに？」

「色々あるの。」

「まあ姉妹の話は後にしてね。ちなみに司令部はなのはさんの保護を兼ねてなのはさんのお家の近所になりまーす！」

まあ物件を手配するのはナタリア姉様に頼んだから必然的に海鳴市になるんだけどね。

「うわー！凄いい近所だ！」

「ほんと……」

「まあこのマンションは私の家の所有だから色々と都合が付きやすいしね。」

「ほら！あそこが私んち！」

「ちなみに私の家はここの最上階よ。」

まあだからこそ臨時の司令部として使う事が出来ただけ……

そうしている内になのはとフェイトは家の中に入り久し振りのユーノのフレットモードと小さいアルフが居て二人は駆けよって行っ

た。

「なのは、フェイト、友達だ。」

「「はい」」

「こんにちは。」

「来たよー！」

やっぱり友達と言うのはさすがとアリサだったわね。

「アリサちゃん、すずかちゃん。」

「始めましてってものなんか変かな……」

「ビデオメールでは何度も会っているのにね。」

「うん…でも会えてうれしいよ。アリサ、すずか…」

軽い自己紹介を終え、私達はそのまま翠屋に向かった。

「ユーノ君久し振りだね。」

「きゅっ…キユー…」

ユーノも大変ね。こっちではフェレットでいないといけないのは……

私達がのんびりしているとリンディ提督の部下の人が何やら持って来た。

中を見ると私達が通っている学校の制服だった。

フェイト達は中でなのは両親と話している提督にどう言う訳か聞
きに翠屋に入って行った。

「あの…リンディていと…リンディさん…これは…？」

「転校手続きは取っておいたから…週明けからなのはさん達のク
ラスメイトね。」

無論その辺はナタリア姉様に事情を説明してフェイトの戸籍の偽造
やクラスを私達と同じクラスになる様に手を回して貰ったんだだけ
ね。

ミリシャSIDE OUT

ナタリアSIDE

「今回は拠点等の手配をして頂きありがとうございます。」

「いえ……例え管理外世界とは言えロストログアや次元犯罪者の逮
捕に協力するのは市民の義務ですし…」

リンディ・ハラOWN提督……確か半年前の事件もこの人の所が担

当だったわね。

今回は長期の滞在になりそうで我が社の力も借りたと言う事で私の所に挨拶に来たのらしい。

まあ協力するのが当然だからと良い挨拶にも来ない連中もいる位だから挨拶に来るだけマシなんでしょう。

近年の管理局の質は落ちて来ているとは聞いていたけど中々優秀な人の様で……父さんと母さんは立場的に管理局の局員と会うのは不味い為、暫くは雲隠れを決め込んでいるらしく管理局の対応を私に任されている。

「それにライアムさんのお姉さんの経営している会社がデバイスまで取り扱っているのは以外でした。」

「それはどう言う意味で？」

「あら……気を悪くしたのなら御免なさい。ただこれほどの高性能のデバイスの部品を直ぐに用意出来る事に素直に驚いているだけです。なぜ今まで注目を受けなかったのが疑問なだけで……」

「簡単な事です。我が社は確かにデバイスを扱っていますけど主に民間の魔導師に対しての
商売で管理局には管理局のお得意様のメーカー等があって我々が入る余地が無かっただけです。」

まあ実際は管理外世界を見下す連中がいない事も無いから管理外世界の企業のデバイス等……とか言って相手にすらない連中がいたからでしょうけど……

「それは行けないわね…私の方からでも報告をして置きますわ。管理外世界の企業に良い商品を扱っている所があると……」

「そうしてくれると幸いです……」

中々喰えない人ね……まあ売上が上がるのなら私も父さんに顔向けが出来から精々売上に協力して貰うわ。

ナタリアSIDE OUT

はやとSIDE

「来たか…」

日が落ちはやてが寝込んだ頃、俺達は動き出していた。

「うん」

ヴィータが来たって事ははやては寝たんだろう。

「管理局の動きも本格的にして来るだろうから今までの様には行かないわね……」

「でもこれしかはやてを救う方法な無いんだ。やるしか無いだろ。」

「はやとの言う通りだ。しかし、少し遠出する事になるな……成るべく離れた世界での収集を…」

俺達はまだ捕まる訳にはいかないからな…

「今、何ページまで来てるっけ？」

「340ページ…この間の白い服の子とはやと君が手に入れた宝石の魔力でかなり稼いだわ。」

「おっし…半分は超えたんだな？ズバツと集めてさっさと完成させよう！」

これだよやく半分か……

「早く完成させて静かに暮らすんだ……はやとと一緒に…」

「そうだな……」

「行くか…もう、余り時間も無い。」

「それじゃあ夜明けどきまでにまたここで……」

「ヴィータ、余り熱くなるなよ。それでこの前、無力化されたんだからな。」

「わーてるよ…」

そして、俺達は魔力の収集の為に飛び立った。

はやとSIDE OUT

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3636p/>

魔法少女リリカルなのは～永遠を生きる者～

2011年3月14日18時13分発行